

平成17年度
企画公募展



襖の下張り展
資料集

ごあいさつ

このたび、越前市武生公会堂記念館では、逍遙園 襖の下張り展資料集を刊行する運びとなりました。

逍遙園は、幕末の武生の豪商松井耕雪（文政2年-明治18年／1819-1885）が、万延元年（1860）に日野川左岸（現越前市姫川2丁目）に建てた松井家の別荘です。逍遙園には、日野川の水を引き入れた池や小高い丘のある広大な庭があり、日野山や村国山を借景としたその景観は、多くの文人墨客に愛されました。建立から130年後の平成2年（1990）、逍遙園は惜しまれながらその姿を消しましたが、襖（正確には障子腰絵）が残され、近年その下張りに耕雪宛の手紙類が用いられていることがわかりました。

武生市教育委員会（現越前市教育委員会）とNPO 法人ラピュタ創造研究所の共催で、平成17年7月に当館で開催された「逍遙園 襖の下張り展」では、発見された手紙類に表された耕雪の幅広い交友関係を出発点として、日本の歴史上大きな転換期であった、幕末・明治期の武生に生きた人々の事績をご紹介します。

本書は、本展の展示資料および、展覧会終了後に新たに確認された資料を掲載したのですが、本書が、幕末から明治にかけての大変革期を生きた先人の軌跡を知るために広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本展開催および本書の制作にあたりご協力いただいた関係各位・機関に厚くお礼申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

平成18年3月

越前市武生公会堂記念館

目 次

ごあいさつ

目 次

凡 例 4

松井耕雪と逍遙園

- 1 松井耕雪 6
- 2 逍遙園 10

幕末・明治期の武生を読み解く

- 3 立教館 24
- 4 福井藩と松井耕雪 32
- 5 北海道へ(山本怡仙と町村金弥) 40
- 6 鳩居堂 48
- 7 書物講 54
- 8 逍遙園文書 59

積 文 61

参考資料 『文久二年上京記』(写) 63

『文久三年上京記』(写)

『諸日記(抄)』(写)

関係人物略図 75

関係地図 76

逍遙園平面図 77

年 表 78

目 録 80

事業概要 82

参考文献 84

謝 辞 85

凡 例

- 本書は、平成17年7月1日から31日まで、越前市武生公会堂記念館で開催した
逍遙園 襖の下張り展の資料集である。
- 本展は、武生市教育委員会(現越前市教育委員会)とNPO 法人ラピュタ創造研
究所の共催で行った。
- 本書には、展覧会終了後新たに確認された資料も掲載されている。
- 資料解説および図版の表記は、資料番号、作者名、資料名、員数、制作年代、
所蔵者の順に記す。
- 本書中の左右の表記は「向かって」を意味する。
- 資料名につけられた□は越前市指定文化財を表す。
- 写真は、当館撮影以外に下記各位・機関から提供を受けた。ここに記して厚く
お礼申し上げます。
井上和治氏 熊谷純三氏 馬越靖郎氏 松井厚氏 米倉まさ子氏
江別市教育委員会 福井市市史編さん室 北海道大学附属図書館 町村農場
- 本書の福井藩と松井耕雪の解説については、本川幹男氏のご指導を賜った。
ここに記して厚くお礼申し上げます。
- 関係資料の解説は、越前市教育委員会文化課嘱託職員真柄甚松が行った。
- 本展のポスター、ちらし等の印刷物のデザインは、越前市教育委員会文化課臨時
職員師田恭江が行った。
- 本書の編集は、越前市武生公会堂記念館の林亜希子が行い、解説執筆はNPO
法人ラピュタ創造研究所の井上和治と林が分担した。解説文の末尾に担当者の
イニシャルを記した。(K.I.)井上和治 (A.H.)林亜希子

松井耕雪と逍遙園

松井耕雪は、文政2年(1819)府中大黒町(現元町)の鎌問屋に生まれる。名は篤。通称六右衛門。翠堂、雙峯處士、蘆山樵隱、芋栗山人などと号した。

嘉永6年(1853)府中の藩校「立教館」の創設を図り、安政3年(1856)には巨額を投じて館舎の建造に協力し、さらに館の教育方針を上申し、蔵書を寄贈するなど、府中における学問の興隆を助ける。また同時に府中医学所「思精館」の設立にも貢献している。

安政5年(1858)家督を息子の仙之助に譲り、数え歳40にして隠居した。同年12月、熊本から招かれて福井藩の政治顧問になっていた横井小楠に初めて会い、安政6年(1859)一時帰国していた小楠を熊本に訪ね、帰路、西南諸道を視察している。帰国後、福井藩制産係世話を命じられたといわれている。さらに同年7月頃設立された府中制産役所の元締役を命じられ、府中の特産物である打刃物などの販路拡大を図った。文久元年(1861)11月には、福井藩産物会所元締役を命じられ、福井藩のすすめる積極的な殖産興業政策にも関与した。この間、万延元年(1860)には、隠居所として府中の郊外東南の地に文人遊息の地「逍遙園」を築いている。

明治3年(1870)耕雪は福井藩の藩政改めで大属に任命される。翌明治4年(1871)廃藩置県で足羽県が置かれると中属に、明治5年(1872)には敦賀県の権大属に任命される。明治9年(1876)敦賀県廃止につき退官、同年京都に移り、明治10年(1877)京都府史編輯嘱託に任じられる。明治14年(1881)には京都鳩居堂の別宅に移り住み、風流の道に生きた。明治18年(1885)耕雪はこの別宅において66歳でその生涯を閉じた。(K.I.)



松井耕雪 [明治13年(1880) 61歳]



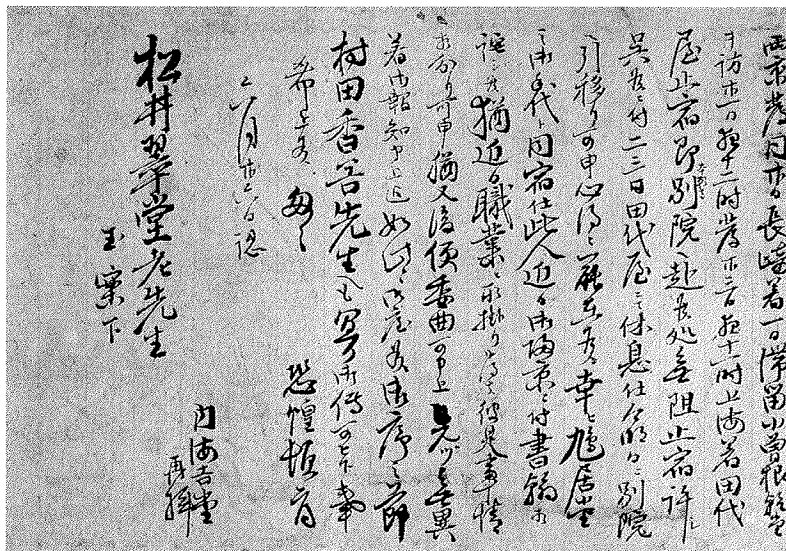
耕雪松井翁碑
[明治23年(1890)建立／龍泉寺]



1 松井耕雪筆「山水図」 一幅
明治17年(1884)
越前市武生公会堂記念館



2 松井耕雪筆「松梅図」 対幅
幕末～明治時代(19世紀)
個人蔵



「内海吉堂書簡」
6月26日付

3 松井耕雪宛書簡等貼交屏風 六曲一隻 明治初期(19世紀) 個人蔵

屏風の左半分である第4扇から第6扇にかけて、渡邊洪基・悌二郎兄弟、杉田定一、山中猷(信天翁)、画家の内海吉堂・行徳玉江、心学者の柴田遊翁、儒者の神山鳳陽等の、主に耕雪宛の書簡等計17点が貼られた屏風。

明治10年(1877)のものと思われる内海吉堂の書簡(第4扇1段目右)は、京都を出発して長崎経由で上海に到着するまでの行程が記されており、篆刻家・書家としても知られる長崎の豪商小曾根乾堂を訪問したこと、上海に無事到着したことを報告している。

その左側の渡邊洪基の書簡(第4扇1段目左)には、耕雪の写真を1枚欲しいこと、敦賀港で再会することなどが記されている。

これらの書簡は、内容から耕雪が武生を離れた後のものを中心になると考えられ、耕雪の幅広い交友関係をうかがうことができる資料である。(A.H.)



4 松井耕雪・森余山等書画図屏風 二曲一隻 文久2年(1862)・明治5年(1872) 個人蔵

耕雪と森余山、^{おとりせつ}禅僧鴻雪爪、^{また うんしや}画家時田雲處等の合作の書画が銀地に貼られた屏風。図中の余山と耕雪の記述等によれば、文久2年(1862)8月「清香書屋」に雪爪、余山、耕雪、雲處が集い、酒の席の座興として同じ韻を踏んだ漢詩(七言絶句)を各自が詠み揮毫したが、耕雪は何も記さなかった。その後、耕雪が「主人」を訪ねた際に、この合作書画図を示され、余白を埋めてほしいと頼まれたため、明治5年(1872)に一枝の梅を描き加えたという。漢詩4首のうち雪爪が2首、余山と雲處が1首ずつ詠んでいるが、雲處が雪爪と余山の作品を代筆している。また松の盆栽と人物は雲處、梅の枝と菊は耕雪が描いたと思われる。

「清香書屋」とは、白梅窓清香と号し、福井藩の御用商人を務めた米問屋の山口小左衛門宅のことと思われ、清香は文久3年(1863)に耕雪と共に福井藩の命により上洛している。清香は橘曙覧とも交流があり、曙覧の『^{しのぶのや}志濃夫廼舎^{かしゅう}歌集 第二集緇裾艸』にその名が見え、曙覧が嘉永元年(1848)に藁屋を建立した際の後援者の1人であった。本図の余白を埋めるように頼んだ「主人」も、清香である可能性がある。

鴻雪爪は、安政4年(1857)福井藩主松平春嶽の招きで岐阜大垣の大昌寺から福井の孝顕寺住職となった禅僧で、横井小楠と親交があり、文久2年(1862)逍遥園を訪れた大垣藩の小原鉄心とも大垣在住時に交友を結んでいた。本屏風は、当時の文人たちの交流の様子や、耕雪をめぐる多彩な人間関係を知ることができる貴重な資料といえる。(A.H.)

逍遥園は、隠居した耕雪が文人遊息の地として府中の東南の地に築いた別荘である。万延元年(1860)3月に工事を始め、同年12月末に竣工している。『松井耕雪翁伝』(昭和9年発刊)によれば、総工費は銀48貫792匁7分8厘で、金1両を銀75匁とすると、約650両となる。現存する棟札(No.5「逍遥園棟札」)には、施主である松井六右衛門(耕雪)と、棟梁である森七太夫、内藤惣右衛門の名が記されている。

広大な敷地を誇った逍遥園には、敷地内の6景と敷地外の6景の計12景が設けられていた。ここに諸藩の人材を招き、留まって遊ばんとする者には意の俤にまかせたので、そのパトロン精神が四方に聞こえ、有能な人士が日本中から盛んに往来した。

逍遥園 籬内六景

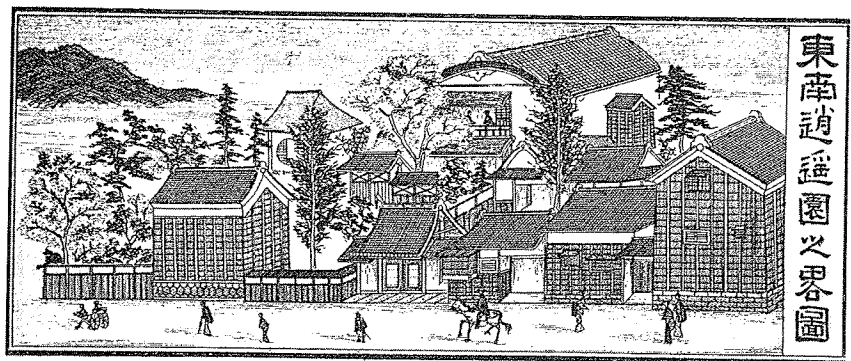
延翠楼 逍遥園本宅
 樅 岡 モミなどのそびえ立つ岡
 望遠処 遠くの山々を望めるやや高い岡
 涵碧池 水が一面にひろがる清らかな池
 柳 嶋 しだれ柳の見える中島
 魚楽亭 泳ぐ魚を眺められる池上の四阿^{あずまや}

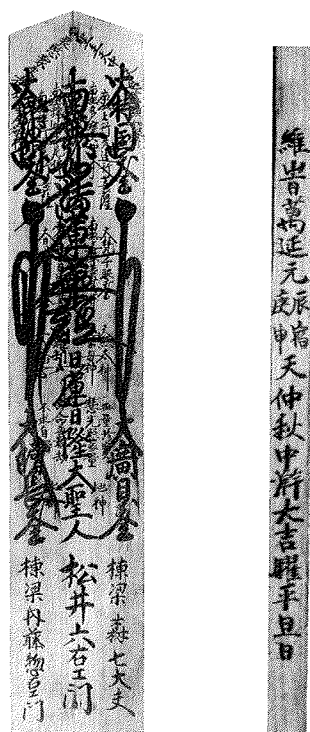
逍遥園 籬外六景

雛 峰 日野の秀峰
 龍 潭 龍が住む日野川の龍ヶ淵
 帆 村 帆山村の佇まい
 日 溪 日野川の明け暮れ
 東 林 東に広がる林野
 芦 山 中国の芦山に似た村国山

文久3年(1863)頃、耕雪は逍遥園を府中領主本多公に献上している。また明治2年頃(1869)には、福井藩によって大坂から連れ戻され謹慎を命じられた関義臣が一時ここに仮住まいした。さらに明治17年(1884)、本多家から米倉忠七に売り渡されている。以来、100年以上にわたり米倉家が所有してきたが、平成2年(1990)宅地造成のために解体された。元逍遥園の敷地の一部に、現在は、吉田皮膚科医院(現姫川2丁目)が建てられている。(K.I.)

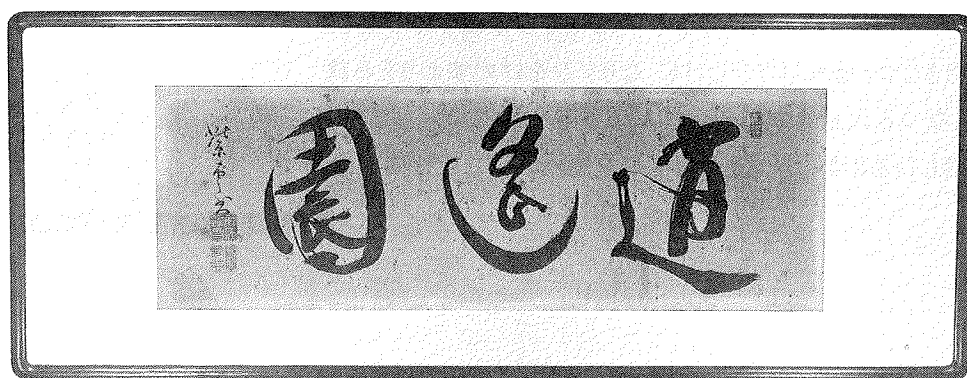
逍遥園(『福井県下商工便覧』より)
 明治20年(1887)発行



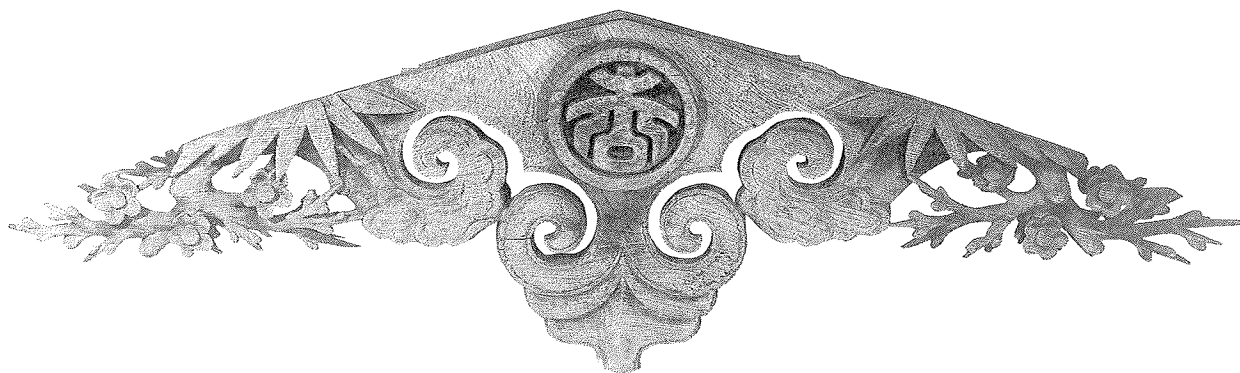


5 逍遙園棟札 一面
万延元年(1860)
越前市立図書館

(左側面)



6 本多副昌筆「逍遙園」扁額 一面 江戸末期(19世紀) 越前市立図書館



7 逍遙園懸魚 一点 江戸末期(19世紀) 個人蔵

■ 橘曙覧と逍遙園

橘曙覧は、府中上本町（現天王町）の天王屋山本家で育った。後に正岡子規によって、「万葉集以後、歌人らしい歌人は曙覧あるのみ」とまで激賞される曙覧は、文化9年（1812）福井城下九十九橋南詰めで裕福な紙筆墨商の長男として生まれたが、母つるを2歳の時に亡くし、その後、母の実家である山本家に引き取られて成長した。耕雪と後に義兄弟の約束を結ぶ山本怡仙は、曙覧の育ての親である山本金四郎の子である。すなわち、曙覧と怡仙は従兄弟の関係になる。この天王屋の斜め前に耕雪の店があった。

その曙覧が、逍遙園に遊び、「松井氏逍遙園之記」を残している。（No.8井手今滋編『橘曙覧全集』所収「藁屋文集」）

せうえう[逍遙]といふ事こそをかしけれ、さるはらからのものなるを、もとよりのころの物いひめきて、ふるくより歌ぶみなどにも、人あやしまでとりもちふるよ、（中略）園のうちのつくりざまあやしう物ふかく、木だちひるをくらうしげらひたるに、鳥どものさひづりかはす声々、けどほきみ山に入りたらんやうにて、いみじうをかし、（中略）誠にいとよきせうえうどころぞ。

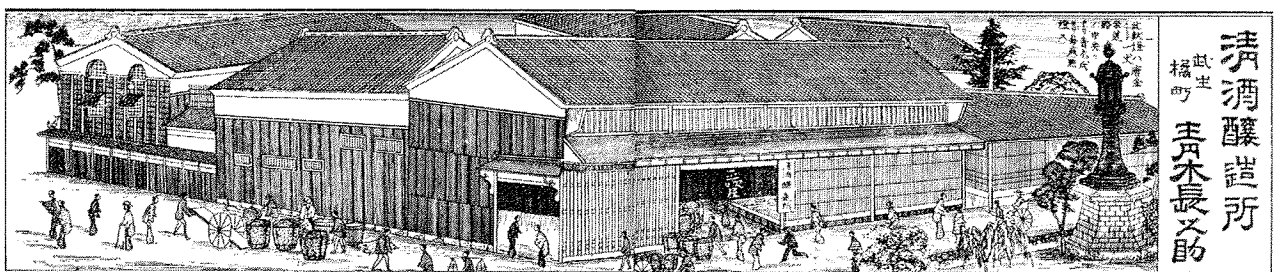
と逍遙園の幽邃な趣と主の風雅の心を讃えている。

曙覧は世を捨て極貧の中で歌人としての生活を送るが、晩年に至るまで耕雪との交流を続ける。（K.I.）

府中の松井耕雪が、大きな黒木もてつくりたるひをけをくれけるを、膝のへにすえおき、肘もたせ頬づえつきて朝夕の友とす。

撫やまぬ火桶のいろにならひもて みかきをゆかむうたの上をも
よそありきしつゝ帰ればさひしけに なりてひをけのすわりをる哉
旦暮になつる火桶を巖にて つきぬこと葉をおもひめくらす
見ありきしひるの野山の物がたり ひをけにいひて夜を更すかな

（『志濃夫廼舎歌集』第二集「襦袢艸」）



平吹屋（『福井県下商工便覧』より） 明治20年（1887）発行

たよりよからんやうにこゝに書つけくれよとの給へるによりあるやう
をかくは物しつ後の寺務しり給はん院主君たちの此賜ものをよに傳
へてもあかまびわか心おこなひならひ給へとの下の御心おのつかう
ちこもりてあるらんと文久元年辛酉夏

松井氏道遠園之記

せうえうといふ事こそをかしけれさるはからのものなるをもとよりの
こゝの物いひゆきてふるくより寄ふみなどにも人あやしまでとりもち
ふるよげにおほかたのもじこゑのやうにこわこわしうはあらでうちぎ
うなつかしうさへぞあなるにや、こをとりてなりどころの名にし給へる
いとつき／＼し園のうちのつくりきりまあやしう物ふかく水だちを
くらうしげらひたるに鳥どものさびづりかはす聲々げどほきみ山にい
りたらんやうにいていみじうをかし魚樂亭といふか池水にのぞきてたて
る魚むれてこのしたをく／＼あそぶ遊園のあなたに青山いくつと
なくみゆる中に離がだけのひとりむれをいで、我はがほなるをかし

松井氏道遠園之記

百八十五

ひの川水音たかうひやくねさめしたる曉なとに就そばだて、聞たらん
物すこきけさへそひてこよなうこそをかしからめ島このみ給ふかたの
たくみはさるものにて、かうたちひろごりたる千さとのながめを魚樂亭
のちひさき窓のうちにとりあつめつねすき給ふ唐うたの題にし給はん
誠にいとよきせうえうどころぞ

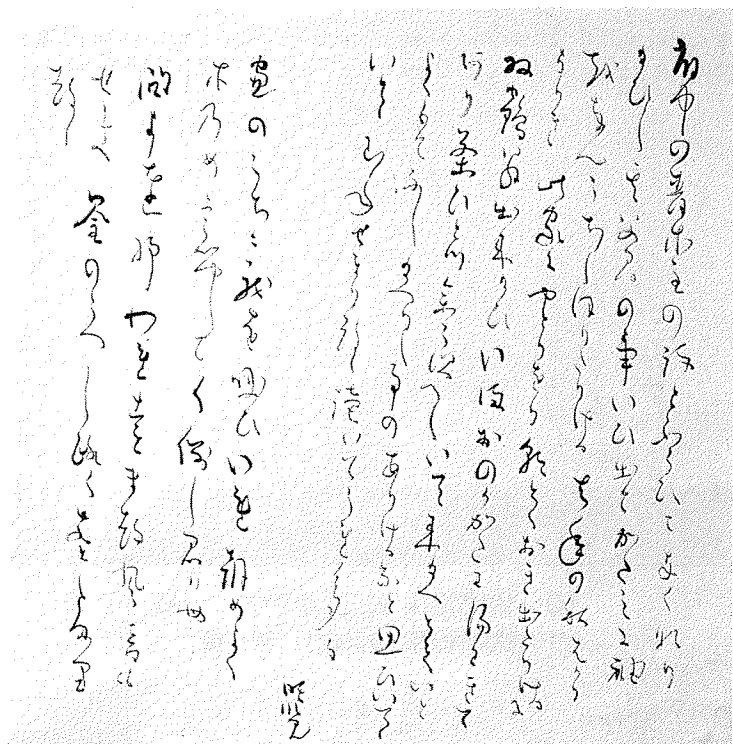
たなはたつめ

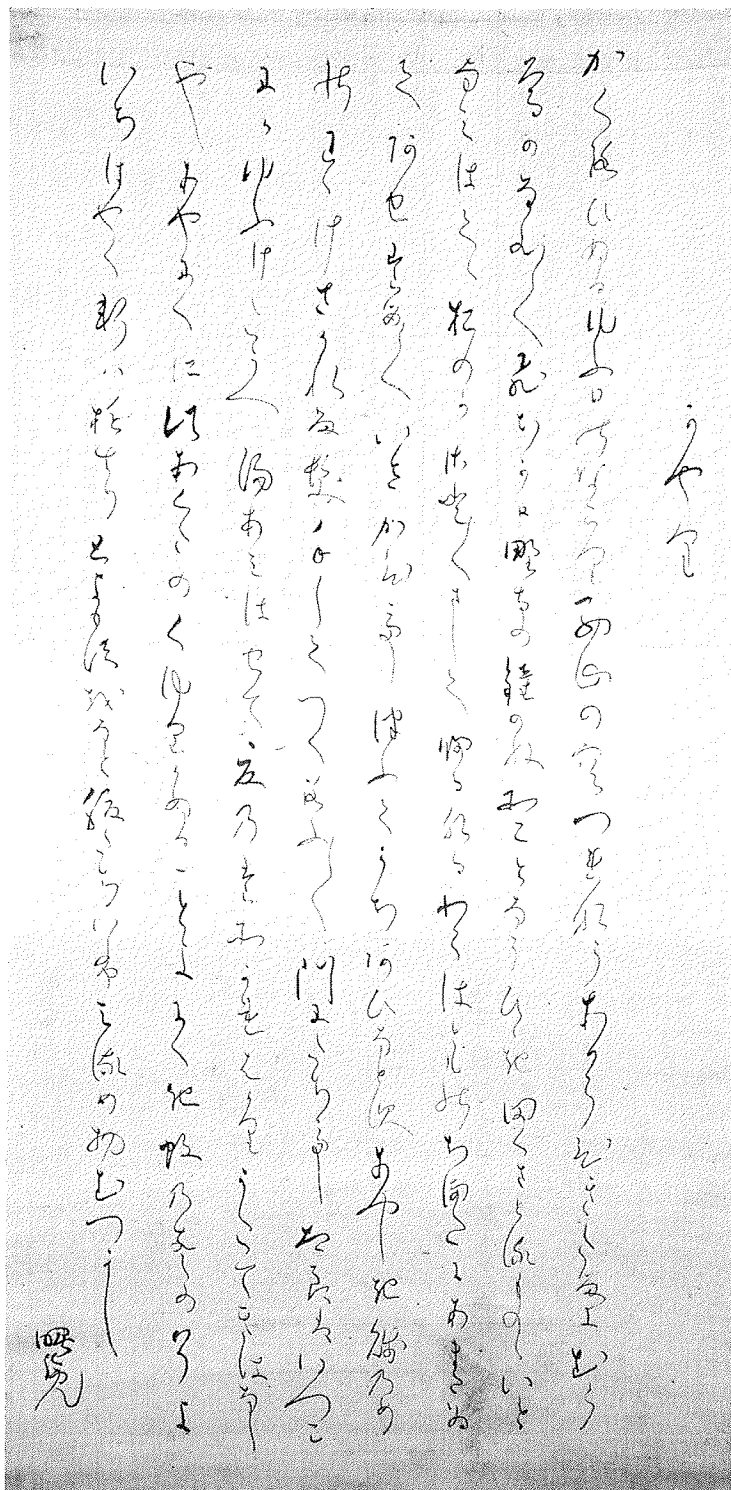
をんなのすべきわざのなにはあれと、たちぬひはたおるわざなんぞのこ
のたがへしするにたぐへてもとおもんすべきわざなりけり、人のみ
のうへあまたにわかるならひなれば其ほど／＼にしがひて朝夕のつ
とめはたしな／＼ひとやうにはあらざることはなる物からをんな
の身にとりて此わざのみはがみなかしもおしとほりてむねとこゝろ
えをらではえあるまじきなれば品たかきみあたりなりともよきほどに
てうちやり給ふべきならじをさやうの事は下さまのをんなこそあらめ
やんごとなき家とうじといはるゝきはにいたりてはおくまりたる所に

百八十六

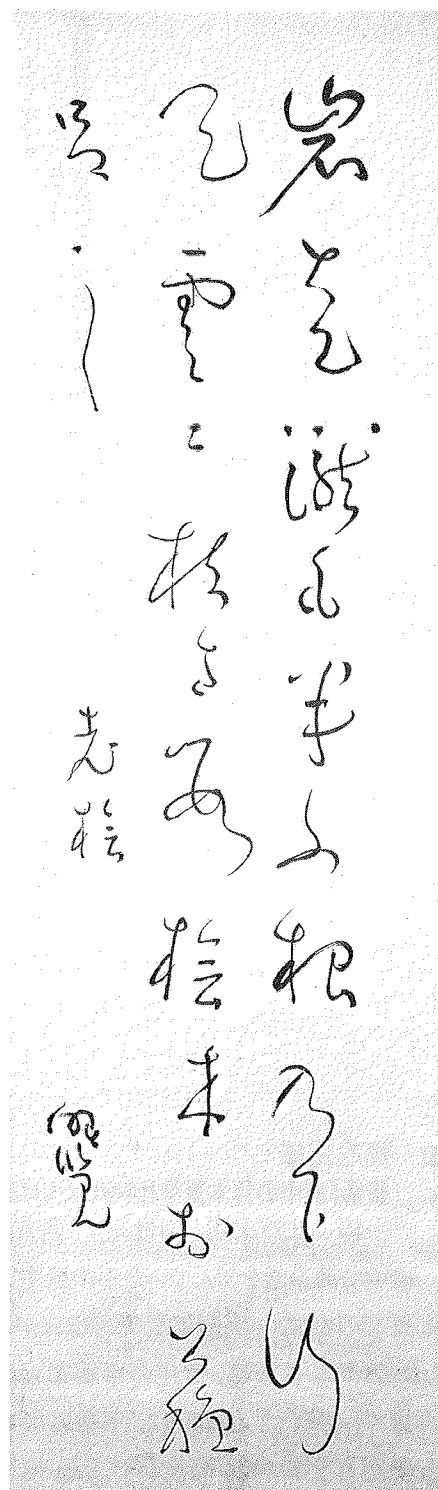
8 井手今滋編『橘曙覧全集』 一冊
昭和2年(1927)発行
越前市立図書館

- 9 橘曙覧筆
書幅「府中の青木夏彦とふらひたりけるに」
一幅 江戸末期(19世紀) 個人蔵
府中で酒造業を営んでいた平吹屋主人青
木夏彦の亡父への追悼文。和歌2首が添え
られている。夏彦は、今庄の京藤甚五郎の
三男で、安政5年(1858)に、平吹屋青木庄
左衛門家を継いだ。酒造業の傍ら、曙覧に
師事し国学を学んだ。
本作は、曙覧の歌集『志濃夫廼舎歌集』
の第三集「春明艸」(No.8井手今滋編『橘曙
覧全集』所収)に、掲載されている。(A.H.)





10 橘曙覧筆 書幅「かやり」 一幅
江戸末期(19世紀) 個人蔵



11 橘曙覧筆 和歌幅「老檜」 一幅
江戸末期(19世紀) 個人蔵
「岩走る瀧もはふ根の下行／乙雲に
枝さす檜おそ／ろし／老檜／曙覧」



米倉忠七 [明治40年(1907) 74歳]

■ 米倉家

米倉家は、明治以前は水屋と名乗り、明暦年間(1655-1658)より府中馬面町(現平和町)に住み、綿や麻糸の販売を家業としていた。水屋長三郎の代に、近江の木之本より蚊帳織の職工を招き寄せ、文久元年(1861)から府中で初めて蚊帳を製造したという。長三郎は、明治7年(1874)に琵琶湖上にて船舶事故で亡くなるが、その功績を称えるために府中での蚊帳創業50周年あたる明治43年(1910)、引接寺境内に長三郎の顕彰碑が建立された。

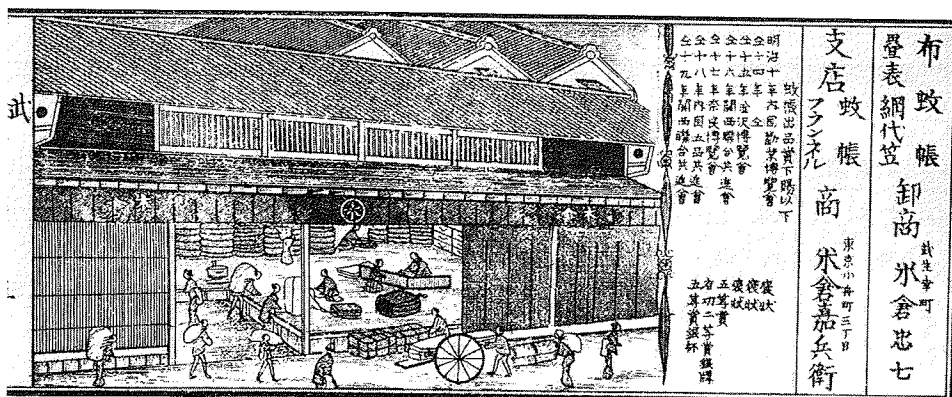
米倉家を継いだ長三郎の甥の忠七の代には、府中での蚊帳生産は順調に発展し、東京に支店も出し、弟嘉兵衛が経営にあたっていた。

米倉家に伝わっていた逍遙園の「売券證」(17頁参照)によれば、明治17年(1884)に、逍遙園は和田彦六から塚町の円妙寺(円明寺)住職井上日勇に1,400円で売られているが、日勇の代理として忠七が川上源三郎や天井清平らと名を連ねている。しかし忠七以外の名前の上には割印の押された付箋が貼られ名前が隠されているため、最終的な購入者は忠七であったと思われる。以後、平成2年(1990)宅地造成のため解体されるまで、逍遙園は100年以上にわたって米倉家の人々によって守られていくことになる。

なお、売券證には、1,400円のうち150円を買主である円明寺に寄附すると記されている。当時円明寺には、耕雪の六男頼介が弟子入りしていた。(A.H.)



12 米倉忠七像衝立 一面 不詳 個人藏



米倉商店(『福井県下商工便覧』より) 明治20年(1887)発行

大門河原村第十六号廿三番地	賣券證
第五十七号	一宅地
第九十四号	一本屋
第五十五号	一土蔵
第五十六号	一土蔵
第五十七号	一土蔵
第五十八号	一土蔵
第五十九号	一土蔵
第六十号	一土蔵
第六十一号	一土蔵
第六十二号	一土蔵
第六十三号	一土蔵
第六十四号	一土蔵
第六十五号	一土蔵
第六十六号	一土蔵
第六十七号	一土蔵
第六十八号	一土蔵
第六十九号	一土蔵
第七十号	一土蔵
第七十一号	一土蔵
第七十二号	一土蔵
第七十三号	一土蔵
第七十四号	一土蔵
第七十五号	一土蔵
第七十六号	一土蔵
第七十七号	一土蔵
第七十八号	一土蔵
第七十九号	一土蔵
第八十号	一土蔵
第八十一号	一土蔵
第八十二号	一土蔵
第八十三号	一土蔵
第八十四号	一土蔵
第八十五号	一土蔵
第八十六号	一土蔵
第八十七号	一土蔵
第八十八号	一土蔵
第八十九号	一土蔵
第九十号	一土蔵
第九十一号	一土蔵
第九十二号	一土蔵
第九十三号	一土蔵
第九十四号	一土蔵
第九十五号	一土蔵
第九十六号	一土蔵
第九十七号	一土蔵
第九十八号	一土蔵
第九十九号	一土蔵
第一百号	一土蔵

売券證に付いていた平面図

拙者ニ於テ整理ヲ遂メ貴殿江
 御迷惑相掛ケ申聞敷候爲後
 日資券證如件
 明治十七年一月一日
 南條郡大門河原村
 第十六号廿三番地
 賣主
 和田廖六
 保証人
 平野衛士
 今立郡塚町村
 円妙寺住職
 井上日勇殿
 代理
 武生町
 米倉忠七
 川上源三郎
 天井清平
 殿
 殿
 殿
 前書之通り相違無之候也
 明治十七年二月五日
 右村区長
 田中伴藏

逍遙園売券證(『在りし日の武生の文化サロン 逍遙園』より) 明治17年(1884)



13 逍遙園真景図衝立 一面 明治20年(1887) 個人蔵

南画において、現実存在する風景を描いたものを真景図と呼ぶが、本図は、逍遙園の庭園を描いた作品。画中の賛によれば、米倉忠七が逍遙園を買い取って3年後の明治20年(1887)の初夏、米倉(忠七)氏の求めに応じて描かれたという。「古越無涯逸史潤」と款記されるが、作者については不詳。逍遙園に再遊したと記されており、耕雪と交友のあった絵師である可能性も考えられる。

画面右手前に広がる大きな池から、柳のある池の中島(柳嶼)、左側の村国山(芦山)を中継点として、中央に高くそびえる日野山の頂に視線が誘導される構図となっている。また、左側から池に迫り出している建物は、橘曙覧が「千さと(千里)のながめを、魚楽亭のちひさき窓のうちにとりあつめ」と「松井氏逍遙園之記」で記した、「魚楽亭」と思われる。失われた府中の名勝の趣を、写真以上に今に伝える貴重な資料である。(A.H.)



逍遙園
 (東側庭園より主屋を望む)
 昭和9年(1934)9月



逍遙園庭園
 昭和9年(1934)9月



逍遙園庭園
 昭和初期

■ 馬越祐一

馬越祐一は、明治35年(1902)愛媛県伯方島に生まれる。大正13年(1924)英語教師として武生中学校(現武生高校)へ赴任、以後35年間同校で教鞭をとる傍ら、油絵を描いたことで知られる。

馬越は、昭和14年(1939)9月頃、管理人として一家で逍遙園に移り住んだ。馬越は前年の昭和13年(1938)の春から翌年の8月にかけて弟の寿恵夫、次男の尋、父の伝之丞、妻のサヲを相次いで結核のため亡くしている。逍遙園に来た頃は妻を亡くした直後であり、おそらく家族を失った悲しみで意気消沈していたものと思われる。事実、制作意欲を取り戻すまでには時間を要したようで、この時期を境に馬越の作風は変化していく。1940年代前半に描かれた「花と桃」(No.14)は、逍遙園の庭園を背景にした幻想的な雰囲気のある作品であるが、水の入ったグラスや籠に盛られた桃、百合などの花がまるでお供えのように置かれおり、亡くした家族への鎮魂の思いを込めて制作された作品であるのかもしれない。



馬越祐一 [昭和38年(1963) 61歳]

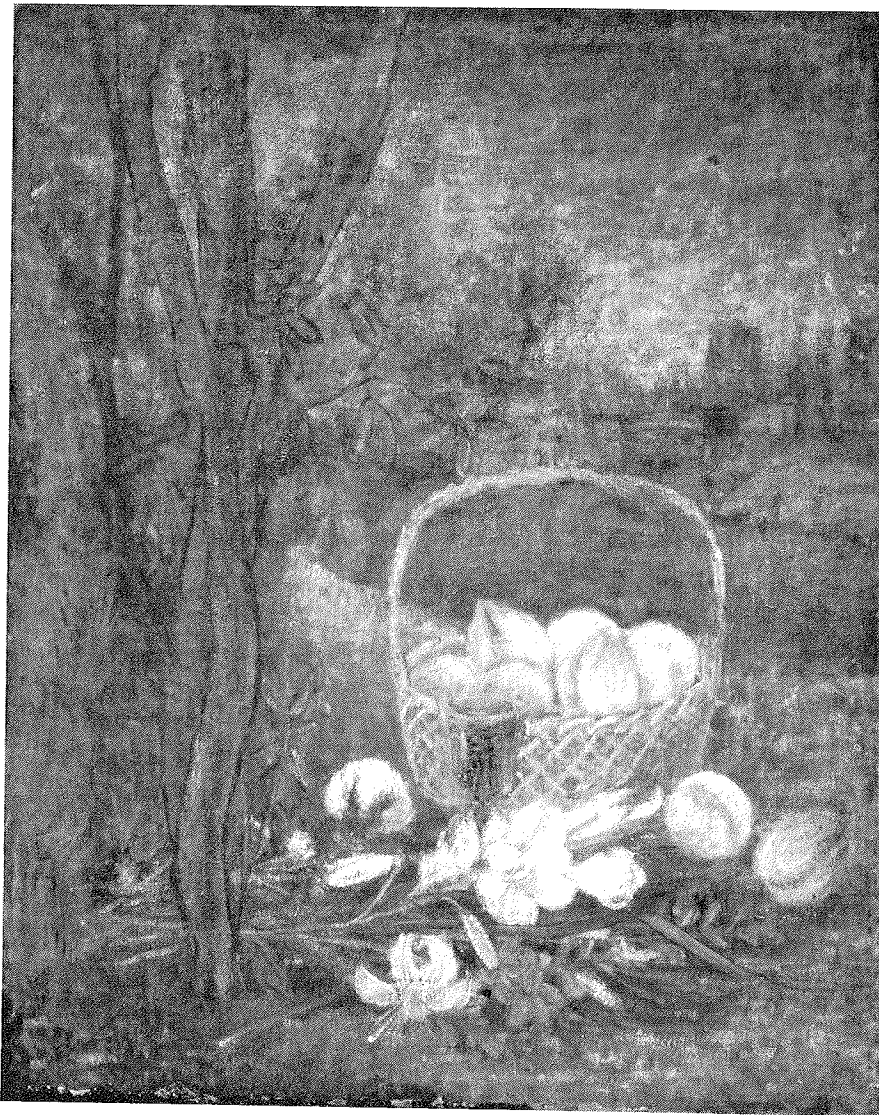
馬越は地方の一介の英語教師とは思えぬほど、中央の画家や文化人などと交友関係を築いていたことで知られるが、馬越が逍遙園に住んでいた頃もこうした人々が訪れたようである。生物学者の岩田久仁雄に宛てた昭和14年(1939)12月15日付の手紙には、洋画家の寺田政明と北川民次が最近訪れたことが記されている。同年12月に北荘美術協会主催のメキシコ児童画展が開催され、北川民次と寺田政明が来福しているため、その際に逍遙園の馬越を訪ねたものと思われる。

馬越は昭和18年(1943)の夏頃、蛭子町(現本多1丁目)の津田医院の借家に移るが、耕雪の時代に逍遙園が文人墨客の集まる文化サロンであったのと同様に、馬越がいた数年間も逍遙園は馬越を中心とする交友関係が花開いた場所であったのかもしれない。(A.H.)

馬越と一緒に写っている女性は、昭和15年(1940)10月に再婚した妻節子(旧姓清水)。翌昭和16年(1941)には、三男の淳が生まれており、逍遙園は馬越の家庭生活においても転機の間であった。(A.H.)



逍遙園の馬越夫妻 昭和15～18年頃(1940～43)



14 馬越祐一「花と桃」
1940年代
越前市武生公会堂記念館



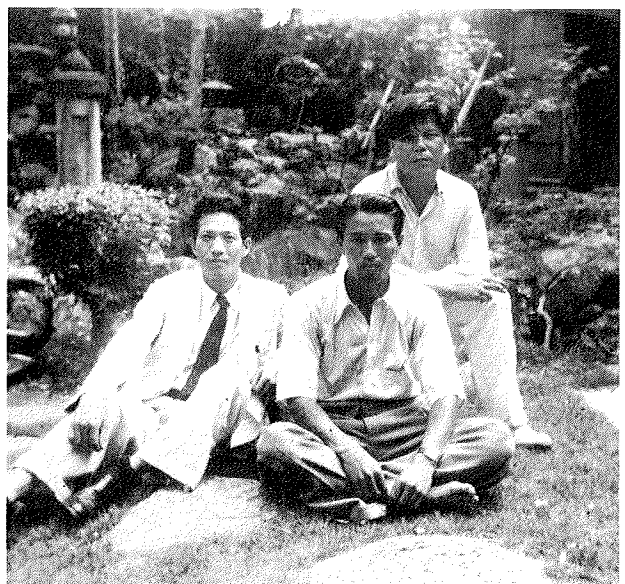
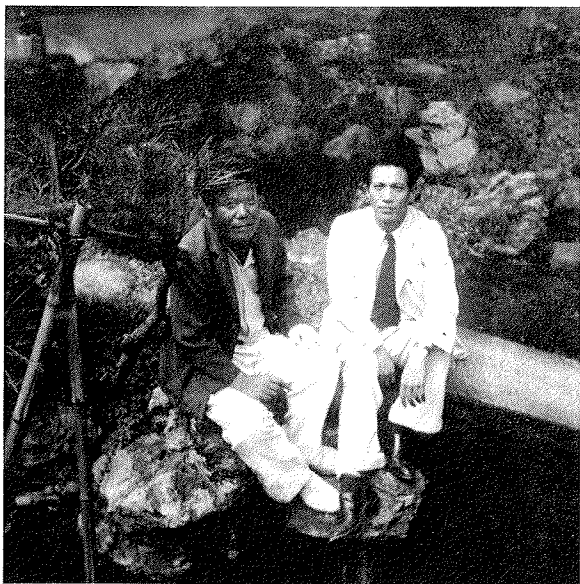
15 馬越祐一「砂丘の貝がら」 昭和35年～38年頃(1960～63) 越前市武生公会堂記念館

生物学者の岩田久仁雄は、昭和9年(1934)理科の教師として武生高等女学校(現武生高校)に赴任したのをきっかけに、馬越との交友が始まった。岩田は昭和12年(1937)に武生を去るが、以後も交流が続き時々武生の馬越を訪ねていたという。(写真左端が馬越、右端に寝そべるのが岩田)

馬越が妻サヲを亡くした昭和14年(1939)、岩田は馬越を慰めるために貝殻を贈っている。おそらくそれは以後の馬越の作品の主要モチーフとなる大きなしゃこ貝であったと思われる。馬越は岩田に宛てた昭和14年(1939)10月25日付の手紙に、「あんな立派なモチーフを送ってもらふとうれしくてうれしくて幾度となくなぶり廻しています(中略)今日は淋しい私の家にあかりがついたように皆うれしそうだ」とその喜びを記している。(A.H.)



逍遥園の馬越と岩田久仁雄ら 昭和14～18年頃(1939～43)



逍遥園の馬越と寺田政明ら 昭和14～18年頃(1939～43)

馬越は、昭和8年頃(1933)から土岡秀太郎や堀田清治、名村定志らによって結成された北荘画会に参加する。当時北荘画会は、福井の芸術文化の向上を目指して頻繁に洋画講習会や、展覧会を開催していた。洋画家の寺田政明も、昭和12年(1937)7月に福井駅前のアルト会館で開催された第5回洋画講習会に須田国太郎、川口軌外らとともに講師として招かれている。また同年9月には福井市の喫茶店で寺田の個展が開催されている。馬越と寺田の交友はこの頃から始まったと思われる。馬越は寺田を通じて同じく洋画家の麻生三郎や井上長三郎、北川民次らと知り合った。(A.H.)

幕末・明治期の
武生を読み解く

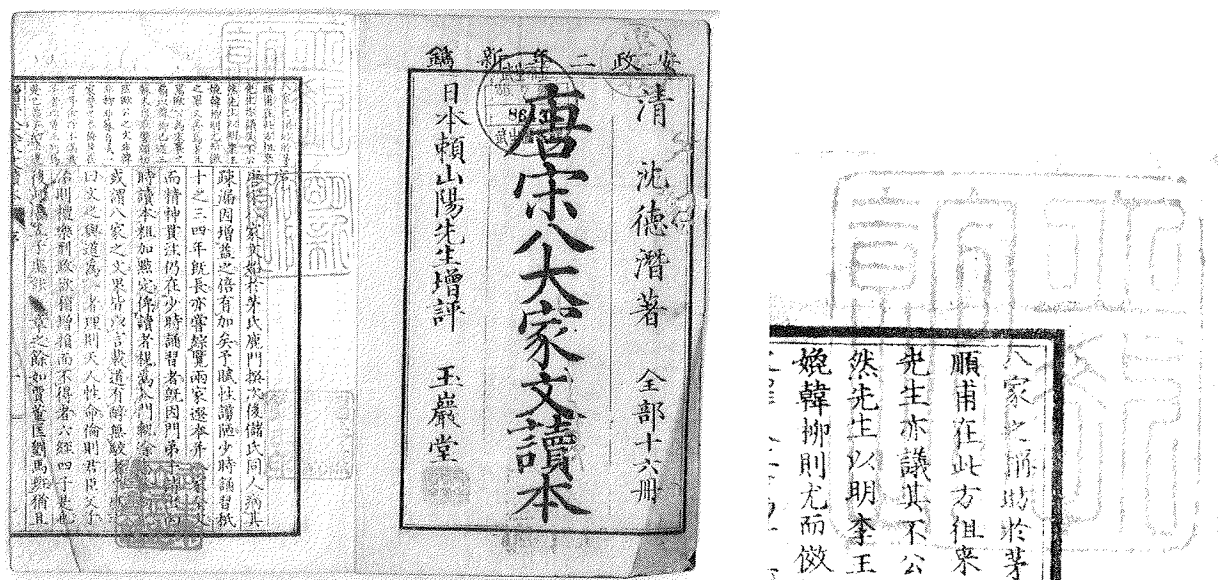
江戸時代後期、各藩は人材育成のため主に藩士の子弟を対象とした教育機関である藩校を開設した。若越の諸藩においても、安永3年(1774)の小浜藩の順造館を皮切りに、文化元年(1804)丸岡藩の平章館、同11年(1814)鯖江藩の進徳館、文政2年(1819)福井藩の正義堂、天保12年(1841)勝山藩の成器堂、同14年(1843)大野藩の明倫館と次々に藩校が開設されていった。

若越諸藩のこうした動きを受けて、府中でも安政3年(1856)に開設されたのが立教館であった。耕雪は藩校設立のためにと、私財300両を7代領主本多富恭に献じ、富恭はこれを受け早速松本右馬丞(松本晩翠)と土生多忠を造営奉行に任じ、松原通り東南の地(現在のNTTの場所)に建坪48坪の校舎を建設、立教館と命名した。また立教館の句読師を務めた大谷弥学は、明治44年(1911)に、立教館の開設にあたっては、家老の平野清兵衛と高木七左衛門、本多家儒者の沖薊斎と竹内確斎、耕雪と同じく商人の山本怡仙が相計り建設に着手したとも記している。耕雪は、立教館開校にあたって、建設資金だけでなく蔵書も寄附し、富恭の諮問に応じて立教館の教育方針や規則、履修教科、教員組織案なども提出したという。

立教館は元治元年(1864)に本多家館内に、またその後松原通りの北側(現公会堂記念館)に移転し、明治2年(1869)の版籍奉還頃まで存続したといわれている。明治5年(1872)に引接寺と陽願寺を仮校舎として進脩小学校(現武生東小学校)が開校するが、「進脩」の名称は立教館の教員であった谷口安定が立教館の別称「進脩黌」から採ったもので、立教館の精神を継承したいとの志がその背景にあったものと思われる。なおこの進脩黌という別称は、文久2年(1862)頃、福井藩主松平春嶽が立教館を「進脩書院」と命名し、その名を揮毫したことによるという。(No.20 松平春嶽筆「進脩書院」扁額)

立教館からは、後に東京府知事や帝国大学(現東京大学)の初代総長等を歴任した渡邊洪基や、明治初期に農商務次官を務める等官僚として活躍した斎藤修一郎、学習院教授となった松本源太郎等の逸材が輩出された。耕雪が蒔いた種は、明治期に大きく結実したといえるだろう。

現在公会堂記念館前にある「建学記念碑」は、耕雪の立教館開校に対しての功績を顕彰するために、耕雪の没後50年にあたる昭和9年(1934)に建立されたものである。なお、この時に記念の展覧会が公会堂にて開催され、『松井耕雪翁伝』も刊行された。(A.H.)

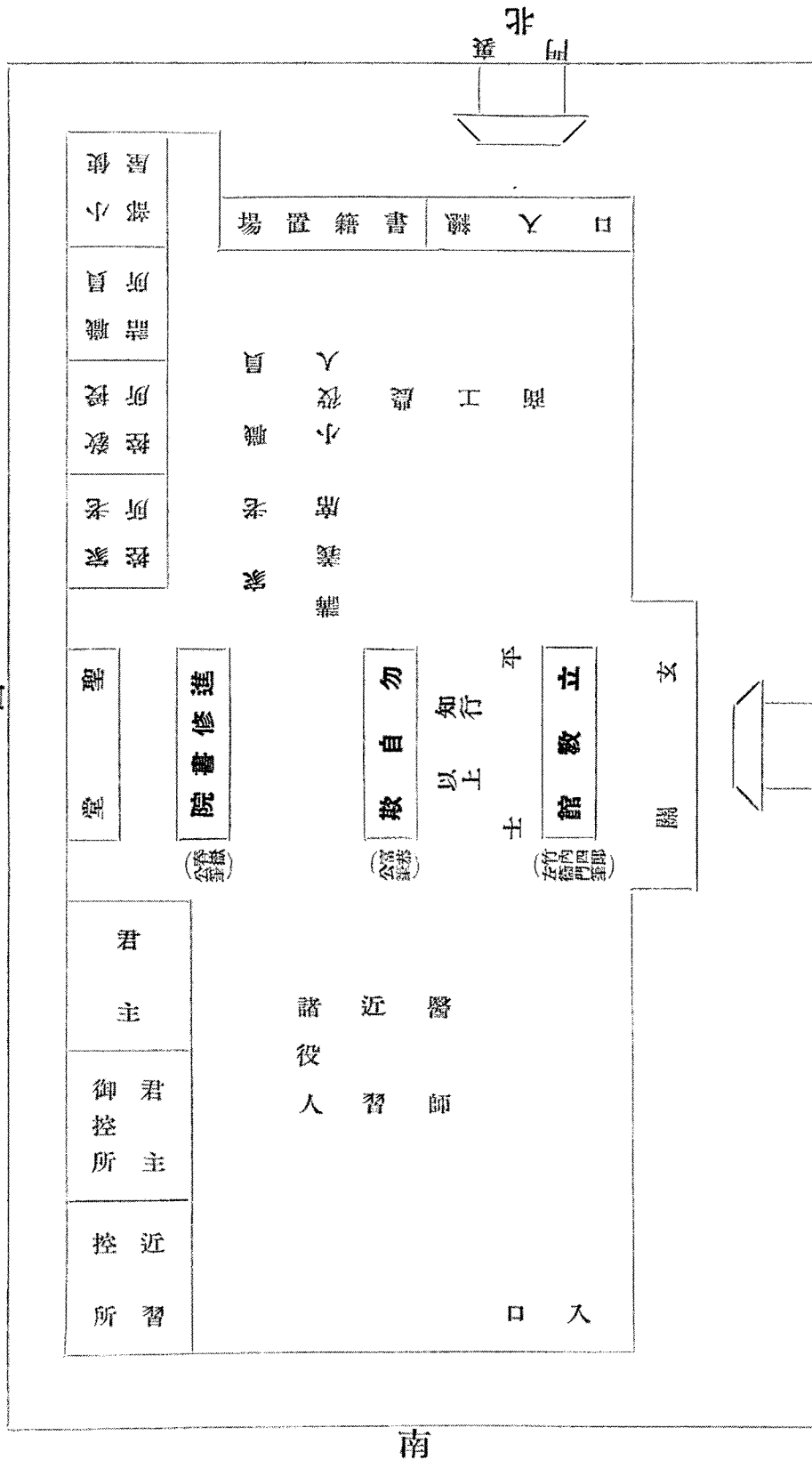


18 増評唐宋八大家文読本(立教館印) 一冊 安政2年(1855)発行 越前市立図書館

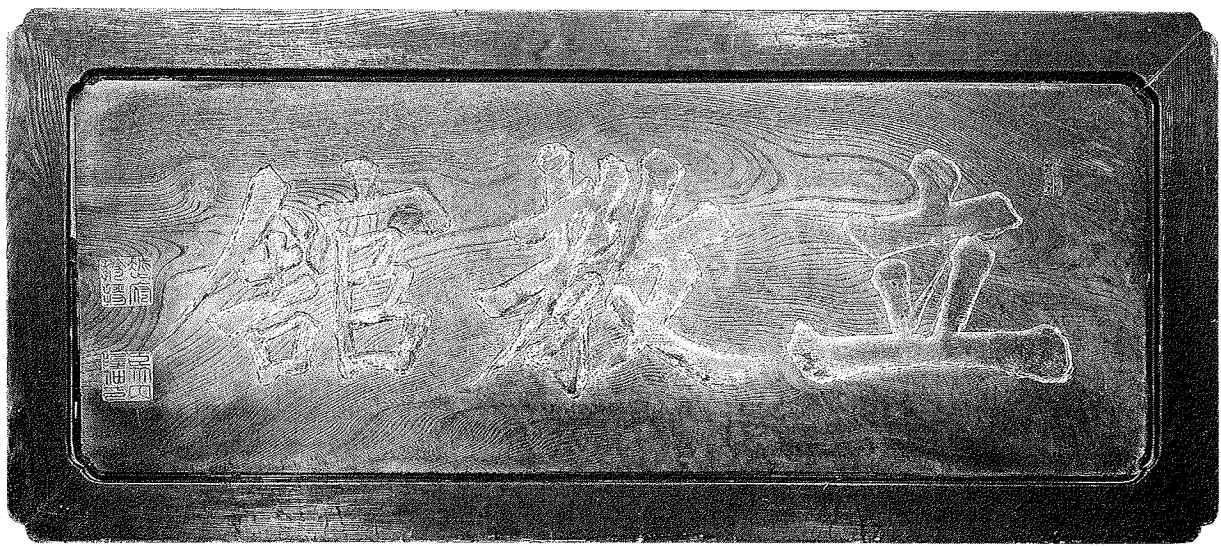
舊府立教館略圖 但聽講式場（建坪四十八坪）

表門

每月六次聽講平素は兩局に分ち南は講義室北は素讀室地所
 先は現今逢萊區瓜生病院（今窪田醫院）のあるところ又移轉
 先は裁判所の東南松八樓附近（今福井銀行武生支店）なり



立教館略図（『松井耕雪翁伝』より）



19 □竹内確斎筆「立教館」扁額 一面 安政3年(1856) 越前市武生東小学校



20 □松平春嶽筆「進脩書院」扁額 一面 文久2年頃(1862) 越前市武生東小学校

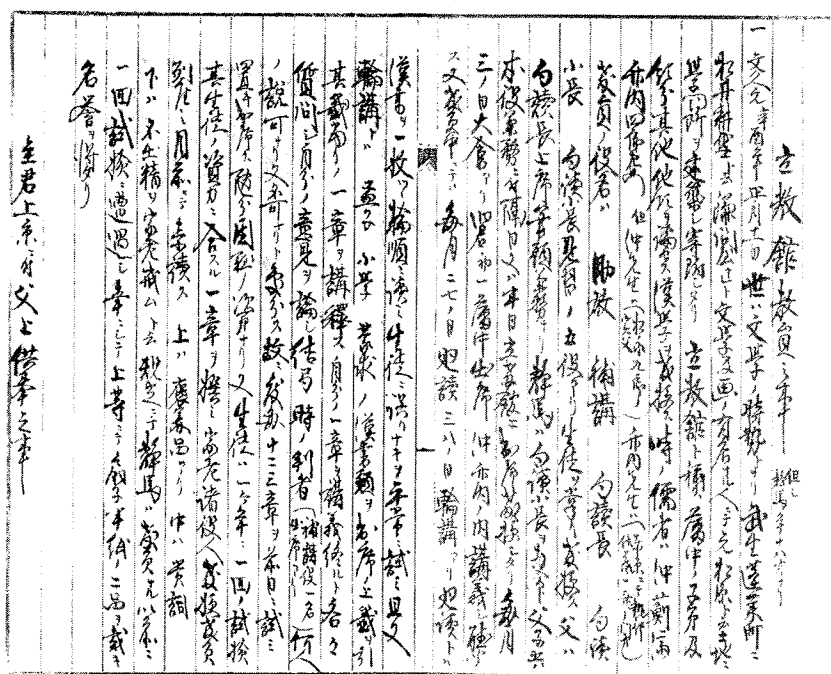
■ 立教館教員

立教館の創立にあたっては、開校に関わったとされる本多家の儒者であった、沖薊斎が教授に、薊斎の甥にあたる竹内確斎が助教に任じられた。薊斎は京都で朱子学を学んだ竹内無因斎の次子で、確斎は無因斎の長子竹内露堂の長子である。確斎は、父霞堂が没した後江戸に出て、二本松藩の藩学教授や昌平坂学問所の教官となった安積良斎に5年間学んだという。

立教館創立教員名列(創立当初)

『松井耕雪翁伝』より

督 学	平野 清兵衛	句読師兼典籍	牧野 勇造
	高木 七左衛門	句読師兼典簿	中川 彦十郎
司 儀	上坂 平左衛門		三好 由太郎
教 授	沖 薊斎		八木 大八
助 教	竹内 確斎	句読師兼典籍	島崎 勘兵衛
補 講	大橋 伊門		大谷 彌学
補講兼句読師	本多 鼎介	句 読 小 師	高木 太郎八
	窪田 貫一		斎藤 莞爾
	谷口 安定		



21 八木静馬筆『静馬一代ノ経歴録』 一冊 明治40年(1907) 個人蔵

本多家の家臣八木静馬の自筆の履歴。静馬は立教館の句読小長を務めており、その時の事を「立教館教員之事」と題して記している。毎月3の日に本多家当主も臨席する大会があり、教授の沖薊斎か助教の竹内確斎が講義をしたという。また、試験は1年に1回あり、生徒らに家老以下本多家の家臣、教員の前で、漢書の中の1章を素読させたという。評価が上の者には褒美が、中の者には賞詞が与えられたが、下の者は家老から戒められたという。(A.H.)

■ 森余山

安政6年(1859)に薊斎と確斎が相次いで亡くなって以来、補講の教員が教授の職を務めてきた。文久元年(1861)、伊予吉田藩出身の儒者森余山が諸国を漫遊中に府中に立ち寄ったため、耕雪が余山を立教館教授に推薦したところ、余山は客儒として待遇された。余山への手当の3分の2は、耕雪と山本怡仙の2人が負担したという。余山は、昌平坂学問所の教官となった佐藤一斎や、確斎も教えを受けた安積良斎に師事した儒者であった。

余山は、短期間で府中を去ったが、その磊落な性格のため、教えを受けた者に強い印象を残したといわれる。武生出身の医学博士土肥慶蔵の著書『鶚軒游戲』に掲載されている、渡邊悌二郎(渡邊洪基の弟)が慶蔵に語った余山についての談話を紹介したい。

立教館の一室に住していた余山は、ある教員が間違った教え方をしていたのを耳にし、襖をがたつかせながら大声で罵ったという。また、余山はある冬の日、忽然と府中から去ったが、その前の晩家老の平野氏と口論して酒樽を投げつけたという。

『鶚軒游戲』には、洪基と余山についてのエピソードも掲載されている。洪基が15、6歳の頃、余山に従って伊勢の土居郁之介を訪ねたことがあったが、余山があまりやかましいので我慢できず、同行していた佐藤正克と余山を置き去りにして逃げ帰ったという。途中、旅費に困っていたところ、関義臣に会い助けられたという。

余山は、その後明治10年(1877)に大分で60歳の生涯を閉じた。慶蔵は、同書の中で「余山の骨は好し鎮西の山に埋まっても、渠が南越の地に印した足跡は永久に消え去らぬであろう。そしてたとへ余山は府中を忘れても、府中は余山を遣れてはならぬ。」と記している。(A.H.)



22 森余山書等貼交屏風 六曲一双
幕末～明治中期(19世紀) 個人蔵

銀地に森余山の漢詩(七言絶句)と南画が、各隻3枚ずつ貼られた屏風。森余山は、伊予吉田藩出身の儒者で、文久元年(1861)諸国を漫遊中に府中に立ち寄り、耕雪の推薦により立教館教授を務めた。

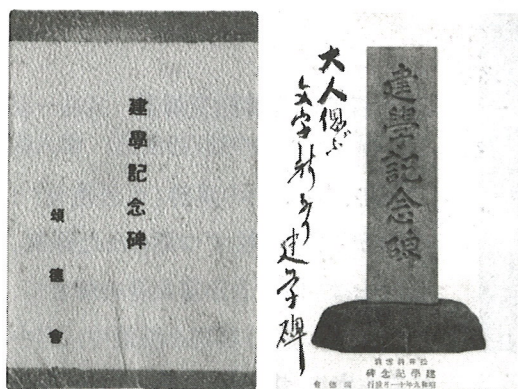
漢詩については余山の府中滞在時に制作されたものと思われるが、「節情」と款記される南画には、明治3～19年(1870～86)の年号が記されているため、本作品は余山との合作ではなく、所蔵者により屏風に仕立てられたものと思われる。(A.H.)



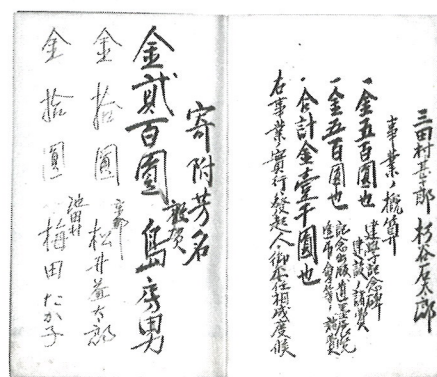


建学記念碑除幕式 昭和9年(1934)

前列中央(右から7人目)が、『松井耕雪翁伝』の編者石橋重吉で、その右隣が武生町長の土生彰。
土生の右側が耕雪の親族と思われる。



23 建学記念碑絵葉書 一点
昭和9年(1934) 個人蔵



24 松井耕雪翁建学記念事業寄附芳名録 一冊
昭和9年(1934) 越前市立図書館

本資料は、耕雪の没後50年記念事業の寄付芳名録である。30名の発起人により記念事業が計画され、事業の予算は、建学記念碑建立で500円、記念出版や遺墨展などの費用で500円の合計1,000円であったが、最終的に162人から、予算を超える合計1,116円余りの寄付金が寄せられている。耕雪の遺徳を昭和初期の武生の人々は忘れていなかったのである。(A.H.)

福井藩と松井耕雪

耕雪と福井藩との関係が深まったのは、安政5年(1858)5月に耕雪が数え年40にして、家督を息子仙之助に譲り隠居した後であったと思われる。その頃福井藩は、儉約による財政再建から、殖産興業による富国策への転換期にあり、同年4月には横井小楠が熊本藩から福井藩に招かれ、その後小楠、長谷部甚平、由利公正(三岡八郎)らによって改革が進められていくことになる。

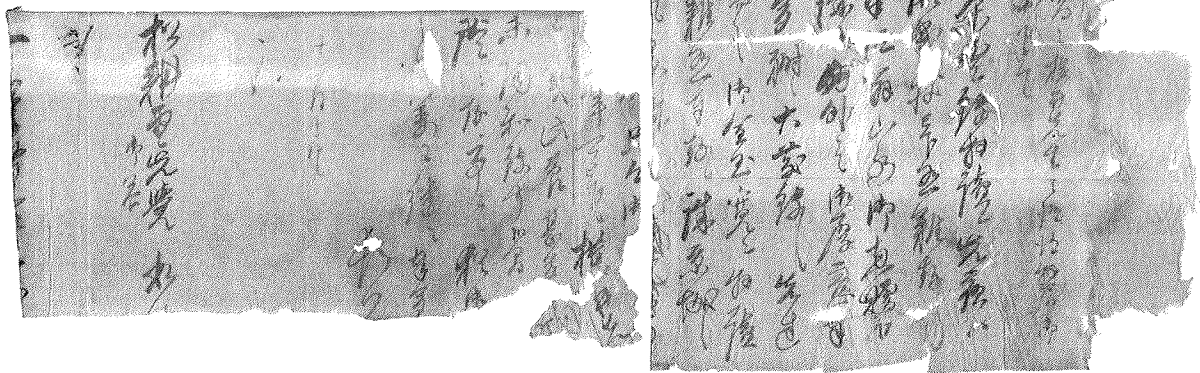
耕雪が小楠と初めて対面したのは同年の12月であるが、翌安政6年(1859)の1月には、一時帰国していた小楠を熊本に訪ね、長崎等を視察している。そして7月に福井藩制産係世話を命じられたといわれている。

同年7月頃に、府中の特産物である打刃物等の販路拡大のため府中制産役所が設立されるが、耕雪は山本怡仙、そして耕雪の長崎視察に同行した松村友松らの有力商人と共に元締役を命じられる。府中でのこのような動きにあわせて、福井藩でも万延元年(1860)11～12月頃に産物会所が設立されるが、翌文久元年(1861)11月に、福井の商人と共に耕雪および怡仙の天王屋も元締役を命じられている。

福井藩と耕雪の関係を考えるうえでもう1点着目したいのは文人としての耕雪である。耕雪の明治3～4年頃(1970～71)の備忘録からは、耕雪が書画骨董類や書籍等を福井藩や本多家関係者に斡旋していた様子がうかがえる。また耕雪の『文久三年上京記』(写)には、耕雪が文久3年(1863)1月、福井の商人で同じく産物会所の元締役であった山口清香(小左衛門)と共に福井藩の命を受けて上洛し、屏風等を仕立てさせている様子が記されている。当時松平春嶽は、4年間の蟄居謹慎を解かれて政事総裁職に就いており、同年3月の将軍家茂の上洛に先立って、2月4日に京都に入っていた。耕雪らの任務も福井藩のこうした動きに関係したものであるのかもしれない。なお、前掲書に記されている耕雪らが会った福井藩士には、藩の重臣および由利公正や長谷部甚平等藩の産物政策に関係していたものが多いことや、耕雪が勤皇系商人として知られた鳩居堂へ頻繁に出入りしていたこと、福井への往復の際に藩の天津会所で福井藩の御用商人でもあった大津の矢嶋に立ち寄っていることは注目したい点である。

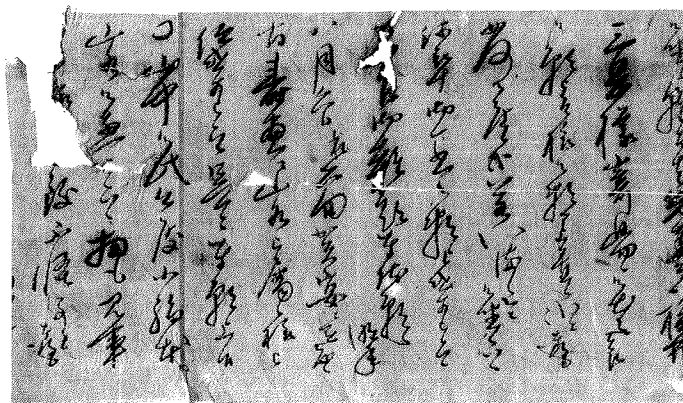
本多家の家格問題に端を発し、明治3年(1870)8月に起きた武生騒動の際に、松井家は襲撃に遭う。武生騒動は、府中の支配が本多家から福井藩へ移行したことで生じた府中領民の不満や動揺が背景にあったが、その攻撃の矛先は耕雪の松井家、怡仙の天王屋、友松ら商人に向けられ、彼らの住家、家財などが破壊された。耕雪は騒動以前の明治元年(1868)、産物会所と他国会所を合わせて設立された総会所の総代に命じられ、福井に居住しているが、翌年12月に辞任願を提出している。悪化の一途をたどる福井藩と府中の陰悪な雰囲気を感じ取り、そのはざままで耕雪は苦悩していたと思われる。騒動後の耕雪は、明治3年9月に福井藩大属に、廃藩置県後は明治4年(1871)に足羽県中属に、明治5年(1872)敦賀県大属に任じられるなど、藩及び県の役人として登用された。(A.H.)

文久三年上京記(写) 一冊
昭和40年頃(1965)写
越前市教育委員会



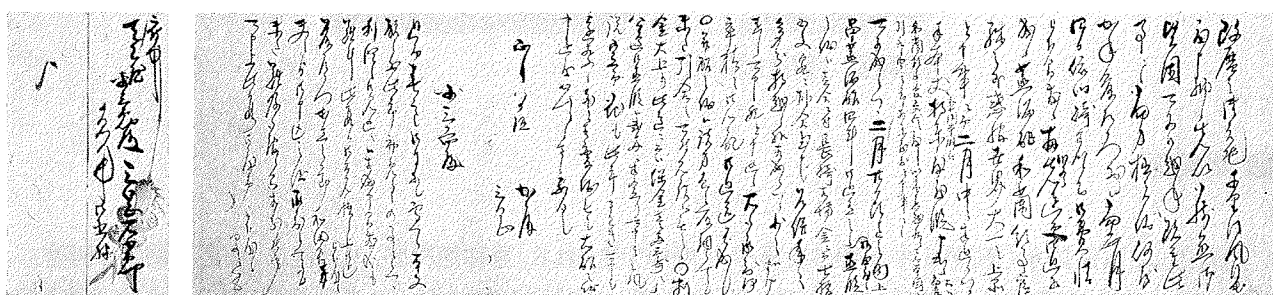
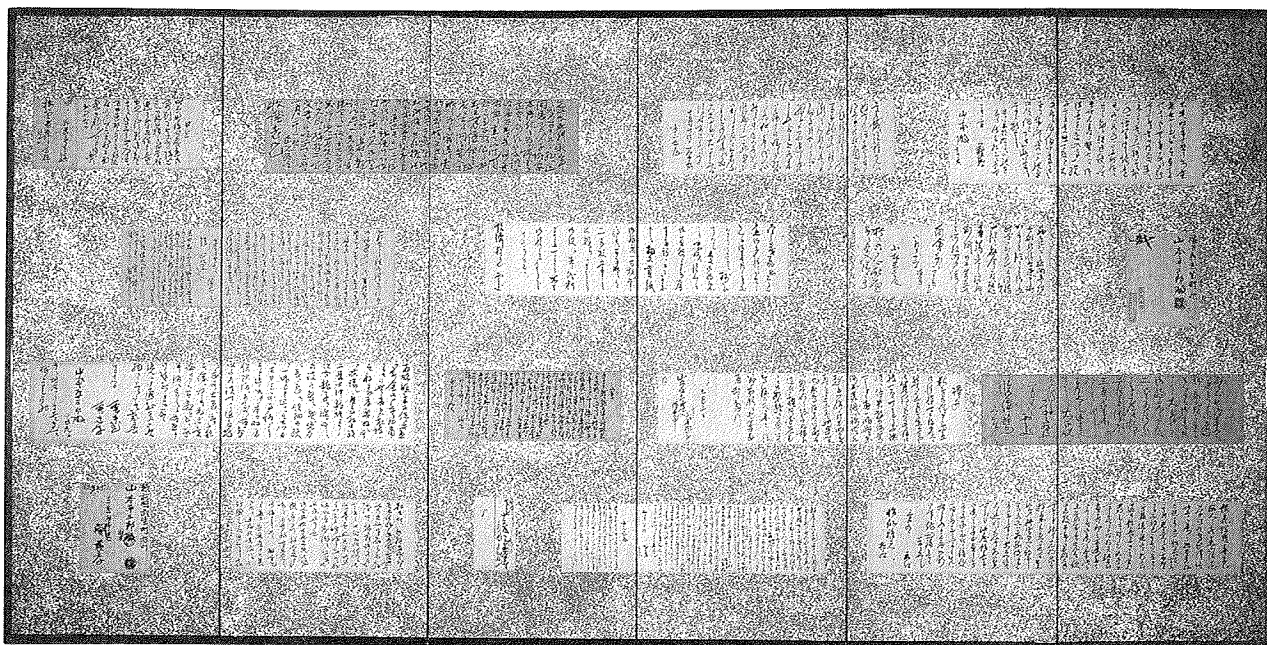
26 松井耕雪宛書簡(逍遙園文書No.21) 一通 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会

尚々横井先生□□拝眉をえ御
咄(話)申し上げ候
※采雲拝読いたし候 先夜は
御□□状下され有難く存じ候
半江翁山水御恵贈下され
誠に□外候て御厚意
多謝奉り候 大慶いたし候 先達て
の御金玉寛々拝読
有難く存じ奉り候 誠に京城の
□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□
落掌下さるべく候 横井先生
□義此節甚だ多用にて
いまだ調和致さず候あいだ 近々
談ずべきと存じ候事に候 猶御□□
□兼々縷々多□奉り
頃□
十月十四日
松耕雪先覚 水竹拝
御答
※采雲……手紙
※御金玉……貴重なもの
※落掌……受け取る



27 松井耕雪宛書簡(逍遙園文書No.31) 一通 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会

(御座候 就ては先達て福井)
□□□□□□□□□□□□
三岡様寄易へ御出の節
御願下され候よう御頼申し上げ置候やに存じ奉り候
如何御座候や 若しいまだ御座なく候は、
何卒御一書御頼つかわされ下さるべく候
□□御難題伏し願ひ奉り候 明年
八月六日私六句賀宴に懸けたく候
あいだ寿画に山水に属され候よう
仰せつかわされ下さるべく候 呉々も願ひ上げ奉り候
○山中御氏今の度小絹本に
山水御恵み下され候 扱も見事
の□□ 軽からず事と存じ奉り候
※寄易……長崎
※六句……還暦



「由利公正・加藤斌書簡」 文久元年(1861)頃

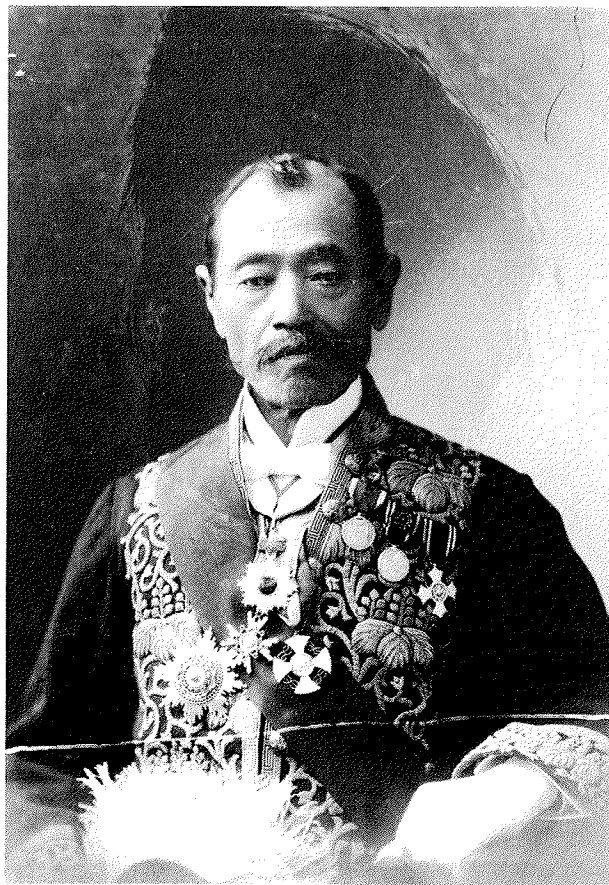
31 山本怡仙他宛関義臣・由利公正等書簡貼交屏風 六曲一隻

幕末～大正時代(19～20世紀) 越前市武生公会堂記念館

関義臣と関義孝(山本怡仙の次男で義臣の養子となる)、福井藩士の由利公正(三岡石五郎)と加藤斌(溝口辰五郎)、画家の行徳玉江と蒔田雲處等の、主に怡仙宛の書簡計14通が貼られた屏風。怡仙の子孫である山本多門家に伝えられていたが、怡仙宛の橘曙覧書簡16通が貼られた屏風(六曲一隻)とともに平成14年(2002)武生市へ寄贈された。

由利公正と加藤斌連名の書簡(第3・4扇4段目)は、怡仙にオランダへの酢の輸出を勧めるもので、1合あたりの値段も交渉済であると記されており、本格的に酢の輸出が計画されている。福井藩が横井小楠の通商貿易を基本とした富国策を推し進めていた様子がうかがえる資料である。なお輸出の酢は、洋上で腐敗したため失敗したと伝えられている。

また、14通の書簡のうち4通に耕雪の名があり、義兄弟の契りを結んだといわれる怡仙と耕雪の親交の深さが示されている。(A.H.)



関義臣 [明治末期頃]

■ 関義臣

関義臣は、天保10年(1839)山本房勝の次男として府中で生まれる。通称龍次郎、又は龍二。慶応年間には関龍二、明治5年(1872)より関義臣と名乗る。安政元年(1854)15歳で福井藩校明道館へ入学、安政4年(1857)明道館幹事御用手伝役を命じられる。当時の学監(校長)心得は橋本左内であった。安政5年(1858)福井藩へ招かれた横井小楠の教えを受け、大いに感化された。万延元年(1860)21歳で故郷を出て、各地を奔走、文久元年(1861)江戸に出て、翌年昌平坂学問所に入り、舎長にまでなる。義臣の自伝『第一号履歴撮要竝冤獄記事』(No.38)によれば、学問所在学中に福井藩より探索方を命じられている。

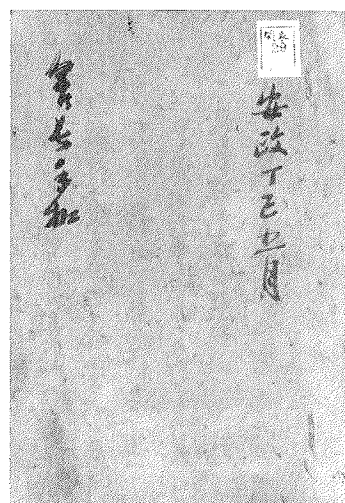
慶応2年(1866)福井藩を離れ、長崎に赴き坂本龍馬・後藤象二郎らと親交を結び、海援隊の前身である亀山社中に参加する。翌年7月、ヨーロッパ諸国視察のため、イギリス軍艦に乗り、長崎を密出国する。しかし、シンガポールへ向かう途中、台風のため軍艦が沈没、仕方なく日本に戻った。また前掲書によれば、義臣は後藤象二郎らと、土佐藩主山内容堂が徳川慶喜に提出した大政奉還の建白書の草案を作成している。

明治元年(1868)29歳で、大坂府権判事となり、大坂府知事であった後藤象二郎に版籍奉還の建白書を提出、さらに営繕局長に抜擢されたが、翌年、福井藩吏により無理やり武生に連れ戻され、逍遙園などに幽閉される。明治3年(1870)武生騒動に連座したとして入獄、閉門80日を言い渡される。明治5年(1872)鳥取県権参事に任命され、再び官僚コースを歩み、明治24年(1891)徳島県知事に任命された。明治30年(1897)には貴族院議員に勅撰され、さらに明治40年(1907)、長年の功績により男爵位を授けられた。大正7年(1918)78歳で死去。

次男の義長は三菱電機の社長等を務めた実業家である。また、山本怡仙への恩から、怡仙の死後その子勤之助を

■ 関義臣関係資料

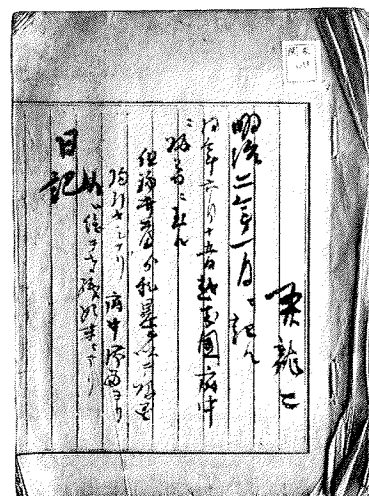
平成16年(2004)12月、関義臣の孫にあたる故関義辰氏から、茨城県立歴史館(水戸市)に寄託されていた関義臣関係資料34点が武生市に寄贈された。寄贈資料の中には、明治2年(1869)の日記や、義臣自身が履歴や武生騒動について記した『第一号履歴撮要附冤獄記事』、元治元年(1864)の備忘録が含まれており、義臣自身だけでなく幕末明治期の研究において貴重な資料といえる。今後の調査研究が待たれる。(A.H.)



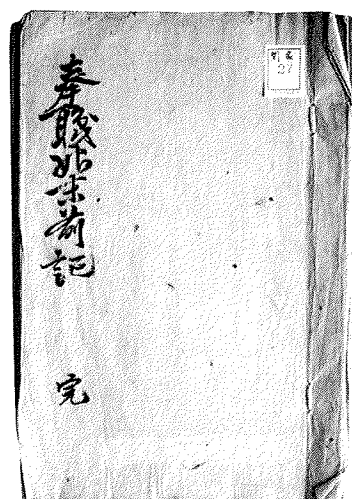
32 関義臣筆『舎長手控』 一冊
安政4年(1857) 越前市立図書館



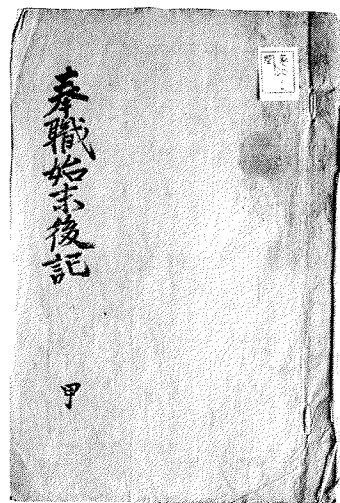
33 関義臣備忘録 二冊
元治元年(1864)5月・9月 越前市立図書館



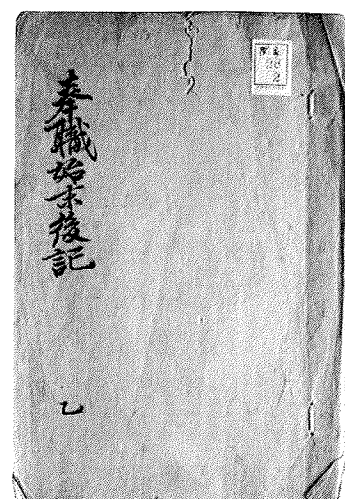
34 関義臣日記 一冊
明治2年(1869) 越前市立図書館

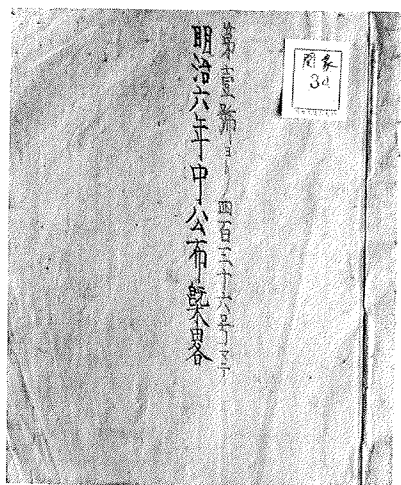


35 関義臣筆『奉職始末前記』 一冊
明治4年(1871) 越前市立図書館

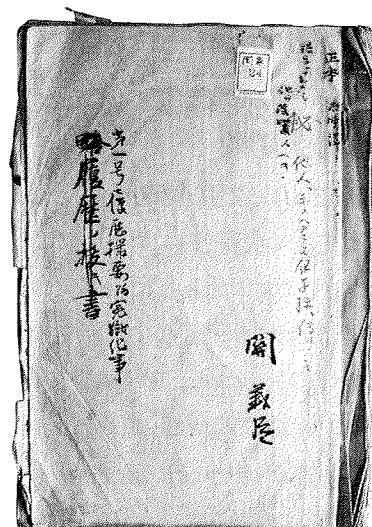


36 関義臣筆『奉職始末後記』(甲乙) 二冊
明治4年(1871) 越前市立図書館

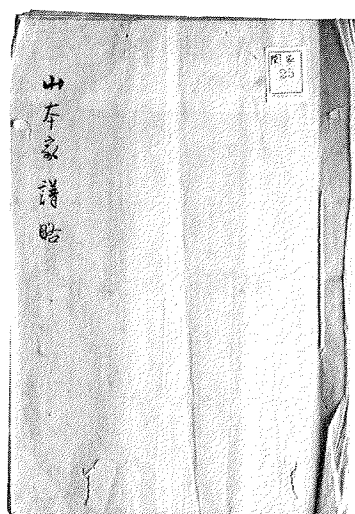




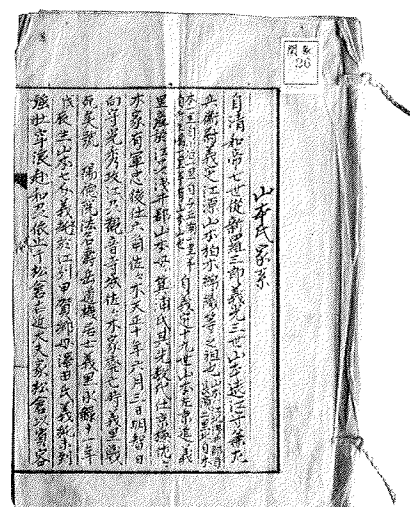
37 関義臣筆『明治六年中公布概略』 一冊
明治6年(1873) 越前市立図書館



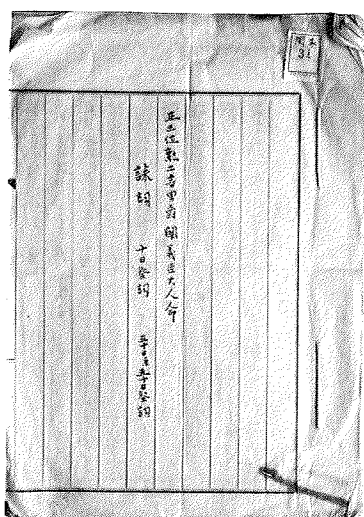
38 関義臣筆『第一号履歴撮要竝冤獄記事』 一冊
明治30年(1897) 越前市立図書館



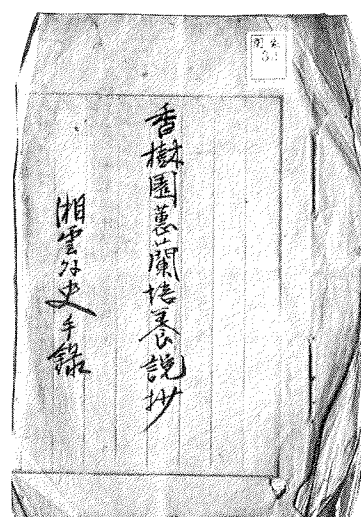
39 関義臣筆『山本家概略』 一冊
不詳 越前市立図書館



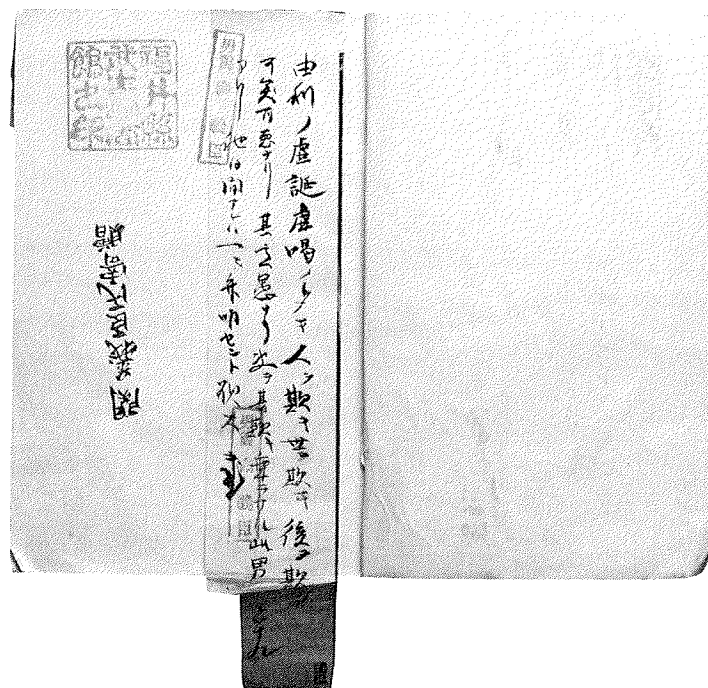
40 関義臣筆『山本氏家系』 一冊
不詳 越前市立図書館



41 関義臣筆
『誅詞 十日祭詞 三十日兼五十日祭詞』 一冊
不詳 越前市立図書館



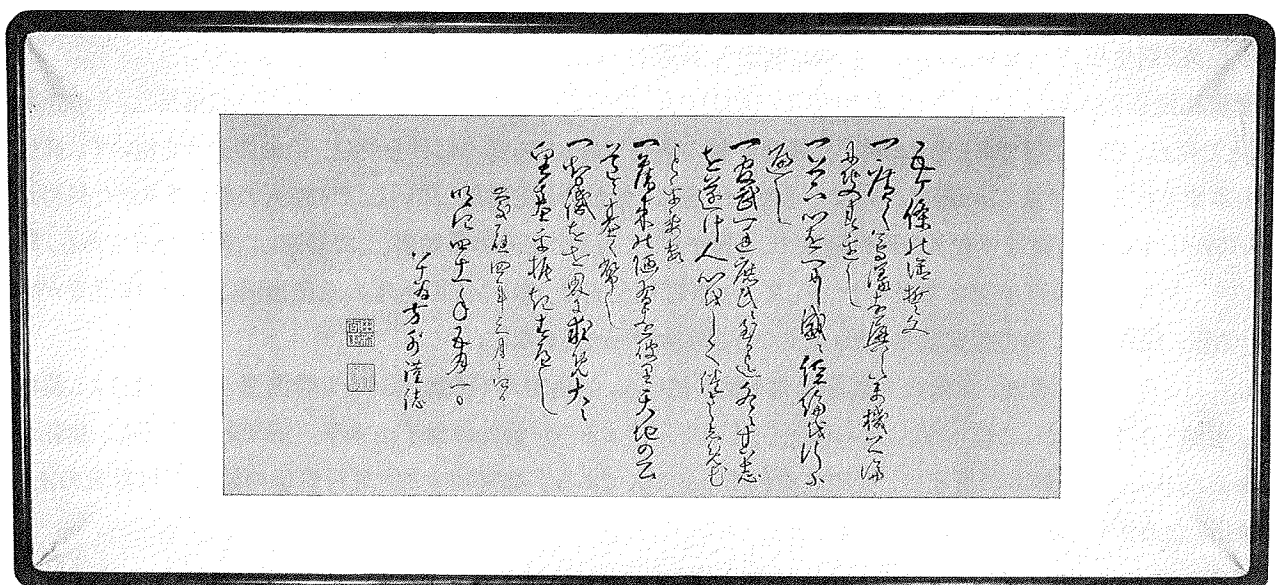
42 関義臣筆『香樹園蕙蘭培養説抄』 一冊
不詳 越前市立図書館



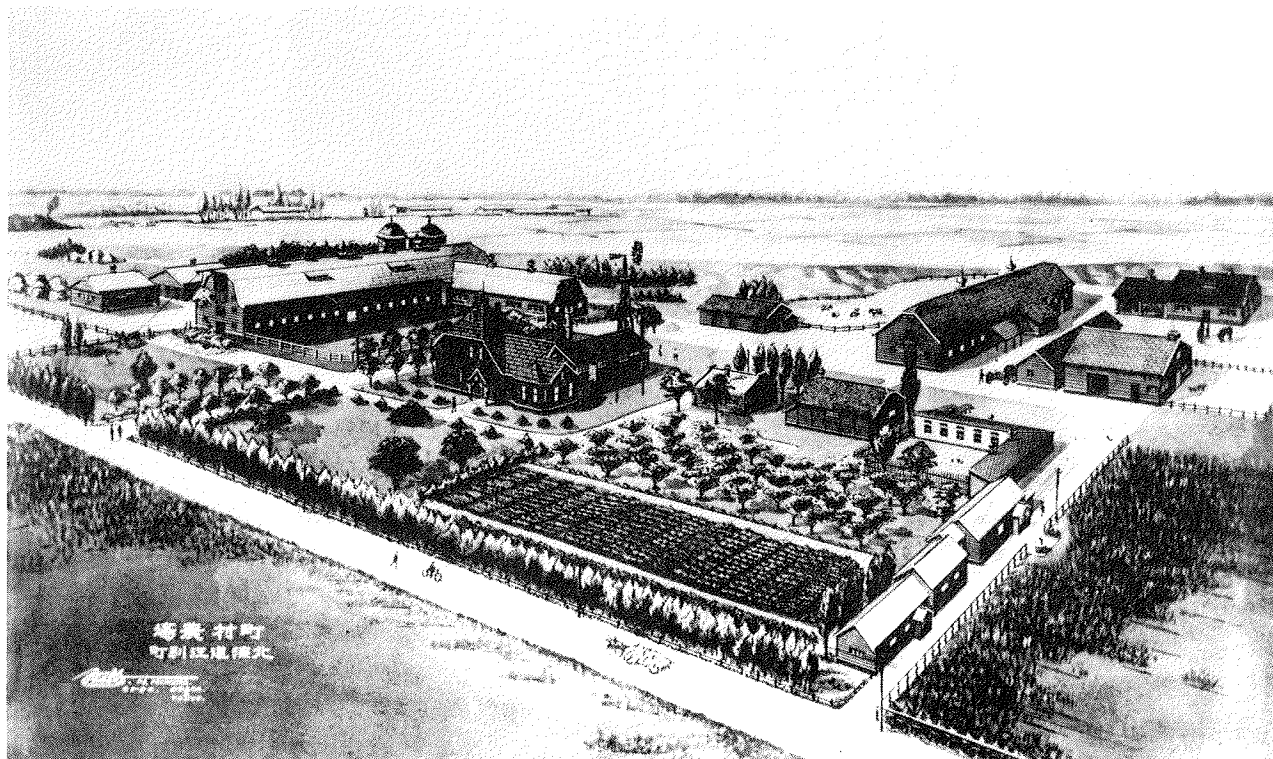
43 芳賀八弥著『由利公正』(関義臣付箋付) 一冊 明治35年(1902)発行 越前市立図書館

関義臣は由利公正(三岡八郎)と生涯を通じて敵対したといわれる。本書は芳賀八弥著の由利公正伝記に義臣が、内容に誤りがあるので後日時間があれば訂正したいと記した付箋を貼っている。この書籍は、子孫により武生市立図書館に寄贈された。(A.H.)

「由利ノ虚誕虚喝の多キ人ヲ欺キ世ヲ欺キ後ヲ欺ク／可笑可惡ナリ、其意愚ナリ決テ其欺キ乗ラサル此男／アリ、他日間アレハ一々弁明セント欲ス ギ臣／六十九」



44 由利公正筆「五箇条の御誓文」扁額 一面 明治41年(1908) 越前市武生公会堂記念館



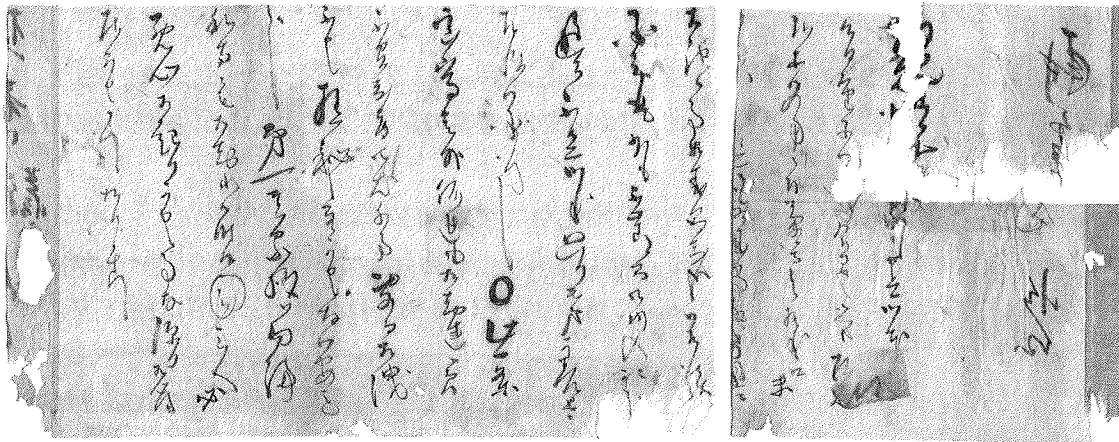
旧町村農場 昭和11年頃(1936) 北海道大学附属図書館

耕雪同様、福井藩との関係が深かった山本怡仙の天王屋も、武生騒動で襲撃を受ける。その後も怡仙は、進脩小学校の設立に尽力したりするが、明治10年(1877)、武生を去って、東京に移る。さらに明治12年(1879)、北海道札幌に渡る。これは由利公正、長谷部甚平らの勧めによると言われている。明治13年(1880)越前より瓦職人を招き、屋根瓦の製造を試みる。

一方、かつて福井藩の殖産興業策に乗って酢のオランダ輸出を試みた際に、府中本多家の行政担当者であった町村織之丞の子金弥は、明治維新で扶持を失い、同郷の米倉嘉兵衛を頼って上京し、苦学の末、首尾よく札幌農学校第2期生として入学を認められ、札幌に向かう。同期に、新渡戸稲造や内村鑑三がいた。

屋根瓦製造を試みていた怡仙は、明治13年(1880)9月、地質調査のため石狩川河畔を行くうちに落馬し、その怪我がもとで死ぬ。享年52歳であった。当時、札幌農学校の学生であった同郷の町村金弥は、怡仙の遺骨を抱いて、武生の山本家まで送り届ける。この縁によってか、金弥は、後に、怡仙の娘と結婚している。この2人の間に生まれた長男がホルスタイン牛の牧場経営で有名な町村敬貴で、5男が3期に渡り北海道の名知事として君臨した町村金五である。昭和43年、北海道開道百年記念事業の1つとして、知事町村金五は、赤レンガ旧道庁の原型復旧に、彼の側近達がいぶかる程に固守する。彼の祖父怡仙を思っていることであつたのかもしれない。

金弥は、農学校卒業後、欧米式大農場経営を試み続ける。明治31年(1898)には、十勝開墾合資会社による農場開発事業を手がけるが、このとき武生から移民をまとめて入植するのが怡仙の養子山本平三郎である。しかし、金弥が北海道酪農に残した最大の遺産は、雪印乳業創業者の1人である宇都宮仙太郎と町村農場の始祖町村敬貴の2人の傑出した弟子を育てたことであろう。(K.I.)



耕雪兄

拜見仕り候□□□□□申し上げ候二本なり

今日金子御□□□□候へども頭兄
二本ご入用につき兼ての十本江いまだ
□□□□□□□□□□□□□□□□

相馳せ候事相成間敷や
ご相談

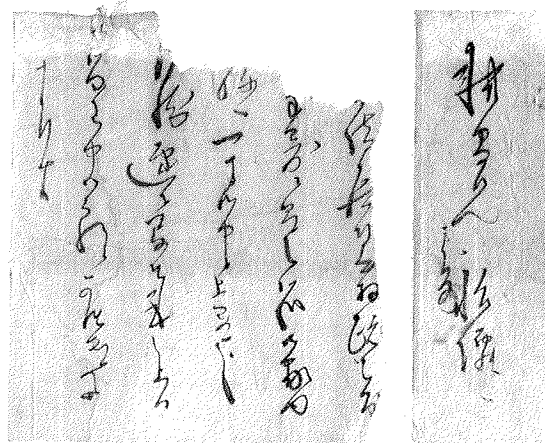
ご内入に下さるべく候

左様ご承引下さるべく候
○此の一条

宣しからず旨ご尤千万 決て相洩
申さず極秘の事に申すべく候故ご安意

私方にも相知れ候時は③三人必

居り申すべく候
以上
九月十八日



耕雪兄
怡仙



様へ一寸お申し上げ下さるべく候
しかながら速に写し相成之上は

十月十日

■ 山本怡仙

山本怡仙は、文政11年(1828)酢醸造業天王屋に生まれる。通称平三郎。樸堂または梅堂逸人と号した。耕雪、松村友松とともに幕末府中の3人衆と称される商人で、府中の文化・産業の発展に尽くした。また、伯母ツルが橘曙覧の母であり、曙覧とは従兄弟の関係になる。

幕末から明治の初めにかけて、怡仙と耕雪は常に行動を共にしている。安政3年(1856)の立教館の創設にも共に尽力し、怡仙の天王屋は耕雪と共に文久元年(1861)11月に福井藩の産物会所元締役に任じられている。怡仙は耕雪の9歳下で、気質も温厚な学者肌であった耕雪に対して、怡仙は才気に勝った外交肌であったが、終生兄弟のような交わりを続けたと伝えられている。

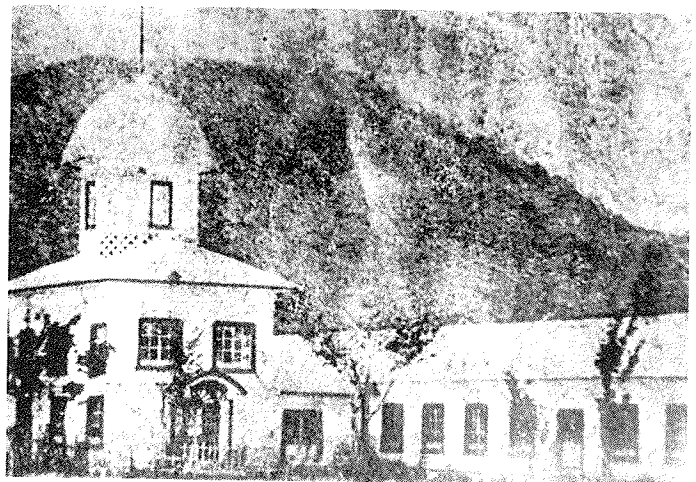
怡仙は起業家であった。由利公正と計って酢のオランダ輸出を試み、また舟山(越前市北山町)で茶を栽培し、南条の牧谷で銀鑛を試掘したという。なお酢の輸出は洋上で酢が腐敗したため失敗したと伝えられている。

怡仙は才人であった。オランダ語を解し、微分積分を論じ、辞書を編み、南画をよくしたという。幕末、関義臣や彦根藩の儒者大音龍太郎等の志士が天王屋怡仙宅に多く寄食したといわれ、天王屋は梁山伯の舘があったと思われる。憤慨激論の末、ついには刀を抜いて渡り合うこともあった。そのような時、必ず怡仙自身が独特の舞を見せて喧嘩を静めたという。なお怡仙は、関義臣や、渡邊洪基、斎藤修一郎らに学費を援助したといわれている。明治8年(1875)、本多館跡(現越前市役所)に進修小学校新築の際には、六角三階建洋傘型丸屋根の設計図を怡仙自らが引いたと伝えられている。また、関義臣の自伝『第一号履歴撮要並冤獄記事』(No.38)によれば、怡仙は佐々木虎二郎と称して、加賀藩の命により国事を探索していたという。

明治3年(1870)の武生騒動の際には、天王屋も襲撃された。明治10年(1877)、怡仙は武生を去って、東京に移る。さらに明治12年(1879)、北海道札幌に渡るが、これは由利公正・長谷部甚平等の勧めによると言われている。札幌では開拓使庁工業局に勤め、越前より瓦職人を招き、屋根瓦の製造を試みるが、明治13年(1880)9月地質調査のため石狩川河畔を行くうちに落馬し、その怪我がもとで52歳で没した。(K.I.)



47 天王屋徳利 一点
不詳 福井県立歴史博物館



進修小学校 明治初期(19世紀)

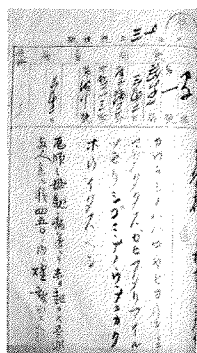
■ 北海道での瓦焼

明治12年(1879)秋、北海道へ渡った山本怡仙は、開拓使庁工業局に勤め、北海道での屋根瓦製造に携わるようになった。北海道立文書館に所蔵されている「瓦焼創業諸事録」(No.50)によれば、開拓使庁工業局長の長谷部が、札幌郡月寒村(現在の札幌市豊平区)に瓦製造に適した土があったため、怡仙に越前から瓦職人を呼び寄せるよう命じ、怡仙は南条郡と今立郡の郡長を務めていた松本晩翠にその件を依頼したという。なお、工業局長の長谷部とは、怡仙に北海道行きを勧めた1人で福井藩の産物政策の牽引者であった長谷部甚平の長男辰連であった。また松本晩翠とは本多家の昇格運動の中心人物であった本多家の元家老で、武生騒動が勃発した際には東久世開拓使長官に従って北海道へ赴いていたが、騒動に関係したとされ函館で捕らえられて福井の獄舎に繋がれた。

晩翠は、敦賀の瓦職人三木多治右エ門と大和田市次郎の両名を札幌に派遣した。両人は、明治13年(1880)の5月12日に郷里を出発し、27日に札幌に到着した。2人の旅費は怡仙が負担したという。瓦職人が到着したことで、6月から札幌での瓦製造が始まったようだが、怡仙はそのわずか3ヶ月後に、石狩川沿岸の地質調査中の落馬が原因で52歳の生涯を閉じた。

この時札幌農学校に在籍していた町村金弥が、同郷であったことから怡仙の遺骨を武生へ送り届けた。そしてそれが縁となって、怡仙の三女そとと金弥が結婚したのは、農学校を卒業して間もなくのことであった。耕雪の日記(No.55)には、結婚間もない金弥夫妻が明治14年(1881)の10月4日から6日にかけて、京都の耕雪宅に滞在したとの記載がある。

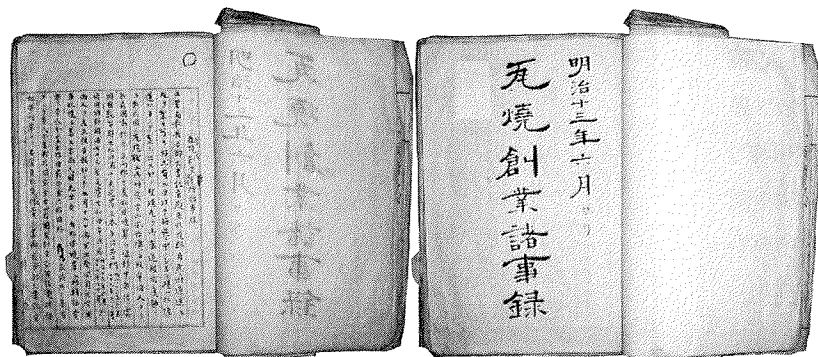
北海道立文書館には、この他にも瓦職人派遣について長谷部局長と晩翠の間で交わされた電報や、月寒村での瓦製造に関する資料が残されている。(A.H.)



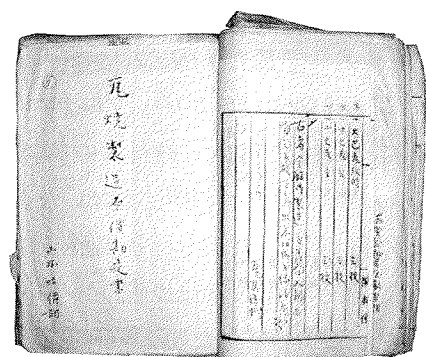
48 松本晩翠宛電報 一通
明治13年(1880)3月 北海道立文書館



49 山本怡仙筆『瓦焼の義に付心付申上の件』 一冊
明治13年(1880)6月 北海道立文書館



50 瓦焼創業諸事録 一冊
明治13年(1880)7月 北海道立文書館



51 山本怡仙筆『瓦焼製造原価勘定書』 一冊
明治13年(1880)7月 北海道立文書館



町村金弥

■ 町村金弥

町村金弥は、安政6年(1859)府中領主本多家館北側(現府中一丁目)に町村織之丞の長男として生まれた。初め立教館に学び、明治3年(1870)福井の明新館に転じるが、翌年上京し、後に逍遙園を買い取ることになる米倉家が東京で営んでいた蚊帳問屋に奉公しながら夜学に通う。その後名古屋の愛知英語学校に入学、明治8年(1875)には東京工部大学校(現東京大学工学部)予科に入学するが、本科への進学試験で官費生になれなかったため、札幌農学校(現北海道大学)を受験し、明治10年(1877)第2期生として同校に入学した。なお英語学校では坪内逍遙が、農学校では内村鑑三、新渡戸稲造らが同級であった。

農学校では、エドウィン・ダンの指導を受け、明治14年(1881)農学校卒業後は開拓使御用掛(民事局勸業課)に採用され、ダンが責任者を務めていた真駒内牧牛場へ配属、アメリカ式大農場経営と畜産技術を学んだ。明治23年(1890)には三条実美らが設立した雨龍華族組合農場の事業主任、明治31年(1898)には渋沢栄一らが設立した十勝開墾合資会社の農場長となるが、この時郷里武生付近から移民を募り、怡仙の養子で金弥の義兄山本平三郎を団長とする移民団が入植した。明治34年(1901)、陸軍省の農事専任技師となり、軍馬補充部の釧路支部を皮切りに各地で軍馬の育成にあたった。

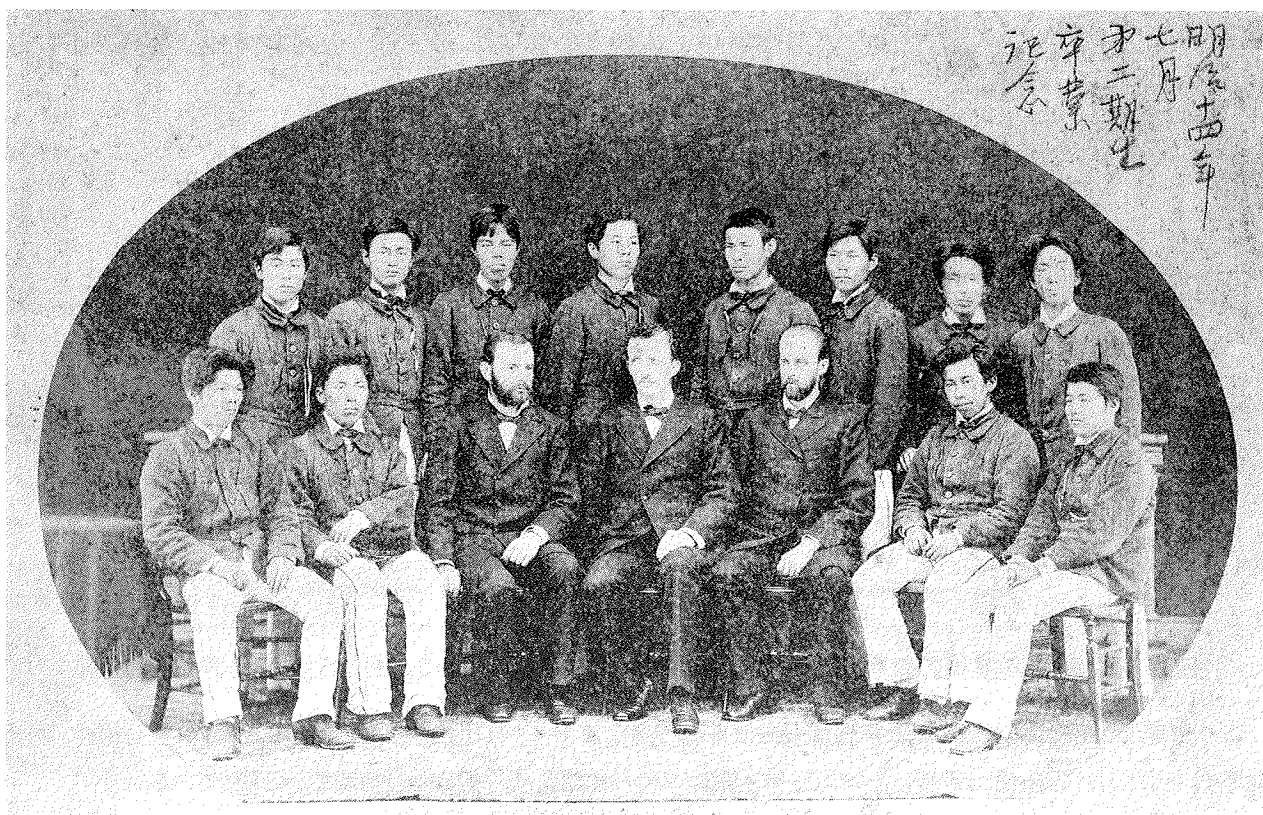
大正5年(1916)最後の勤務地であった東京で陸軍省を退職し、東京郊外の大久保に移り住み大久保町長を務める。東京では武生郷友会副会頭として奨学金制度を創設するなど郷土の人材育成にも貢献した。武生に疎開中の昭和19年(1944)に85歳で亡くなった。(A.H.)

■ 札幌農学校

札幌農学校は、日本初の農学に関する高等教育機関として、明治9年(1876)8月開校した。”Boys, be ambitious“の言葉で知られるアメリカ・マサチューセッツ農科大学学長のウィリアム・クラークが教頭として招かれたが、農学校のカリキュラムはマサチューセッツ農科大学に準じたもので、教科書の多くもアメリカやイギリスの大学用のものが使用されていた。クラークら外国人教師は英語で授業を行い、生徒は授業中にそれを英語で書き取り、授業後浄書したノートを教師に提出していた。初期の学生たちの多くは官費生で、寄宿舎に入り、食事や衣服はもちろんのこと、小遣いまで支給され、農場での労働には賃金も支給されていた。(A.H.)



札幌農学校 明治12年(1879) 北海道大学附属図書館



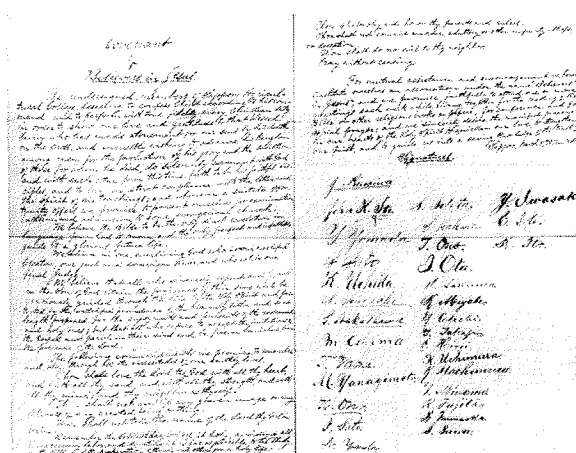
札幌農学校第2期生 明治14年(1881)7月 北海道大学附属図書館

卒業間近の第2期生。前列左から町村金弥、諏訪鹿三、数学・土木工学教授のピーボディ、教頭のブルックス、生理学等の教授兼札幌病院医師のカッター、宮部金吾、高木玉太郎、後列左から安立元太郎、新渡戸稲造、内村鑑三、鶴崎久米一、藤田九三郎、南鷹次郎、広井勇、岩崎行親。

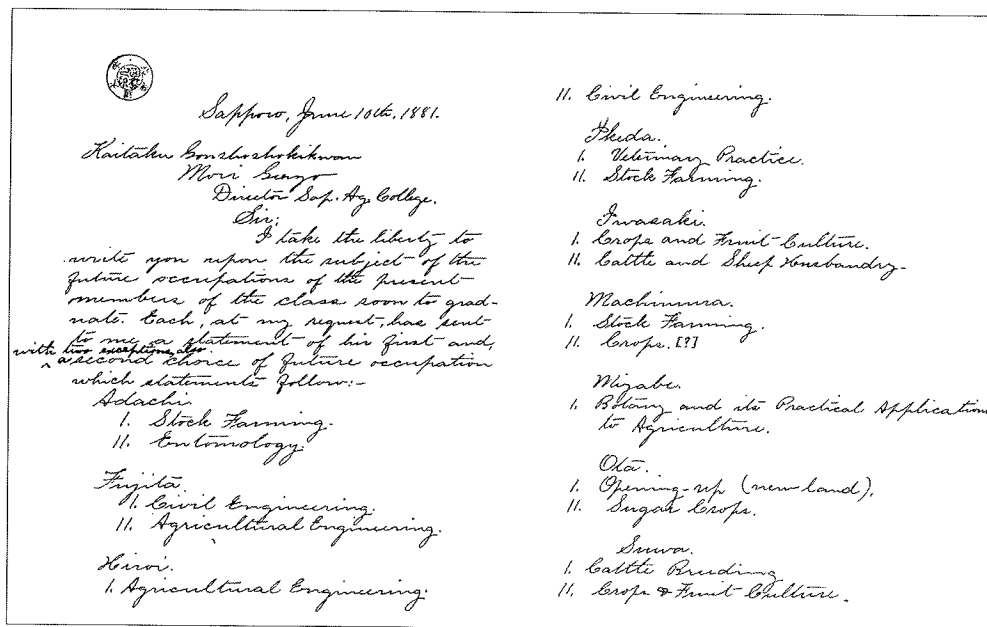
クラークは、生徒への道德教育に聖書を用い、毎朝授業前に聖書中の重要な箇所を説明し、祈祷を捧げたという。札幌農学校におけるキリスト教の伝統は、このようにクラークの教育方針から生まれた。

クラークは、帰国する直前の明治10年(1877)3月、「下に署名する札幌農学校の学生はキリストの命に従って、キリストを信じることを告白し…」で始まる「イエスを信ずる者の契約」を起草し、第1期生に署名を求めた。第1期生16名全員がこれに署名し、クラークの帰国後は第1期生の佐藤昌介がこの契約書を保管、第2期生15名も署名した。町村金弥も署名している。(2列目の下から5人目)

明治15年(1882)にクラークの教えを受け継いだ内村鑑三らにより、クラークの契約書を規律として聖書以外に宗教的権威を認めないプロテスタントの教会が札幌に設立された。この教会が現在の札幌独立キリスト教会である。(A.H.)



52 イエスを信ずる者の契約 一点
明治10年(1877)起草 札幌独立キリスト教会



53 第2期生卒業後の就職希望分野上申(部分) 明治14年(1881)7月 北海道大学附属図書館

この文書は、札幌農学校の教頭兼農場長のブルックスが、第2期生に提出させた卒業後の就職希望分野を、明治14年(1881)6月に開拓使へ報告したもので、第2期生12名の就職希望分野が第2希望まで記されている。

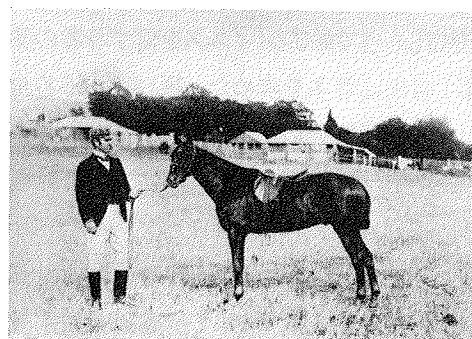
町村金弥は牧畜業(Stock Farming)を第1希望としている(右側9行目)。他の同期生は、新渡戸(太田)稲造が新しい土地の開拓を第1希望に(右側15行目)、後に日本の港湾工学の権威となった広井勇が農業工学を第1希望に、土木工学を第2希望に(左側最終行、右側1行目)、後に植物学者となった宮部金吾が植物学と植物学の農業への実用的応用を第1希望に(右側12行目)、内村鑑三が動物学を第1希望に水産業と養魚を第2希望にしている。

またブルックスは、金弥と諏訪鹿三、内村鑑三は、野外での仕事に1年間就いた方がいいと記している。その上申のためか、金弥は卒業後エドウィン・ダンが責任者を務める真駒内牧牛場で働くことになる。(A.H.)



来日当時のエドウィン・ダン
明治6年頃(1873) 北海道大学附属図書館

金弥は在学中から、開拓使雇のアメリカ人牧畜家で農学校教師を兼任していたエドウィン・ダンの影響を受けた。農学校の生徒は、卒業後全員が開拓使御用掛に採用されるが、金弥も明治14年(1881)に開拓使御用掛(民事局勸業課)に採用され、ダンが責任者を務めていた真駒内牧牛場へ配属され、アメリカ式大農場経営と畜産技術を学んだ。(A.H.)



真駒内牧牛場のエドウィン・ダン
明治10年頃(1877) 北海道大学附属図書館

■ 町村敬貴

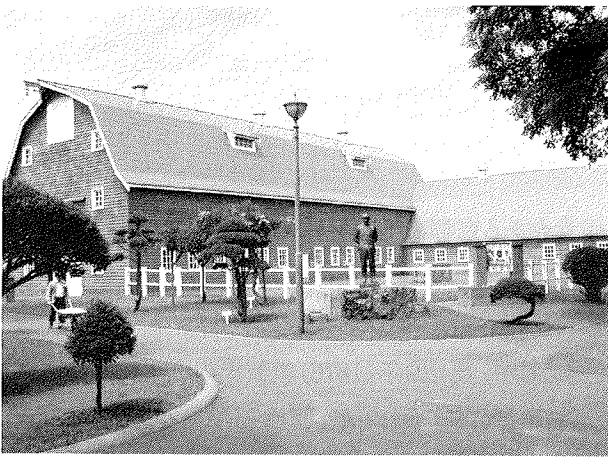
山本怡仙の企業家としての夢は、町村敬貴によって北海道の町村農場で花開いた。怡仙の娘そとと武生出身で札幌農学校卒業の町村金弥の間に生まれた長男が、北海道でも代表的な牧場をつくった町村敬貴である。

敬貴は、明治15年(1882)父金弥の勤務場所であった真駒内牧牛場で生まれた。札幌農学校を卒業後ただちに渡米し、ウィスコンシン州のラスト牧場で10年間、酪農修業をし、大正5年(1916)に帰国、現石狩市樽川に町村農場を創設する。昭和2年(1927)、江別市対雁に農場を移転する。ここは酸性でやせ地の荒廃地であったが土地改良に励み、牧草のサイレージも日本で初めて成功させた。

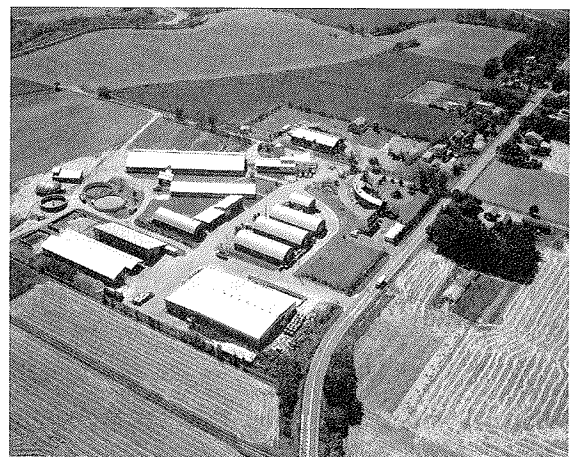
乳量の多いホルスタインの導入と改良に力を尽くし、昭和19年(1944)に北海道種牛協会を設立した。また、乳業会社の原料争奪合戦と酪農者の分裂を憂えて大合同を呼びかけ、北海道興農公社の設立にも寄与した。こうして北方の風土に即した酪農の経営のあり方を実践の中から示し続けた敬貴は、昭和44年(1969)86歳の長寿を全うして世を去った。(K.I.)



町村敬貴(『町村敬貴伝』より)



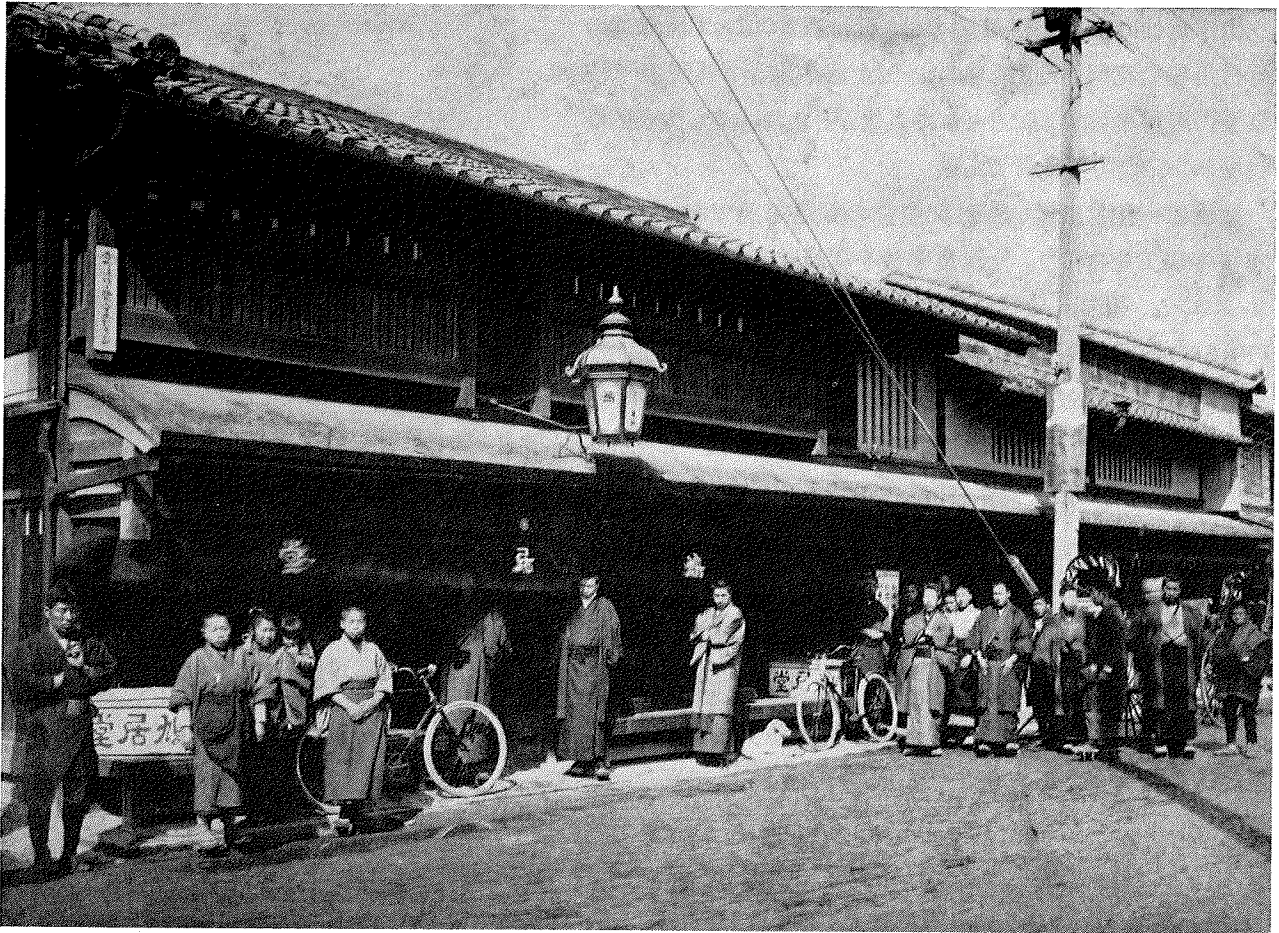
旧町村農場(現資料館) 江別市教育委員会



現在の町村農場 (有)町村農場



町村農場製品
(有)町村農場



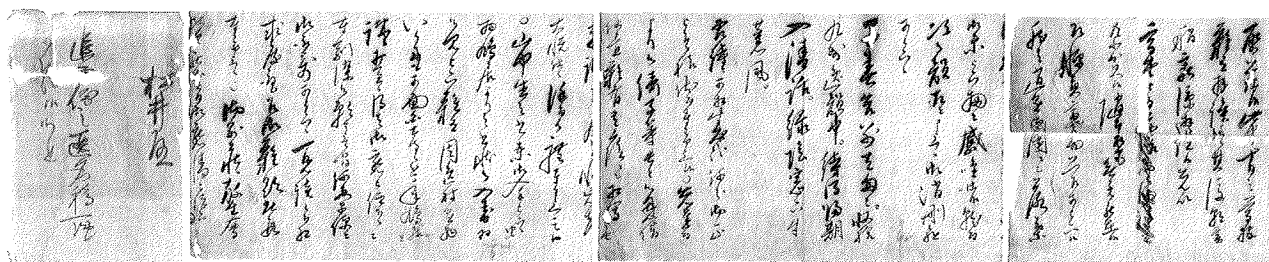
明治期の鳩居堂 京都鳩居堂

鳩居堂は、寛文3年(1663)初代熊谷直心が、現在京都鳩居堂がある京都市中京区寺町姉小路角で薬種業として創業した。4代熊谷直恭が薬草を原料とした香の製造・販売を本業とし、またこれら原料の輸入に伴って唐筆、唐墨、唐紙なども商うこととなった。

耕雪は、明治5年(1872)から敦賀県権大属及び戸籍課長を務めるが、明治9年(1876)敦賀県の廃止に伴い退官、同年11月、京都に移り住んだ。翌明治10年(1877)に京都府史編輯嘱託に任じられるが、明治13年(1880)1月に退官、翌明治14年(1881)12月に蛸薬師堺町にあった鳩居堂の別宅へ妻・貞らと共に移り住み、隠居生活を送ることとなる。

武生では逍遥園において多くの文人墨客と交わった耕雪だが、京都においても各界の名士と広く交わったという。耕雪の没後50年を記念して発刊された『松井耕雪翁伝』(昭和9年)には、京都で交流があった人々として、第2代京都府知事の横村正直、幕末維新期の志士であった山中猷(信天翁)、元彦根藩家老の岡本黄石、旧彦根藩士の谷鉄臣(如意)、旧長州藩士の福原周峰、大書記官の国重正文、頼山陽次男の頼支峰、詩人の大沼枕山・伊勢小湊・江馬天江・山田永年・宇田栗園・陳曼寿、儒者の石津灌園・市村水香・草場船山・神山鳳陽・林雙橋・片山精堂・菊池三溪、心学者の柴田遊翁、画家の行徳玉江・村田香谷、歌人の太田垣蓮月の名前が記されている。

明治18年(1885)5月、耕雪は鳩居堂の別宅にて66年の生涯を閉じ、鳩居堂近くの本能寺に葬られた。明治24年(1891)には、耕雪の略歴を記した石碑が本能寺墓地内に建立された。(A.H.)



54 松井耕雪宛書簡(逍遙園文書No.5) 一通 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会

啓上仕り候 此の中十日の尊報
有難く拝読仕り候 其の後朝暮
稍秋涼相催し候 先もつて
皆々

高堂□□様ご清祥

恭賀奉り候 随て私宅無異罷り在り候
憚りながら貴處易く思召し下さるべく候
しからば逍遙御園にて落葉

御示し下され 扱々感唾仕り候 就て
次の御願左に申し上げ候 御消刪遊ばされ
下さるべく候

□春告別去勿々。收拾
九州逸韻中。待得帰期
入清話。緑陰窓下付
薫風。

右詩に相成べきや 何分ご正し
下され候よう伏して希上げ奉り候 ○先達て
より御椅子等長々ご恩借
仕り置き有難く貴蔭にて相写

大悦仕り候 謹みて御礼申し上げ奉り候
○山中生の書東ご入手下され候由
扱て鳩居よりの書状ご入封
御見せ下され有難く 周辺村懸物
いかにも面白く存じ奉り候 近年鳩居と
疎に打過候へば御懇に仰せ下され候に
馴染奉り御願い申し上げ候あいだ 何卒早便に
御取寄下さるべく候 一見談じ候て相
求め度く候 御難題ながらこの段
希上げ奉り候 ○御別荘放生会
皆々様罷り出での旨ご懇情仰せ下され

□らせ

松井殿

追て例の匿名稿一覧
下さるべく候 以上

*消刪…添削
*書束…書翰

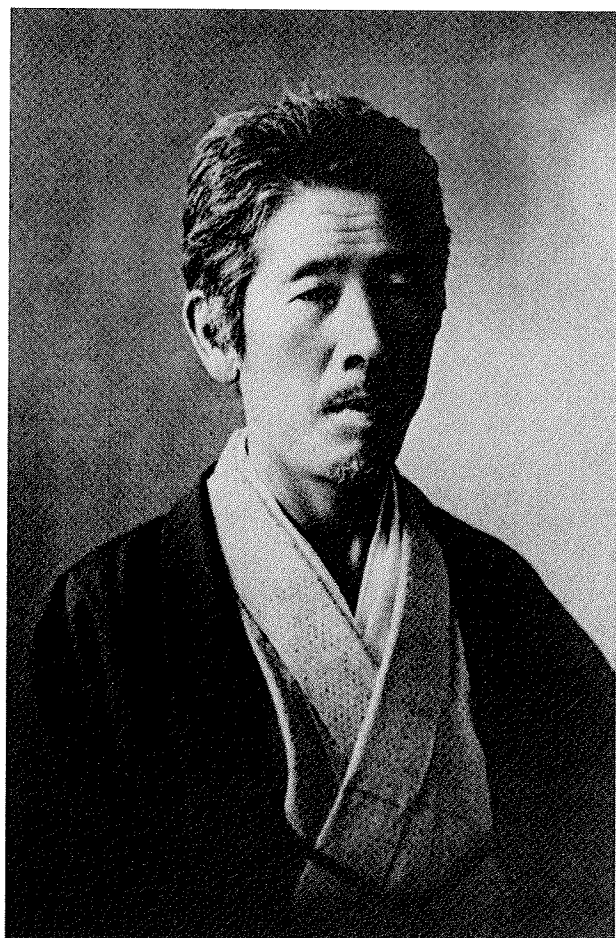
■ 熊谷直孝・直行

鳩居堂7代目熊谷直孝は、江戸後期の儒者頼山陽と交流のあった父4代目直恭の志を受け継ぎ、勤皇の志士を援助し国事に奔走した勤皇方商人として知られた。直恭は天然痘の種痘所「有信堂」を開設したが、直孝はここに教育塾を開設し自らが教師として読み書きを教えるなど子女の教育にも携わった。この有信堂が、明治2年(1869)に開校した柳池小学校の母体となった。

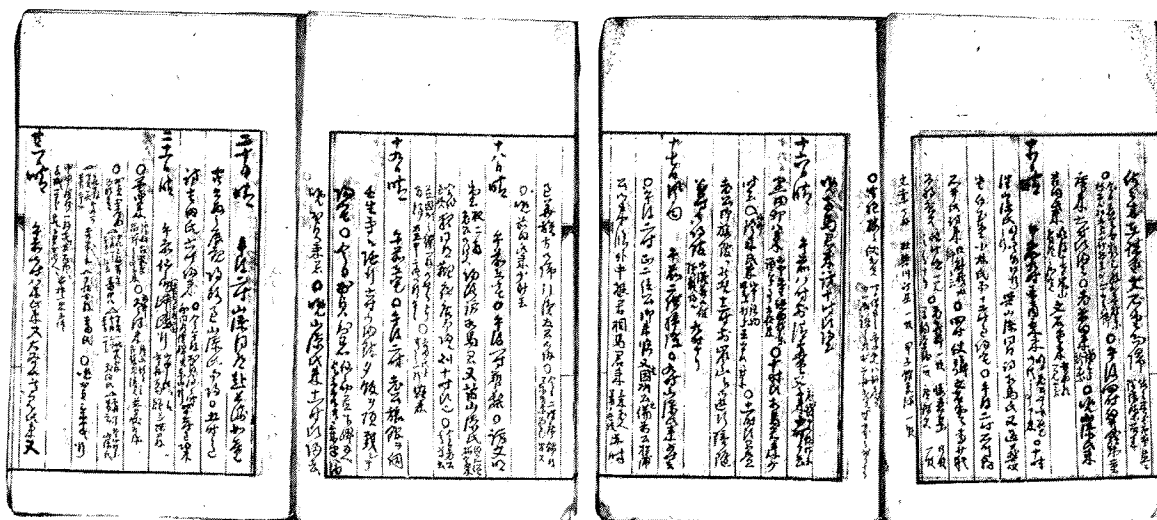
直孝は明治8年(1875)に59歳で没するが、その2年後の明治10年(1877)に2代にわたっての功績によるものか、8代目直行が三條実美から宮中御用の合わせ香の秘方を伝授されることとなった。現在でも、鳩居堂ではこの調合による練香や印香が取り扱われている。

耕雪が晩年鳩居堂の別宅へ移り住んだのは8代目直行の代であるが、耕雪の文久2年(1862)と翌文久3年(1863)の上京記に耕雪が頻繁に鳩居堂に出入りしている様子が記されていることや、本能寺に建立されていた石碑の碑文(62頁参照)に「鳩居堂熊谷氏者與君有世交。至今之主人直行。益相熟。」とあることなどから、7代目直孝の頃から交流がはじまっていたと思われる。

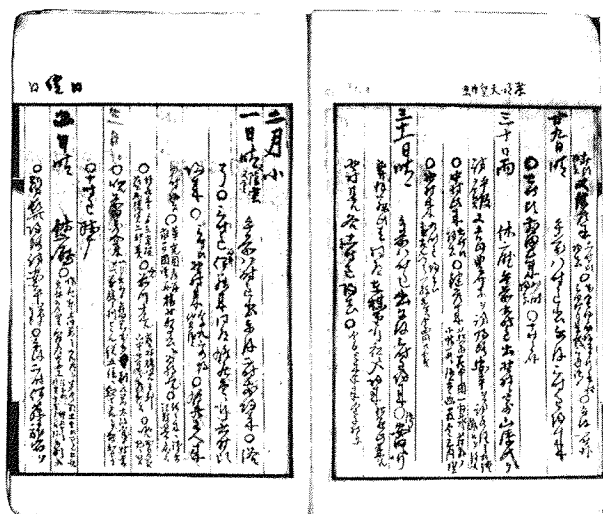
また斎藤修一郎は『松井耕雪翁伝』の中で、「耕雪翁は京都の名家鳩居堂主人と書画骨董の鑑識から交わりを訂して同家にある無数の珍宝を鑑定された人である」と記している。(A.H.)



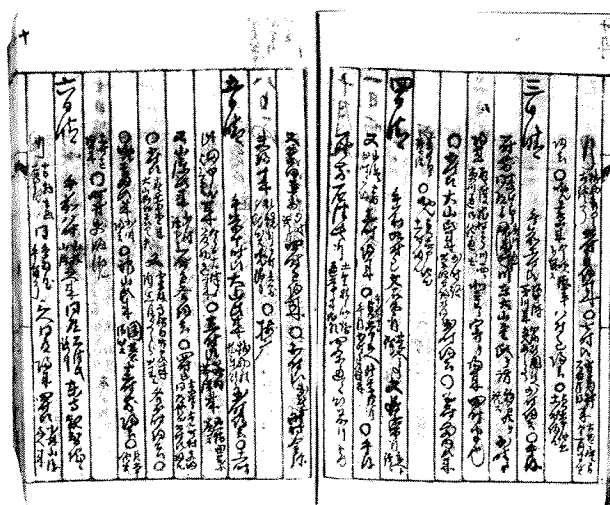
7代目 熊谷直孝と8代目 直行(左:直孝、右:直行／『維新の頃の鳩居堂』より)



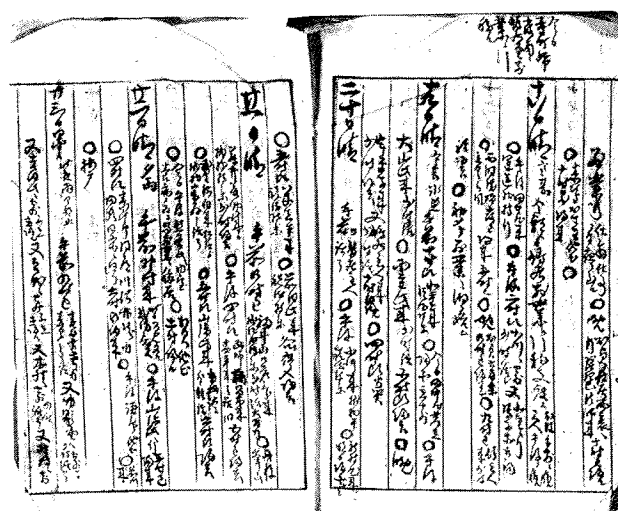
明治10年(1877)4月16～21日 春嶽の上洛



明治12年(1879)2月1日 本多副元華族に



明治14年(1881)10月4日 町村金弥夫妻来訪

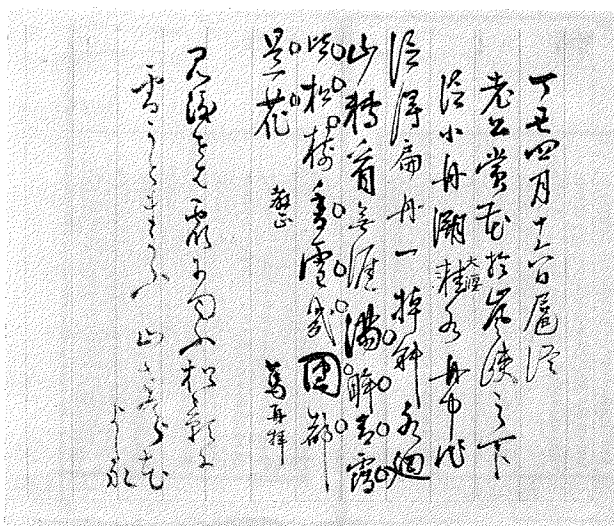


明治14年(1881)12月18日 鳩居堂別業へ引き移る

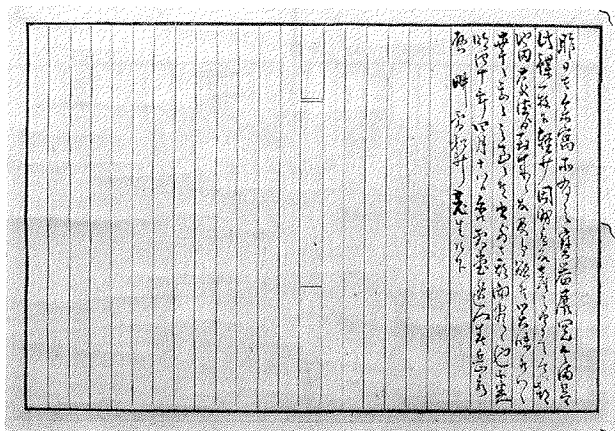
55 松井耕雪日記 十冊

明治9～16年(1876～83) 個人蔵

耕雪が敦賀から京都へ移り住んだ明治9年(1876)から明治16年(1883)までの日記。ほぼ連続して残されており、耕雪は短いながらも毎日、天気やその日の出来事を記している。耕雪の京都生活や名士との交わりを知る上で貴重な資料である。(A.H.)



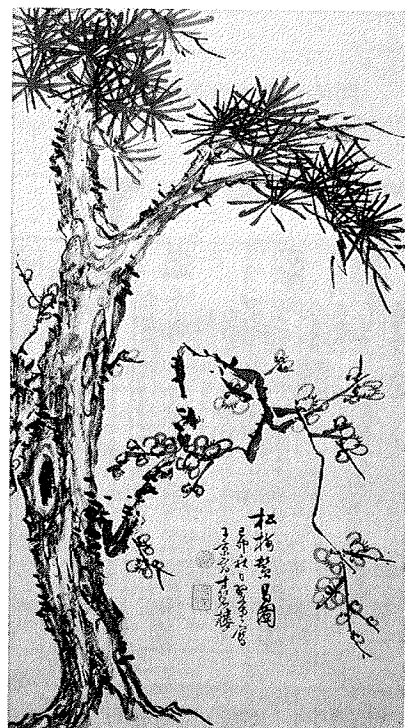
56 松井耕雪筆「松平春嶽和歌・松井耕雪漢詩」
一点 明治10年(1877)4月頃 個人蔵



57 松井耕雪宛松平春嶽書簡 一通
明治10年(1877)4月頃 個人蔵

58 松井耕雪筆「松梅繁昌図」 一幅 明治12年(1879) 個人蔵

画中に「寓居寸碧楼」とあるが、寸碧楼とは、耕雪が鳩居堂の別宅に移る前に住んでいた柳馬場六角上ル土屋町112番地の家(福田市次郎所持)のことである。階上から東山の峰々の緑が見えたことから、明治10年(1877)耕雪宅を訪れた松平春嶽によって名付けられ、2階の応接間には、春嶽が揮毫した「寸碧楼」の額が掲げられていたという。実際に、以降の耕雪の日記には、「楼上」で画を描くという記述が散見されるようになる。(A.H.)



左の資料は、明治10年(1877)4月、松平春嶽が京都を訪れた際に、春嶽の嵐山遊行に同行した耕雪が詠んだ漢詩と、春嶽が詠んだ和歌を記したもの(No.56)と、同年4月18日付の春嶽の耕雪宛の礼状(No.57)で、一幅に仕立てられている。春嶽の書簡は、昨日耕雪宅を訪れた際に、耕雪所蔵の宝物を閲覧したお礼に、元鳥取藩主の池田慶徳からもらった鳥取産の鯉を届ける旨が記されている。

耕雪の日記にも、春嶽からこの書簡と鯉が4月18日に届いたことが記されている。また日記の4月17日の項には、午後2時に正二位公、元因州公、元備前公、松浦公が耕雪宅を訪れたことが記されている。正二位公とは春嶽であるが、元因州公は元鳥取藩主の池田慶徳、元備前公は元備前藩主で慶徳の実弟池田茂政、松浦公とは元平戸藩主の松浦詮と思われる。おそらく、この訪問の際に、春嶽が耕雪の居宅を「寸碧楼」と名付けたのだろう。

なお、明治18年(1885)耕雪が死の床に伏すや、春嶽は、「卿、昔、舊國ニ偉績アリ、何ゾ嘗ツテ一日モ之ヲ忘レンヤ。顧ミルニ百事滄桑、今ニ尚未ダ報イズ…」と書簡を送っている。(『武生市史資料編 人物・系譜・金石文』)(A.H.)



本能寺(京都市中京区)



松井耕雪墓碑 昭和59年(1984)建立

■ 松井耕雪墓碑と鳩居堂工場

明治24年(1891)に建てられた墓碑は失われ、昭和59年(1984)に子孫によって代わりに新しい墓碑が建てられた。しかし今も耕雪の墓碑は縁のあった鳩居堂のそばにあることには変わりなく、耕雪の墓碑からは鳩居堂の工場を見ることができる。(画面左上の建物が鳩居堂の工場。工場の向側には鳩居堂の店舗がある。)(A.H.)



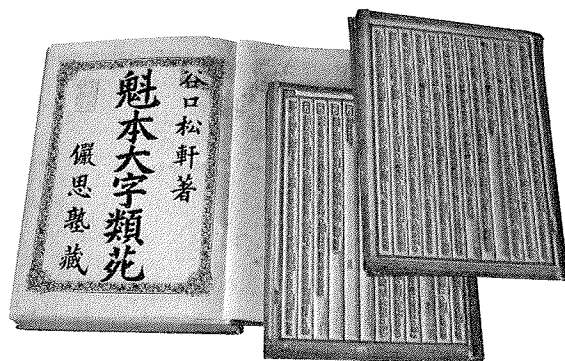
旧松井耕雪墓碑 明治24年(1891)建立

今回の逍遙園文書の調査で最も大きな収穫は、逍遙園で開催されていた「書物講」と呼ばれる読書会の存在が知られたことである。逍遙園文書の中から見つかった「口上」は、耕雪が府中の町人に宛てた書物講の開催案内で、宛先には耕雪の盟友である山本怡仙(平三郎)、近江屋伊藤久兵衛、浅井権兵衛、寺田弥兵衛ら商人に交じって、若き日の渡邊洪基(静寿)の名がある。また、「御家中御連は谷口御氏より御触」とあることから、この読書会は武士と町民が身分の垣根を越えて共に学ぶ場であったことがわかる。

耕雪は蔵書家として知られており、現在越前市立図書館に「松井耕雪翁蔵書点検録(写)」(No.60)という耕雪の蔵書目録の写が遺されているが、その内容は、漢籍、国書、経書、中国古典、字書、百科事典、詩書、博物本草書、名所類、随筆、漢訳書、図録、絵画墨書等と多種多様な書籍で構成されている。これは単に耕雪一個人の蔵書というのみでなく、幕末の地方都市での一知識人の学問、教養レベルを推量する資料としても貴重である。書物講においても、この蔵書目録の中の書物が使われた可能性がある。また、怡仙も耕雪に劣らない蔵書家として知られ、関義臣の蔵書の中には「松井蔵書」、「山本蔵書」の印のある書物が数多くあったという。

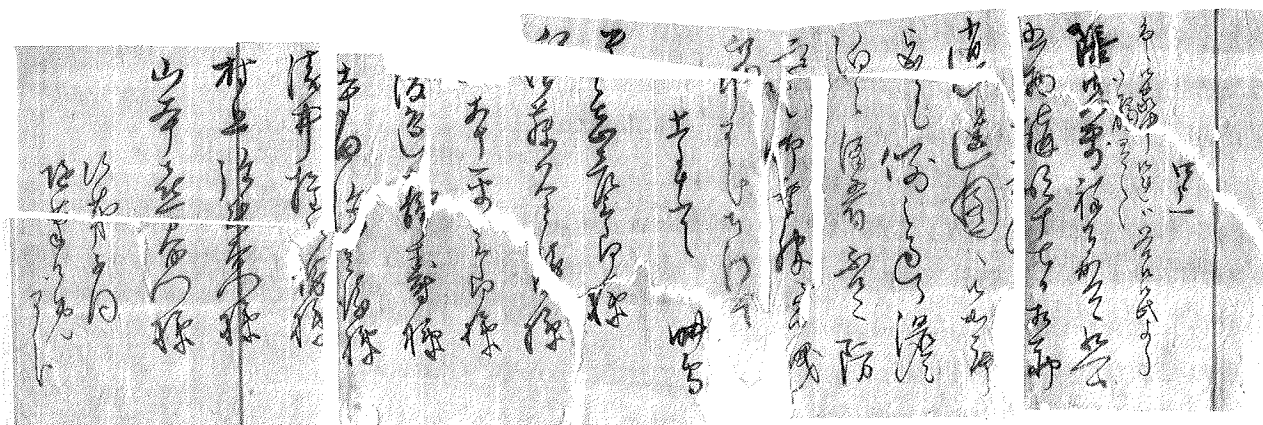
口上に登場した谷口氏とは、谷口松軒・安定親子のことと思われ、彼ら親子はこのような府中での知的環境や条件のもとで蓄積された知識の一部を『魁本大字類苑』(No.63)というあて字辞典としてまとめて、明治22年(1889)に出版した。この辞典の序言で安定は和蘭辞書(ゾウルハルマ)についても言及しているが、『魁本大字類苑』は語彙の配列法を和蘭辞書に倣った日本で最初の辞典の一つであるという。これに関連し、この書物講の一員である怡仙がオランダ語を解したと言われるのも興味深い事実である。なお、この『魁本大字類苑』の紙型(No.62)は、現在、越前市立図書館に保存されている。また『魁本大字類苑』以外にも、武生襲明舎から『単語篇』(明治6年)、本多家臣本多鼎介編の『越前地誌畧』(明治9年)、立教館の句読長佐久間正訳の『万国地誌畧図訳解』(明治11年)、幸町の吉川作治郎が出版人の『小学暗記問答』といった武生関係の教科書や辞典が明治初期に発行されている。

残念ながら、耕雪の蔵書は、本多公に献上されるなど散逸していくが、安定の蔵書は、その後、進脩小学校付属の谷口文庫となり、それが発展して町立武生図書館になり、さらに充実発展し、現在の越前市武生図書館(旧武生市立図書館)となった。(K.I.)



※ 紙型とは、活版印刷で鉛版を鑄造するために組み版などの原型に特殊な紙を押し当てて作った鑄型。これに地金を流し込み、鉛版を鑄造する。

62 魁本大字類苑紙型 二箱 明治22年頃(1889) 越前市立図書館



59 書物講口上(逍遙園文書No.9) 一通 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会

口上

尚々御家中御連は谷口御氏より

御触れこれ有り候

陪て御萬祥賀し奉り候 しからば

書物講 明十七日相勤

逍遙園へご出席

成し下され候 例の通り澹々

泊々酒肴否々 防

寒しご重服にて御越し

成され下さるべく候 待ち上げ奉り候

十一月十五日 咄雪

貴志彦三郎様

伊藤久兵衛様

山本平三郎様(山本怡仙)

波辺静寿様(渡邊洪基)

寺田弥兵衛様

浅井権兵衛様

村上弥次右衛門様

山本喜右衛門様

次第不同

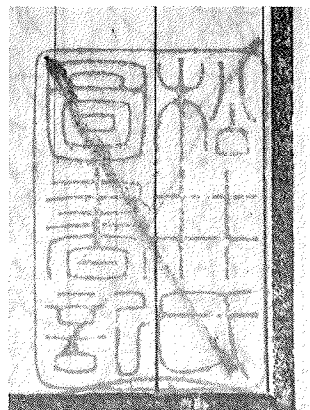
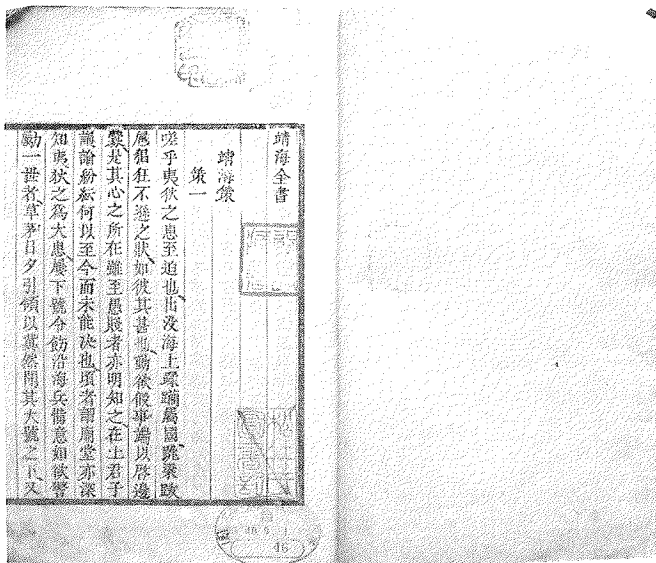
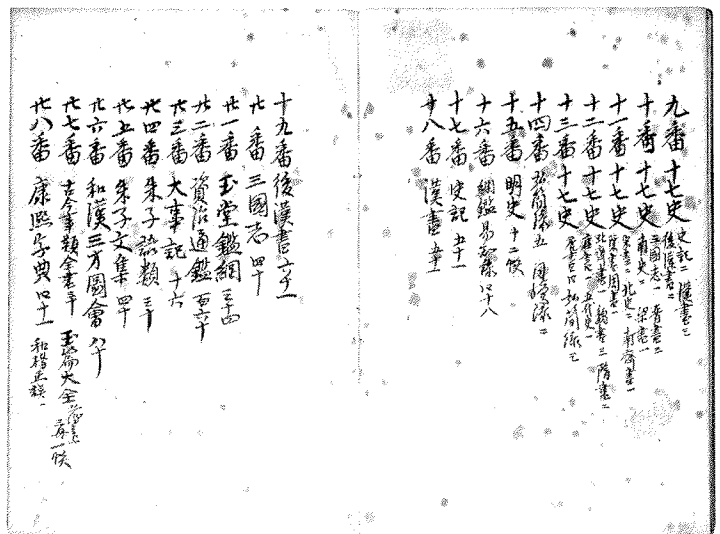
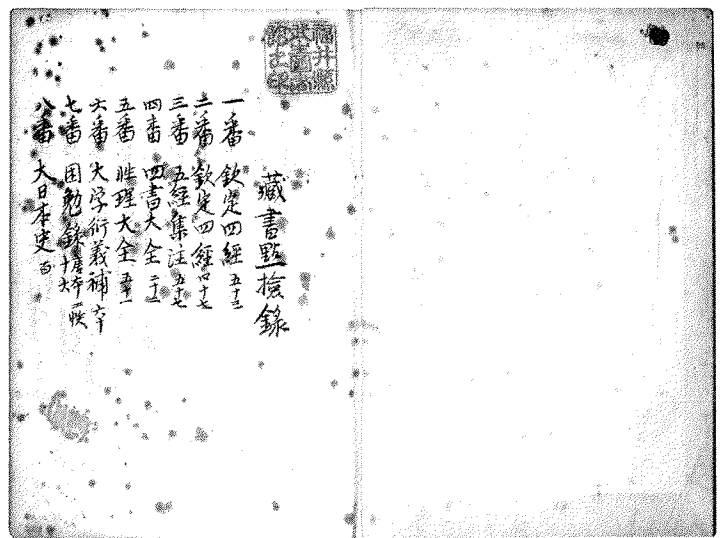
随筆ご免

下さるべく候

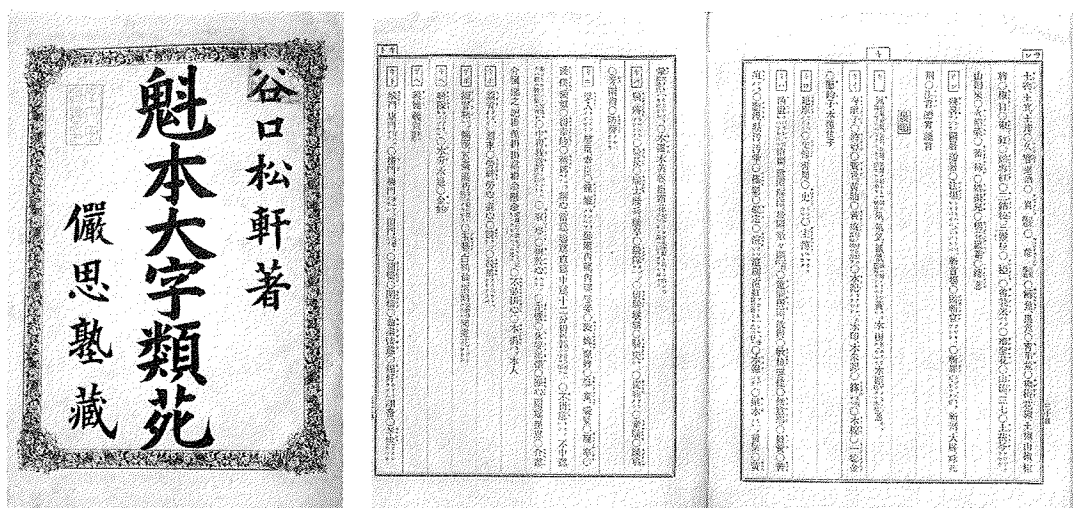
60 松井耕雪翁蔵書点検録(写) 一冊
昭和6年(1931)写 越前市立図書館

本資料は、塚町の円明寺にあった耕雪の蔵書目録を松井耕雪翁建学記念事業発起人の一人である井上茂が昭和6年(1931)に写したもので、本箱1番から90番まで762部、約5千冊の本が掲載されている。耕雪は蔵書家として知られ、立教館開校の際には、建設資金300両だけでなく、その蔵書も寄贈したという。膨大な書籍を所蔵していた耕雪だが、耕雪旧蔵の書籍で現在確認できるのは越前市立武生図書館所蔵の「松井氏図書館」の印がある『靖海全書』(No.61)のみである。

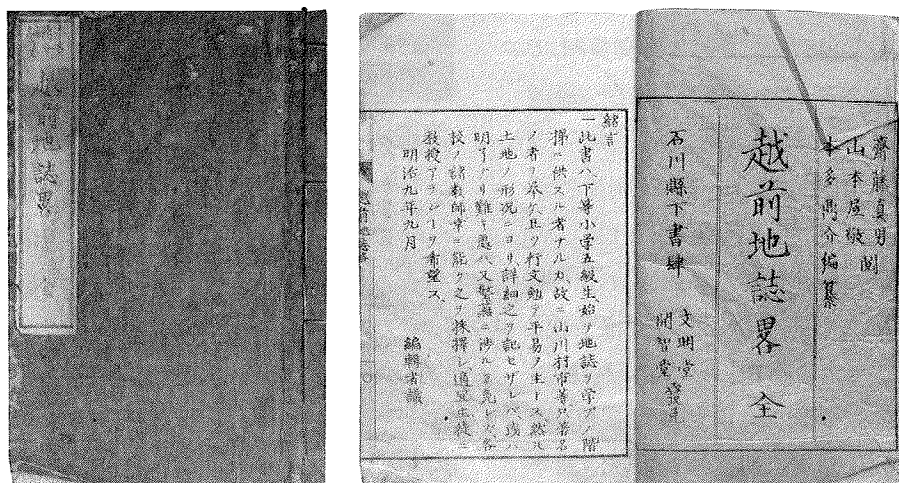
なお巻末に武生出身の医学博士土肥慶蔵の書簡の一節が掲載されているが、慶蔵はこの目録を見ていると耕雪に對面しているようであり、立教館教授であった森余山や冲荊斎の風姿さえ想いだされると記している。またこの目録を武生郷友会誌に掲載したいとも記しており、実際「武生郷友会誌53号」(昭和6年)に紹介された。(A.H.)



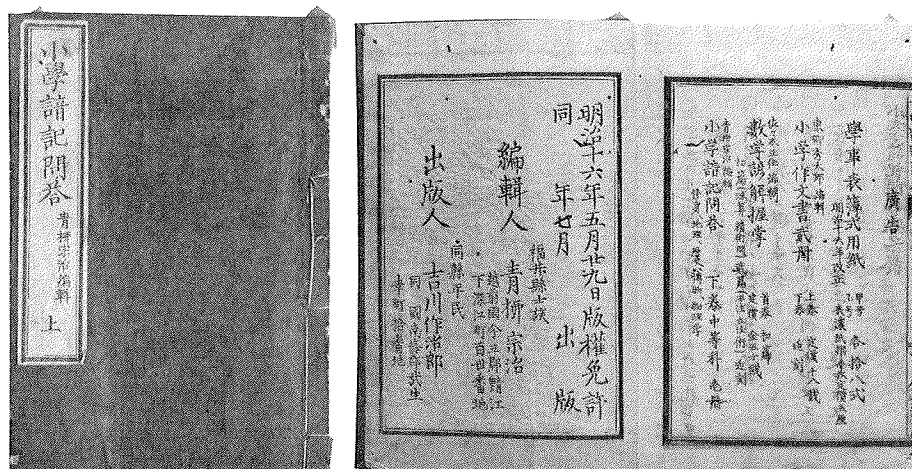
61 『靖海全書』(松井耕雪蔵書印) 一冊
江戸時代(19世紀) 越前市立図書館



63 谷口松軒著『魁本大字類苑』 一冊 明治22年(1889)発行 越前市立図書館



64 本多鼎介著『越前地誌略』 一冊 明治9年(1876)発行 越前市立図書館



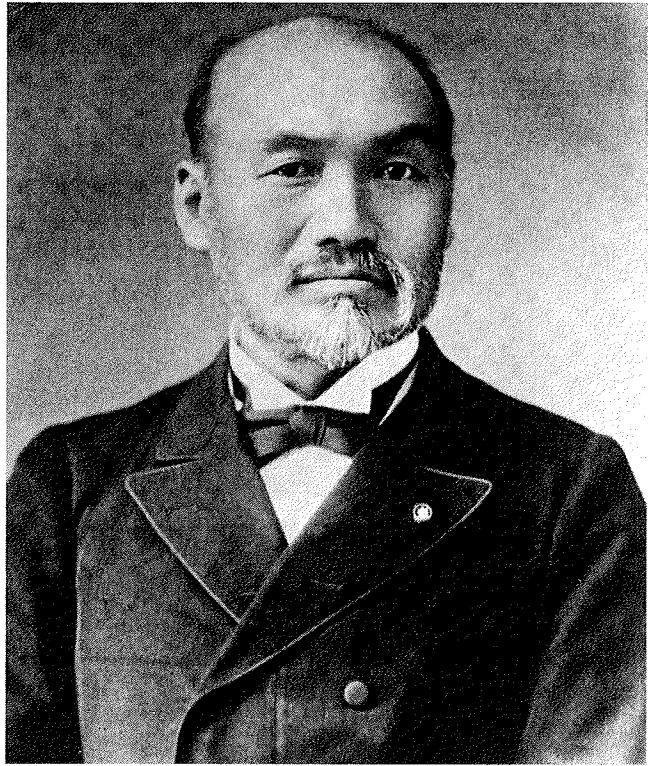
65 青柳完治編『小学暗記問答 上』 一冊 明治16年(1883)発行 越前市立図書館

■ 渡邊洪基

渡邊洪基は、弘化4年(1847)府中善光寺通り(現京町2丁目)に医者渡邊静庵の長男として生まれる。幼名は静寿。明治2年(1869)孝一郎、後に洪基と改める。浩堂、旦堂と号した。安政3年(1856)、立教館に入学、その後、福井済生館で医学・蘭学を学び、江戸へ上った後は、開成所、慶応義塾を経て、医学所教授となる。明治元年(1868)会津の彰義隊に参加する。

明治2年(1869)大学南校の少助教、明治3年(1870)に外務大録に就任するが、武生騒動に関係したとの嫌疑から免官され福井へ一時帰国し謹慎処分を受ける。同年中に許されて外務大録に復し上京、明治4年(1871)に岩倉具視らの特命全権大使の随員となりアメリカへ出港、翌年帰国。明治6年(1873)から9年(1876)にかけて外交員としてイタリア、オーストリア等ヨーロッパ各地を訪問。帰国後は明治11年(1878)太政官大書記官法制局専務、明治15年(1882)元老院議官を経て、明治18年(1885)東京府知事、翌明治19年(1886)には帝国大学(現東京大学)の初代総長に任じられた。明治23年(1890)帝国大学退任後、特命全権公使としてオーストリア、スイスに滞在。明治25年(1892)病により依願免官し、帰国、同年衆議院議員、明治33年(1900)貴族院議員に勅撰される。明治34年(1901)東京にて53歳で亡くなる。

洪基の亡くなる1ヶ月前に生まれた娘の貞子は、後に日本画家渡邊玉花として活躍した。



渡邊洪基 [明治後期]

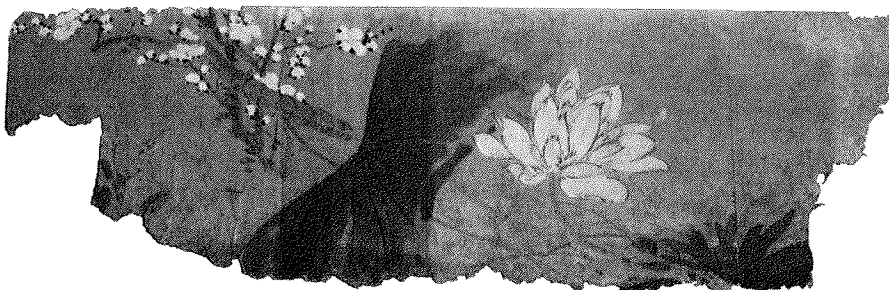


66 渡邊洪基筆「道遙園」扁額 一面 明治23年(1890) 個人蔵

逍遙園の襖(正確には障子の腰絵部分)の下張りに使用されていた文書は、襖絵とともに平成15年(2003)武生市史編さん室へ持ち込まれた。調査の結果、松井耕雪宛の書簡等61点が確認された。これら書簡類には、耕雪の多彩な人間関係の一端が示されており、逍遙園文書の発見は耕雪を中心にして幕末・明治期の武生を探求するという本展「逍遙園 襖の下張り展」の開催へと繋がった。



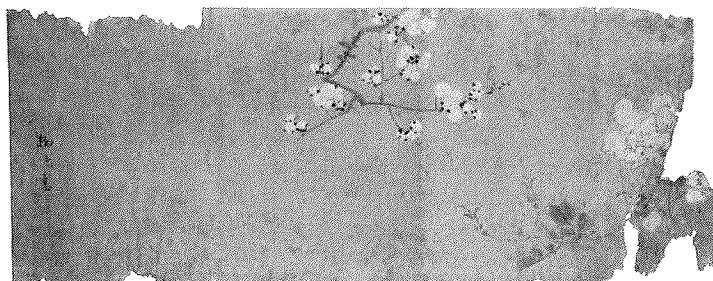
67 牡丹図 一点 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会



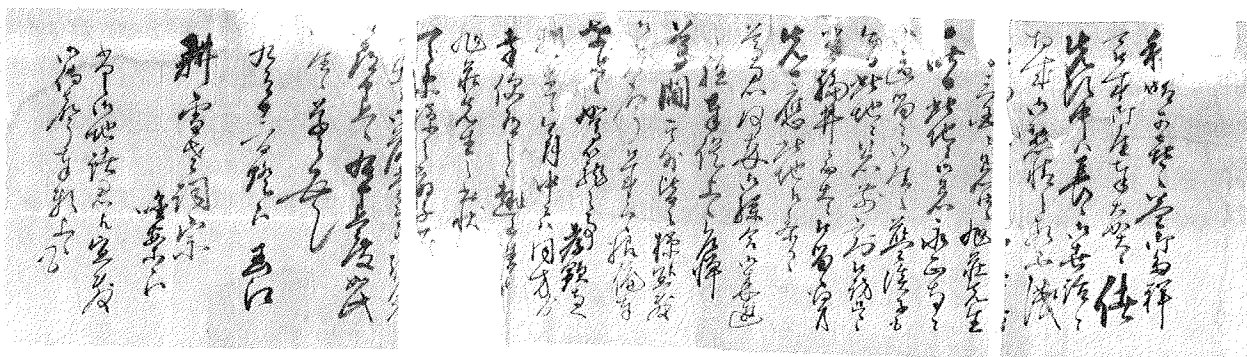
68 蓮 図 一点 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会



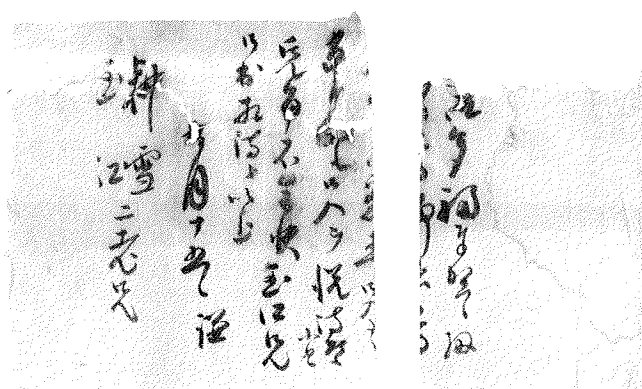
69 菊 図 一点 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会



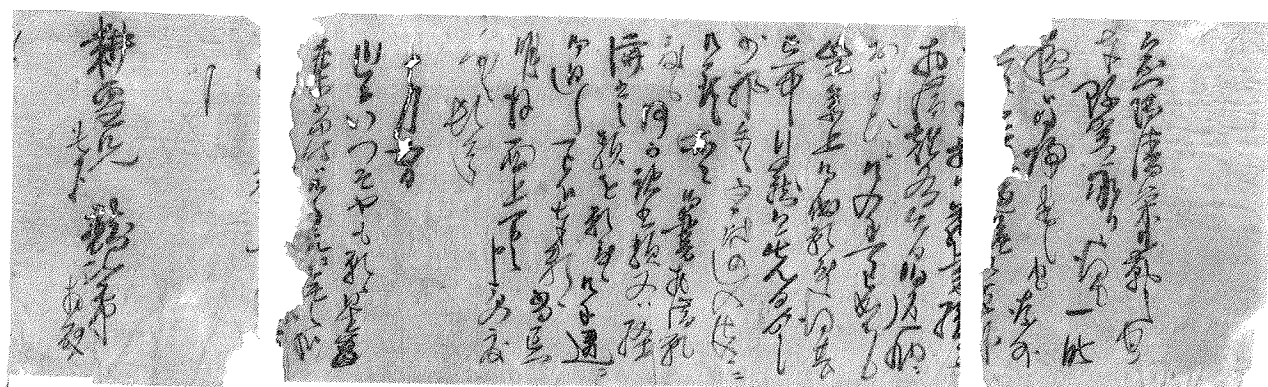
70 梅 図 一点 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会



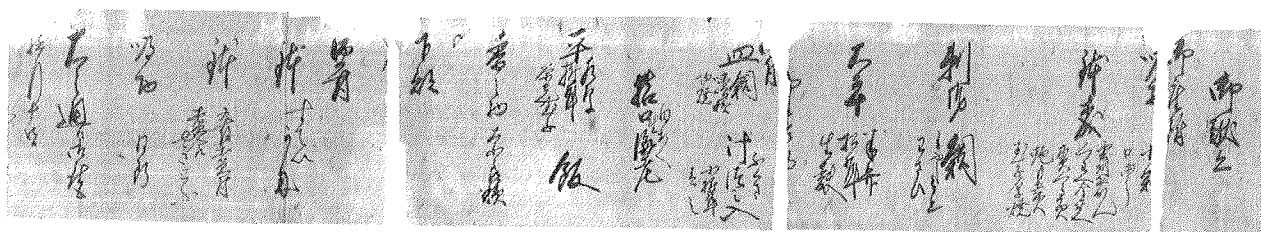
71 松井耕雪宛行徳玉江書簡(逍遙園文書No.3) 一通 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会



72 松井耕雪宛広瀬旭莊書簡(逍遙園文書No.27) 一通 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会



73 松井耕雪宛関義臣書簡(逍遙園文書No.40) 一通 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会



74 献立内容(逍遙園文書No.58) 一点 江戸末期(19世紀) 越前市教育委員会

釈 文

3 松井耕雪宛書簡等貼交屏風

* 内海吉堂書簡

西京発同廿日長崎着一日留 小曾根乾堂ヲ訪 廿一日夜十二時発 廿三日夜十一時上海着 田代屋止宿 即本願寺別院へ赴候処無阻止宿許シ呉候ニ付 二三日田代屋ニ休息仕 今明日ニ別院へ引移り可申心得ニ罷在候 幸ニ鳩居堂之御手代ト同宿仕此人近日帰京ニ付書翰相詫シ候 猶近日職業ニ取掛リ候得者彼是事情相分リ可申 猶又後便委曲可申上先ツ無異着御報知申上迄如此ニ御座候 御序之節村田香谷先生へも宜ク御伝可被下奉希上候 勿々 恐惶頓首

六月廿六日認 内海吉堂再拝
松井翠堂老先生 玉案下

9 橘曙覧筆 書幅

「府中の青木夏彦とふらひたりけるに」

府中の青木主の許とふらひてなくなり給ひし其父君の事いひ出てかたみに袖をなんうちしほりたりける去年の秋はかりなりき此家にやとりをり朝とくおき出たりけるに双鶴翁出来給ひいまおのかがたに湯わきてあり茶ひとつ参らすへしいて来給へとていとよくもてなし給へりし事のありけるなど思ひいていと、む年せまりつ、読んでられたる

曙覧

窓のうちに我を呼びいれ朝めよく
木のめ烹やしてくれし君はも
問よれとわれをまつ風音も
せず釜のうへしろく塵たまり
つゝ

10 橘曙覧筆 和歌幅「かやり」

かやり

かくろひぬる夕日のなごり 西山の空つれなうあからひきたるに 村鴉のなくなり飛ちがひ 野寺の鐘の音そことなうひびき 田ぐさとるものの いとなみはてておのが里へさして帰るなる わらはどものちまたにあまたゐて汗たるたるいさかひて つぶてうちあひなどす あや賤のめのわけさがれる髪手してつくろふつくろふ門にたちて 太郎はいづこにか ゆふげたうべ湯あみはせで 夏のたそがればかりうたてきはなしや あやにくに此あくたのくゆりかぬることよ にくき蚊の声の そよ いちはやく軒ばゆすりとよもすを などはらたちいふ みるめ物むつかし 曙覧

21 八木静馬筆『静馬一代ノ経歴録』

立教館教員之事 但シ静馬十八才ナリ

一文久元辛酉年正月十一日 世ハ文字ノ時勢トナリ 武生蓬萊町ニ松井耕雪ト云鎌問屋ナレト文学及画ノ有名ナル人ニテ 元松原ト云土地ニ学問所ヲ建築シ寄附シタリ 立教館ト称ス 藩中ノ子弟及領分其他他領ヲ論セス 漢字ヲ教授ス時ノ儒者ハ沖薊済 竹内四郎左衛門 但沖先生ハ(松永九郎ノ実父) 竹内先生ハ(東京ニテ執行 佐藤一斎ノ門弟)教員ノ役名ハ 助教 補講 句読長 句読小長 句読小長見習ノ五役アリ 生徒ヲ掌リ教授ス 父ハ句読長上席筆頭兼務ナリ 静馬ハ句読小長ヲ拝命 父子共本役兼務ニ付隔日又ハ半日立教館エ出席教授シタリ 毎月三ノ日大会アリ 旧君初一藩中出席 沖・竹内ノ内講義シ聴聞ス 又教員中ニテハ毎月二七ノ日廻読 三八ノ日輪講アリ 廻読トハ漢書ヲ一枚ツ、輪順ニ読ミ生徒ニ誤リナキヲ平常ニ試ミ且又輪講トハ孟子・小学・蒙求ノ漢書類ヲ出席ノ上籤ヲ引 其籤当リノ一章ヲ講釈ス 自分ノ一章ヲ講義終ルト 各々質問シ自分ノ意見ヲ論シ 結局時ノ判者(補講役一名出席アリ)何人ノ説可ナリ 又不可ナリト処分ス故ニ 度毎十二三章ヲ前日ニ試ミ置キ出席ス 随分困難ノ次第ナリ 又生徒ハ一ヶ年ニ一回ノ試験其生徒ノ資力ニ合スル一章ヲ撰シ 家老諸役人教授教員 列座之目前ニテ素読ス 上ハ褒美品アリ 中ハ賞詞 下ハ不出精ヲ家老戒ムト云規定ニテ静馬ハ教員ナル以前ニ一回試験ニ遭遇シ 幸ニシテ上等ニテ 扇子半紙ノ二品ヲ戴キ名誉ヲ得タリ

30 松井耕雪総会所辞任願(図版は9行目まで)

乍恐書付ヲ以奉願上候

今般不才之私義 不存寄民間より出格之御登用被仰付 誠に冥加至極難有仕合奉存候 依而者生来魯鈍之性質ニ而 逆も重キ御用筋相勤り申間敷奉存候得共 精々尽努力奉職励勤 仕度 一旦御受奉申上候処 去月下旬武生表御改革被仰出候後 於旧地頭嘆願被致候趣も有之由竊ニ承之 右嘆願之次第御裁許如何可有之哉 定而日々被仰き待居候事と奉存候 於私共茂旧恩之廉を以人情之不得止事義ニ而 同様日々奉仰候 依之連日惣会所江出勤仕候而も右一条杞憂罷在 朝夕精神昏□兎角光陰を空過仕候様相成 殊ニ前件奉申上候下地魯鈍之性質 加之即今之心痛ニ而者逆も大切之御用を乍蒙御仁慈之御趣意体認難仕候様相成候而者 自然何様之不調法筋出来可申哉も難計 是亦別而大ニ心痛至極奉存候 右等之次第厚御憐察被成下置 当今之御役義被差免候様伏而奉願上候、右願之通被

差免候上ハ 山林空閑之地江引籠、殘生を養居申度奉存候 仮令閑地ニ引籠罷在候とも 聊遊惰安逸ニ耽り放心仕候了簡ハ更ニ無御座、身命限り為御国心付候事共 巨細ニ不限草莽中より書面を以建白可仕与奉存候間 何卒出格之御憐評ヲ以右願之通漸賤之骨骸御投懸被成候ハ、 半々難有仕合奉存候以上

巳十二月 松井耕雪
(貼紙)
今般御改正之折柄 御登用被仰付事ニ候得者 嘆願之旨趣難及被取揚候事

31 山本怡仙宛関義臣・由利公正等書簡貼交屏風

* 由利公正・加藤斌書簡

改曆之御吉兆千里同風日出度申納候 先以御揃愈御堅固可為御越年 珍重此事ニ候 当方拙者儀何茂加年 藤左衛門外に当正月四日依川崎着候而 御費情被下間敷候 扱旧冬先達而御廻相成候蒸留酢 和蘭領事官殊ノ外感服 世界大一之上品と申事ニ而 二月中ニ相廻候ハハ 手本文和蘭本国江持参致度段申出候 (右ハ当二月和蘭領事官交代致し以来罷越居候者本国へ引取候由 其節持参致度と申事ニ候)可相成候ハハ二月廿日頃迄之内 上品蒸留酢四斗御廻有之候様致度候 直段之儀ハ壹合ニ付長崎相場金ニ而七拾五文宛ニ掛合置申候 乍併年々持越候様相成候ハ、少々ハまけ遣し可申敷と申込候、右御承知何卒精々御心配御廻送可被成候 ○併酢之儀ハ諸方色々取調候ても未だ引合之可付見談ハ無之候 ○判金大上り此辺ニ而ハ保金壹両三步ニ候 公辺御直段ハ式両ニ相定り可申と之風説 定而御地も此節さわき可申候遠察候 外ニ相変儀無之右酢之儀申進度如此御座候 不具

正月八日認

加 藤
三 岡

平三郎 殿

追而 春寒御自愛專一候 本文船之義此節初めて之事ニ候へハ 利潤之見込ニハ相成申間敷哉も難計 此段ハ御覚悟之上御廻被下度候 藤左衛門出立之節 和田君併夫々より御申込之儀承度御座候 未だ難及御報候間 相分次第可申上此段御口免被下候

早々以上

府中 天王屋 平三郎 殿

急用 三岡石五郎

■ 旧松井耕雪墓碑 碑文 (『松井耕雪翁伝』より)

耕雪松井翁墓銘 在京都本能寺

君諱篤 字子行 通稱六右衛門 家世居于越前南條郡武生邑 業鉦器賈 爲邑之著姓 考諱惟孝 通稱六右衛門 妣松井氏 君其長子也 既長承家 性嗜

文藝 博涉群書 最能詩畫 交道極廣 居恒深慨國內文教之衰 以扶持振作爲志 至安政三年 遂稟准邑主本多侯 拋家貲累百金 私建營一庠於邑内 名曰立教館 倡導士庶 俾皆就學 而其凡百經畫率皆成於君獨力 後舉館獻邑主以資其風教焉 君既達素志 於是 將自優游 乃傳家其長子 自此自稱耕雪 栖息其別墅逍遙園 園在邑之巽位 故又有東南別莊之名 水木清華 以勝概聞於四方 後又奉全莊于邑主 以供其燕游焉 先是自立教館之建 遠近士庶翕然輻湊 絃誦洋洋 一時稱盛 厥後雖隨世沿革 然昭代中興已來 邑人之著顯于朝野 以才以術各濟世用者 究其淵源則往々出于館之群秀 世是以益多 君濫觴之力焉 君既興鄉學 又常以殖國產爲意 邑主頗知其材可用 嘗擢爲府中町役所總代 使兼幹制產役所事 待以士格 文久中 福井老侯春嶽公 將更張藩政 會聞肥後人橫井沼山之材 聘爲客卿 延訪富強諸策 而其使命館件之任 終始委之君 君亦傾意親炙沼山 孜々贊成其績 由此又爲公所知 眷注漸渥 及戊辰維新之後 公乃召君爲封内總會所總代 君因移寓福井 遂仕藩廳 後歷官福井敦賀二縣並累進其權大屬 及敦賀縣撤乃罷 丁丑乃春 颺然游吾西京 京中多舊識 皆手額牽留 君遂寓焉 是歲十月 傭仕京都府 編輯府史 庚辰一月 以疾辭傭 自此不復仕 翰墨自娛 鳩居堂熊谷氏者與君有世交 至今之主人直行 益相熟 堂主有支房 咫尺其居宅 及君罷官 掃室以迎君 乃欣然移居 居數歲獲重疾 終以明治十八年五月十二日 歿於熊谷氏支房 距生文政二年 享年六十有七 越三日 荼毘于京郊 收骨葬于都下本能寺之新塋 法諡曰本院耕雪日篤居士 凡其經紀出直行之襄辦者居多焉 君早娶八木氏 生男女十二人 往々先天 其存者四男 長僊之助即嗣子也 次泰次郎 嘗仕于邑主本多侯 監守立教館 次某 次某 一女適某 君爲人忠信慈和 虛己下人 愛材恤窮 其出處語默 常怡然自得 雖家人狎客 未嘗見其忿怒 衆無不服其雅量焉 君之疾革也 子弟馳書白之舊主正二位春嶽公及從五位本多君于東京以謝平昔之知遇 兩主爲之投箸歎惜 並賜手書及物慰問之 有卿昔有偉績于吾舊國何嘗一日而忘之顧百事滄桑于今尚未報之語 君捧書而泣 妻子故舊之擁枕者皆泣 既而友人石津發亦聞而泣曰 嗟乎一言之賜 君其可以瞑矣 以此爲銘 孰若其不朽 雖然有遺囑焉 發豈敢弗從 乃敘而銘之 銘曰

克以布衣 愛國如家 何用扶衰 維彼菁莪
既獻芹曝 乃製芟荷 卜洛弛擔 寄蹤煙霞
皤々鬚髯 神耶僊耶 神仙不死 胡逝之俄
生去桑梓 葬天一涯 執紼誌壙 我涕滂沱
豈我私哭 輿人攸嗟

明治二十四年歲在辛卯五月

嗣子 僊之輔建 舊友等捐貲助費

正五位男爵本多副元篆額 石津發三郎(灌園)

撰文 巖本範治書

参考資料

『文久二年上京記』(写)

『文久三年上京記』(写)

『諸日記(抄)』(写)

上記資料は、昭和40年頃に武生市史編さん事業の資料調査過程で写された松井耕雪関係文書で、現在、越前市教育委員会にて保管されている。(原本は焼失したと思われる)

上京記は、文久2年(1862)5～6月に妻貞と、翌3年(1863)1～3月に福井で米問屋を営んでいた山口小左衛門と上洛した際の耕雪の日記である。諸日記(抄)は、耕雪の先代の日記の抜粋と思われる、文政2～4年(1819～21)の事項が記載されている。

これら資料は耕雪の事績を知るうえで貴重な資料と思われるため、ここに全文を掲載した。

■『文久二年上京記』

文久二年上京記 松井耕雪

上京記

文久二壬戌年

五月八日 上京記

耕雪 妻貞 僕元助 婢ます

宰領 西大井屋久左衛門

ノ

土産物持参

一 縁金 杉原半切 千枚

一 同 薄墨半切 千枚

一 雲丹 二合入箱 十箱

一 同 一合入箱 十箱

ノ合羽包ニ而京三木半迄送ル

衣服入

一 柳籠入 平大 ニツ 西大井屋荷担

同小間もの

一 同 竹長 ニツ 元助荷担

ノ

五月七日 見立之人

一 金一封断 三田村甚三郎 同慶次郎

(中略)

五月八日 早天発足 陰天欲雨

但 前夜より不寝 今朝六ツ時立 一□見立人

松井 上市端迄送り

仙之助外十一名 四郎丸茶屋迄送り

○関ヶ端休 ○湯尾峠休 ○今庄大黒屋昼飯 人足籠

ニツ屋峠迄 ○新道休 ○ニツ屋丁字屋休 番所使物

木芽嶺休 ○新保休 ○半原泊り

五月九日 好晴

○早天発足 ○谷口休 ○五ツ半過時角鹿着 唐人橋町野々屋嘉兵衛宿 ○耕雪打它(陀カ)尋参り申候 菓子一箱代三百文遣し候 ○昼後お貞・僕とも所々見物 昼後帰宅 ○耕雪七ツ時より打陀(陀カ)へ行 夜四ツ時帰宅 今日天気快晴相成 昨日より暖気加

五月十日 快晴

朝旭差込 夫より支度 暖気昨日より甚し ○一里ニ

而出口村休 ○疋田休 ○駄口休 ○山中昼飯 休

是より海津迄お貞宿駕ト荷持一人雇フ ○野口村休

○ハツ時過海津秋田屋着 ○今日天気風穏ニ而上船之

相談也 ○乗船之相談相決し 七ツ半時大津行船一艘

約束 但十三人ニ而買切故 一人前六十四文増 同暮

時□出来 皆々上船発 棹船中臥居

五月十一日 快晴

早晩船ハ小松之灘ニ在 風穏波静ニ而船ハ暈之上ニ在

ル如し ○九ツ時過ニ漸大津船場へ着○夫より三井寺

参詣 ○夫より□□□茶屋ニ休 ○夫より走り井ニ而

昼飯ヲ遣フ ○夫より日岡峠藤棚之下ニ休 ○夫より

入京 ○白川橋畔ニ而耕雪・元助髪結し 其間ニお貞・

ます・久右衛門京ニ入 三木半方へ着 ○兩人日暮寺着

○今晚蛸薬師夜店見ニお貞・ます・久左衛門同道ニ而参

り耕雪・元助手帳調付候

五月十二日 晴天

○耕雪僕元助召連 今朝北時四郎兵衛方へ参り 鳩居

立寄 留守ニ付直様中嶋屋二兵衛方へ行昼飯ニよバレ

夫より川端町よし尾へ行伊予簾注文 夫より山中春助

先生へ尋行 七ツ半過帰り植谷へ立寄り 夫より宿へ

帰る 日暮時也 俗飯 ○お貞・僕久左衛門同道ニて

四条通りより嵯峨・御室・北野等名所旧跡・神社・仏閣廻

り 今朝四ツ時出 夜五ツ時過帰宿 お貞足痛大疲労也

五月十三日 晴天

今朝ゑり□参 お貞少々買物致し ○耕雪夫より鳩居

へ行 又丸太町水口屋へ行印判証し 夫より木村□助

方へ行 書物・書画法帳見し 同家ニ而昼飯ニよはれし

夫より帰り鍵彦へ行書書類一見致し 宿へ帰りし ○

お貞今朝足痛療治致し蛭等致し昼後近辺へ出し夕方帰

り ○五ツ時過後藤田南溪・山中□助、久左衛門・同正

蔵等四人来り話し半時計ニして帰り去

五月十四日 快晴

今朝耕雪・元助髪結 お貞にます同様 ○四ツ時天井

清兵衛来り 鍵彦より掛物取来り 耕石花瓶幅持参

○夫より耕雪・お貞・元助にます西大井屋同道 本能

寺へ参詣 知恩院・大谷三角堂ニ而昼飯 暫休 大仏・

三十三間堂巡覧 俄雨ニ逢 待所ニ而休 夕立晴テ帰

る 日暮也 浴飯臥 ○今日西大井屋荷物着 此方持

参之土産物明日包配る積り也

五月十五日 (今朝耕雪北□へ行 四ツ時)晴天

今朝耕雪・お貞・元助・小ます同道ニ而寺町通り鳩居堂

へ寄 音物遣し 夫より鮫吉へ寄いろいろ買物 明日

大坂行ニ付拵致居

○蓮月江昨日礼トシテ合入雲丹一箱半切 百枚遣ス
又同人より手製之上ひんツ来ル

○一合入雲丹半切百枚 村田東圃ニ遣ス

○二合入雲丹半切百枚 □南溪子へ

○一合入雲丹半切百枚 鍵彦殿へ

今晚天井来り直ニ帰る

又中嶋屋二兵衛来り為見物 □野十入箱呉ル

五月十七日 晴天 少々曇り

今朝お貞・小ます・僕久左衛門同道大坂行 耕雪・元助
東洞院五条辻迄送り 夫より柴田先生尋参ル 先生勢
州へ御越ニ而御留守 御家内ニ逢直ニ帰宅 夫より堺
町綾小路上ル江馬君尋参り暫話し 戻り路ニ而髪結
夫より越金方へ行 坂井太郎兵衛殿尋し 昼時宿へ帰
り午飯済又直ニ坂井氏同道ニ而寺町松原下ル村田きせ
る屋へ行 隠居書画幅見物 夫より祇園へ行花の屋ニ
而酒飯 夫より又知恩院新門前松の屋某書画陶器見テ
夫より又村田へ行書画 値段相定相求し而 日暮時帰
り ○然ル処へ鳩居主人被参いろいろ話し数刻ニ而去
ル 直ニ臥ス

○二合入雲丹一箱 半切百枚 柴田先生へ

○二合入雲丹一箱 江馬□へ

○杏雨山水扇面一枚

東圃内室作押絵一枚

鳩居令娘作同一枚

メ 右今晚鳩居堂主人時被呉

○練羊羹一本 北□□四郎兵衛より

今晚五ツ時より 雨 追々雨多 近来数日晴天続き百
姓雨を待也 今晚之雨気甚快し

今日村田買物

一 金四匁二分 杏雨山水長幅

一 金壹匁三分 山陽七絶詩一幅

一 金壹匁二分 竹田人物小竹賛一幅 此ハ反ス

一 金壹匁壹分 半口山水聯一幅

メ 九匁也 改七匁式分

五月十八日 雨天

今朝越金二坂井氏出立ニ付曉ニ見立行 北庄より到来
羊羹一本遣ス

○□扇一本小□画坂井氏より呉 夫より鳩居へ昨日夜
之礼ニ行 留主ニ而夫より中嶋屋二兵衛へ行 夫より
新宮涼竹先生へ尋候処町名ヲ不知 高倉通夷川上ル処
ニ而尋行

○雲丹二合入一ツ 半切式百進呈 新宮涼介殿へ 夫
より木村□助殿立寄 留主ニ向手代留助と話し 法帳
持帰り昼飯後鳩居へ立寄書画幅之類色々見て暫ニ而帰
り 夫より寺町松原上ル村田へ行 書画幅代金払 帰
路桑細工屋枕を注文 夫より竹細工師の方へ立寄帰宅
留守中山中春助様より□押二重手管相添来り有し ○
此内一重ハ直ニツルカ糸屋へ遣ス 隣席ニ而終始心易
き故也

今晚鍵屋彦兵衛被見カステイラ一箱被呉 ○今日夷川

道具ニ向染付植木鉢一ツ求 代二朱

○蛸薬師竹細工ニ而植木鉢 黒竹卓求 代壹朱 ○寺
町桑細工屋ニ而桑枕六ツ外箱付□□求 代式分式朱

○同四条ニ而桑枕一ツ求 代一朱ト百文

五月十九日 曇天 四ツ時より晴天

朝二条吉のやニ而縞地買 菓子一箱買 代百文 蓮月
尼へ遣ス 夫より山中氏へ行昨日□押二重被下候礼申
大手まん頭廿遣ス 夫より昼飯ニよハレ 七ツ時迄話
し致し 夫より聖護院村北村太助訪行 日暮時三木半
へ帰る 北村ニ而夕飯よハレ ○雲丹一合入二ツ北村
太郎へ遣ス

今日冷氣ニ而別而日暮時より冷氣甚し

五月廿日 晴天

朝鳩居堂へ行 書画文房類色々沢山見物 昼飯ニよハ
れし此時大津より参候辻古硯一枚為見候所 是ハ頼山
陽書物相添有之ニ付 当所藤林と申方へ売申積りと申
候故 小生相求度申聞候所 主人大ニ困り 夕方主人
参り金廿三兩ニ売払申積なれ共 買上候ハ、手ニ入可
し 併左様致し□ 先方よりも又々買上申様ニ相成候
間 畢境商人之好所なれ共 私ニおいてハ好不申と申
聞 結ク籤引ニ而天命ニ任せ候ハ、如何と申聞候 随
分夫も宜候へ共 兩人突合せ候而 一方へ籤当候時ハ
氣之毒故 此方ハ参り不申 代人ニ而□様致呉候様申
居候 鳩居何らとて戻りしの昼時 梅谷兼史鳩居堂へ
参り 一集ニ話し致候而 八時より梅谷と同道ニ而木
屋町三条下ル淡路境濱氏を訪ひし 不在ニ付蛸薬師高
倉□東山堂へ同道ニ而参り 書画器物類見て□濱氏申
遣し来り 其処へ藤林主人参り 同席ニ而話し 暫ニ
而相分れ 夫より梅谷同道ニ而三木半へ帰り 大手ま
ん頭出し夕飯出し晩方被戻候 ○夫よりあんま来 済
処へ鳩居来候 四ツ時帰り去 話しハ先ニ致し置

五月廿一日 朝雨天 昼時晴 晩景迄曇

○今朝耕雪村田東圃老人へ尋参ぬ□じすゑり三筋ト会
津坂井□し□エリニ筋墨画類遣ス 暫話し帰り 夫よ
り鍵彦ニ行書画類見物 昼飯よハレ 夫より後藤田氏
行□□し 藤素君・花井□□・□井□光客林良花鳥無類
花卉卷又周当文帖・□村帖等見物致候 七ツ時帰り路鳩
居へ立寄 昨日硯之事相尋候処 未タ先方之人参り不
申聞相分り不申 分り次第可申上被申居候 夫より宿
へ帰る ○此頃京師麻疹病大流行 每家々臥居候 元
助気分あしく申 何分当分ニ而宜様養生申付候 ○晩
山中春助様御出 色々閑話致候処へ 鳩居堂主人被見
硯之事大抵話出来候趣 □□為聞候安心致し 四ツ時
兩人同道被戻 夫より臥ス

五月廿二日 曇天

今朝角□手代七兵衛参暫ク話し致 夫より本保市三郎
参り植木鉢一ツ同□一□并鳩居堂青池卓一本(別ニ土産
物色々箱入ニて)右同品同人相渡し ○夫よりあら吉参
り□信相分り 弥平書状持参 其内山口清□子書筒□
入先安心致候 ○此返事書状相認本保市へ頼遣ス ○

今朝より旅宿ニ而他へ不出処 東園男香谷尋来り一時計色々雅俗混談大ニ面白し ○夫より勢州斎藤先生へ進物之雲丹二合入三箱ト□□半切縁金五百枚 右ニ□相包書状相認□□致候 ○昼後同客糸屋主人ニ見話し致候 ○ハツ時より土産物配当調方草稿等致候 ○元助昨日より時候障臥居候 ○今朝御勅使并薩州様江戸御発駕ニ而三条通り甚賑敷由 拙子不出聞之 ○セツ時鳩居勝蔵被見暫時話し帰り 雨ニ成 ○晩木村勝助手代参り 書物之引合致候

五月廿三日 曇天

今朝元助臥居 紙新倅参り暫話し 夫より耕雪莊村柳諸子訪尋 ○雲丹一合入二箱遣候 暫話し 夫より鍵彦へ行暫居る 又高倉□川上ル新宮良祐□方へ尋行不在ニ而帰り 夫より中嶋屋ニ兵衛へ寄り 又鮫吉へ寄り帰宅 昼飯 ○昼後成山堂より靄崖竹□ト西洋燭□為持参 ○耕石鳩居すすり丁稚案内シテ木屋町三条下ル川端座敷へよハレ 書画展観 玉銅陳列茶煎酒飯大ニ雅会也 此会山中春助・後藤田南溪・忍頂寺診村・淡路□・濱竹蔵・京藤林紅園外ニ後藤田門人・鳩居兄弟・耕石ト也 夜四ツ過画飲而止 耕雪・静村兩人彼方へ御留致し 水亭ニ兩人並臥ス

五月廿四日 快晴

今朝早晩起 鴨東之風景賞翫 茶漬支度相済三木半へ帰り昼飯 後谷口靄山方訪尋 一合入雲丹一ツ・半切百枚遣ス

ヒル時頃迄色々転席致し酒出ス 此時越智□□参り 同席門人直蔵も周旋致候 ○夫より山中春助先生方へ行 晩ニ及一泊ス 元助麻疹病臥居 今朝岩堀手代大坂より帰り お貞廿一日堺之方より大坂着 一兩日中帰京ト伝言

五月廿五日 快晴

今朝山中氏ニ而色々話し昼飯よハレ 夫より帰り路鳩居堂立寄緩々話し居 後藤田南溪被見同席ニ而話し 日暮時同道ニ而三木半へ参り ○後藤田氏へ夕飯酒出ス 北村四郎兵衛来り 鳩居主人来り 北村帰去 残り後藤田・鳩居□ト三人ニ而 四ツ過迄話し 皆帰候ト

五月廿六日 曇天

今朝耕雪髪結 夫より新宮良祐君方へ参り 但だし昨日三木半へ被見 明日昼前ニ来り呉ト被申置候ニ付行也 此時新宮涼閣様へ二合入雲丹一ツ半切二百枚持参致し 帰り之路雨ふり 後藤田氏へ立寄 昼飯よハレ 雨具借用新宮涼助君へ行 書楼ニ而色々書画被為見 竹溪被見席上ニ而書画致し 酒肴出テハツ時過帰る 雨甚し 七ツ時過お貞・小ます・久左衛門大坂より帰る 但小ます麻疹ニ而伏見より通駕ニ而直ニ二階へ上り 元助も同様二階ニ居 ○今日七ツ時大垣小原鉄心三本木吉田屋ニ而招集被致候ニ付 山中より投簡申来お貞帰し処へ向イ断申遣候

五月廿七日 曇天 七ツ時より雨

今朝西大井屋へ夫々買物し 弘方詭物等取ニ遣也 ○

耕石朝より出 後藤田鍵彦中ニ鮫吉・鳩居堂へ相廻り ○鳩居堂ニ而飯よハレ 夫より三木半へ帰り暫休息 ○ハツ時より山中春助様鳩居堂兩人来り誘被申 同道ニ而室町四条上ル伊勢屋ト云 則姓ハ藤林紅園方へ行 書画剣類・古器類色々見物酒飯出 夜五ツ時帰宅

酒肴 鯛・玉子焼 一鉢 さば酢物一鉢

焼玉子一鉢 はも焼身岩茸一鉢

味りん酒

飯 向 鯛煮付甘煮 汁 肴ふくさ

衆 生菓子二種

五月廿八日 雨天

今朝耕雪安部井方へ尋行 帰路木村へ立寄 昼時帰り ○大坂儀助来り菓子一箱くれ候 夫よりお貞ト耕雪同道ニ而儀助召連因より所々相廻り土産買物致し 日暮時帰り 新宮涼介□来り暫話し被帰る 夕飯済処へ木村手代留助参り書物持参致し ○お貞夜店へ行帰宅臥ス

五月廿九日 曇天

今朝福井人帰国ニ付 帰宅延行断々書状遣ス 但安□吉帰国を聞認候を 同人延行ニ付西大井屋より福井人へ渡ス ○今朝儀助参り手拭ト汗拭ト扇子一本遣ス ○お貞ツルカ糸屋家内ト本願寺へ行昼後帰り ○耕雪昼前新宮託之扇子四本・詩画認為持遣候 昼後耕雪鳩居堂へ行勝蔵子計也 金子中勘渡し暫話し 夫より山中先生へ尋訪長談 日暮前帰宅 ○浴飯済 ○夜安部井樫堂来り竹印持参 又奥印ヒンロウ子印ト二顆頼遣ス 四ツ時帰去 ○お貞夜店行 四ツ時帰り ○今日小ます病臥不食 元助不相変由困り居也 鍵彦より印材并水吞箱入持参

六月朔日 晴天

今朝あら吉立ニ付送り物荷ニ包致 髪結鷹ハ代新参り ○新宮涼介老より使札参り

一 江戸三ツ組盃 一箱

一 丹波薄葉煙 一箱

メ贈被下

昼後耕雪・お貞・久左衛門等寺町通りより五条へ行色々買物別記之通り 柴田先生訪尋 聖堂講堂拝見 夫より井上⑤生縮面羽織一ツ求 夫より大谷三角堂ニ而飯 夫より清水祇園へ参詣 薄暮帰宅 ○留主中中ニより荷物三箱持参 鳩居堂主人鄭之玄之掛物持参 留主故宿へ預ケ帰り ○浴了鳩居へ使遣候所 夜鳩居来り 四ツ時過迄色々雅談シテ去ル 臥

六月二日 朝雨昼後晴ル

耕雪新宮氏へ参ル積りニ而出宅 路鳩居へ寄 昨日持参之掛物返却 夫より奥ニ入色々古器・書画・印材・古硯埒合見物 大衆 昼飯よハレ九ツ時過帰り 此時雲影薄小硯一・唐墨箱入一 □印一 水晶円池一ツ持帰 ○昼後お貞・久左衛門を召連御所拝見ニ参り 八ツ時帰り 此間耕雪午睡致し 夜案摩来り兩人一ツ一ツ済 但日暮より鍵彦来り 張瑞図立物一幅持参 暫話し帰

り

六月三日 昨夜より今朝迄大雨 屋根漏り

朝中野伊作来 宮奇墨竹自題横物持参 暫書画読致去
夫より雨中徒然ニ而読書或仮寝手枕日を消す 昼飯
耕雪他へ出ル積り之處江 木村手代為助書物持参 半
時計居テ帰る 此時昨夜鍵彦持参之張瑞図立物一幅右
為助へ頼遣ス 夫より耕雪鳩居へ行暫話し帰る 今日
元助・小ます皆快由

六月四日 朝より追々快晴ニ成

今朝耕雪北村太助方へ行 夫より耕雪・お貞・久左衛門
同道ニ而出 耕雪中野伊作方へ行書画見物 其内少々
買物致し 又夫より昼飯ニよはれ九ツ時過帰り お貞・
久左衛門兩人柴田先生方ニ而昼飯ニよはれ未タ帰り不
申 耕雪留守中山中春助様旅宿へ御出之由ニ而 若鳩
居ニ被居候哉と存 耕雪直ニ鳩居へ行 山中先生不居
暫話し帰り 其処へお貞・久左衛門帰り来り お貞発熱
ニ而大ニ驚き丸薬等与る也 夫より案摩申遣し候 耕
雪鳩居へ行 日暮時帰り 鳩居ニ而後藤田南溪様ニ逢
イ 同道ニ而旅宿へ帰ル 書画之求る有し物を為見候
并ニ預り有し書画類為見候 今日紙新参り国元へ為替
金廿両遣候 ○杏子一箱紙新より到来

六月五日 曇天 浴雨不雨

今朝お貞熱引少し快由也 耕雪朝安部井櫓堂へ行 夫
より後藤田へ行 山静 ○長図帖申受 夫より高倉新
宮へ行 留主ニ而直ニ行□ 夫より山中氏訪行昼飯ニ
よはれ申候 八ツ半過時辞帰り 夫より鍵彦へ立寄り
銀交扇面を見て帰ル ○今日昼後お貞快気 久左衛門
と山鉾を見物ニ出候 元助・小升も次第二快 日暮ニ皆
帰揃 羊羹一□ツルカ糸屋より

六月六日 昨夜より雨傍侘天陰

今朝山中春助并竹沢寛三郎・安部井普門三人来り 耕雪
同道ニ而衛雨テ小原鏡心氏ヲ木屋町三条下ル寓居を訪
酒肴出談話一時計 四ツ半時頃三木半へ帰る 山中氏
同道ニ而来り昼飯出ス 九ツ半時頃又同道ニ而四条町
辺屏風見物ニ行 八ツ半時頃耕雪鳩居へ行 山中氏被
見日暮迄話し帰る 木村手代為助来り お貞・小ます・
元助・久左衛門夜祭見物ニ行四ツ時帰る 今日昼後雨晴
一金のなる木廿枚 ツルカ 打陀氏へ

一同 十枚 糸屋へ

六月七日 雨晴レ 少々曇蒸熱甚し

今早天北村四郎兵衛来り 彼レ親類トテ四条通り東洞
院東入南側某宅へ案内致しくれ候 耕雪・お貞・元助・
小ます四人同道ニ而行茶菓出ル 五ツ時頃より矛山
追々出テ 四ツ時過迄ニ廿二都合口出皆通り済 夫より
耕雪出テ寺町へ出ル 途ニ竹内布珀子ニ逢候 暫同
道ニテ離ル 夫より寺町綾小路迄行所 日光宮様御上
覧トテ往来留メ 夫より麩屋町へ廻り 松原へ出中野
伊作へ行 又矛山を見ル 赤飯出 前田暢堂居暫ク話
し 昼時頃暢堂同道ニ而出 彼之宅へ立寄 水辺楼
ニ而暫ク納涼 茶菓出ル 夫より帰宿 昼飯遣う 然

ル処夫前ニお貞等帰り昼飯済 又他出ト聞 耕雪又出
テ福重へ寄 竹内氏訪フ 留主ニ而直ニ山中氏へ暇乞
ニ行 暫話し帰路鳩居へ寄 直ニ帰り ○留主中江灰
新来ルとて 高木様御手紙来り弥平手紙来り被見 □
□□出懸候 北村へ今朝之挨拶ニ行高木様之注文五種
上本尋候処無し ○夕木村為助来り お貞・小ます・久
左衛門・元助祇園祭礼ニ行

六月八日 朝雨天晴雨交互

今朝山中春助御家内御出ニ而酒とり出ス 昼飯出ス
一 市松ひろとし煙草入壺ツ山中御家内より昼後耕雪
鳩居堂へ行勘定 夫外東園□筆等致し帰り より安部
井氏へ行 夫より後藤田氏へ行 帰路寺町へ行 土産
物買求日暮時帰宅 ○今晚ハ後藤田氏・山中氏・村田東
園子・鳩居堂四人来り 暇乞して帰る

一 拙堂半切一枚 一筆後藤田より

一 香餅五包 鳩居堂より

一 扇子五本 村田東園より

一 絵短冊十枚 今 石摺一枚 書連二枚

ノ 山中氏より

今日山中御家内へ出候酒肴残物ニ而ツルカ糸屋夫婦ニ
離杯出ス

六月九日 朝曇り 四ツ時より快晴

今朝安部井普門子来り

□一連文釈義一冊持参候而受置 又福井竹内希珀来り
暫話し 兩人とも帰り去 夫より髪結ニ行 帰り朝飯
済 木村手代留助来り □一寿益糖一箱持参 受置
然ル処へ柴田先生昨夜御帰宅之由 御子息御使ニ御出
ニ付後刻参上と申□て ○右木村より到来し菓子一箱
持参 柴田先生へ上ル ○木村勝助暇乞ニ来り ○村
田香谷子来り扇子二本認持参 并ぬめえり五筋画書来
持参 ○谷口靄山子来り今日帰路廻りニ立寄くれと申
帰り ○三木半より酢物一鉢出シ味醂酒出ス 夫より
昼飯致し旅□出立也

耕雪・お貞・元助・小ます・同道 五条柴田先生へ訪行
□一 益寿糖一箱柴田氏へ 但木村より到来分 柴田
先生昨日伊勢より御帰宅也 暫御話し帰る 羊羹ト一
泉トまん金丹二包被下 ○夫より耕雪鳩居へ立寄 鳩
居堂主人送り来 中嶋屋二兵衛立寄両掛ニツ注文 代
金貳両入用ト云 夫より谷口靄山方へ行 鳩居堂又送
り来 お貞等中仁ニ居ル処へ来り 同道ニ而谷口へ行
靄山茶菓酒肴出ス ○羊羹小□進上 但柴田先生より
被下候分 暫□□□ニ成テ退出 然ル処谷口靄山同門
人直蔵并鳩居堂三人又送り来り ○熊野宮社内ニ而靄
山・鳩居兩人別レ帰る 直蔵一人又送り来り 黒谷へ参
り 夫より南禅寺へ参り同茶屋ニ而羽織衣服着かへ旅
装ニ而わらじ掛見物済 南禅寺境内ニ而直蔵別れ去
夫より大津走井迄来り休息 夫より日暮時□太へ着乗
船を相談 ○今日快晴之處益晴天 日暮時風収天晴
依而塩津迄之船一隻買切 上下五人ニ而貳貫八百文之
約束ニ而 夕飯仕舞直ニ上船 但暮ツ時迄ニ船中ニ而

臥ス

六月十日 快晴

今朝船漸堅田沖迄来り 一向風無ニ而朝来□櫓□□□
船中無聊起臥自在也 ○午時後大溝ニ着船ニ而待風
則えひす屋某宅ニ而休息致し お貞・小ます・元助・久
左衛門同道ニ而城下市町見物ニ出候 ○好天氣ニ而更
ニ風無し 夫より夕飯浴シテ臥ス ○四ツ時船人來り
起ス 夫より皆々又乗船臥ス ○舟木辺ニ而暫泊する
由睡眠中不知

六月十一日 快晴

早曉□窓旭光を拝し手水弁当遣候事 又一向風無く
今津沖より櫓声頻也 皆臥居 竹生嶋之西ノ方を廻り
四ツ半過頃塩津ニ着 湊屋弥助方へ上り昼飯遣イ 夫
より旅装出立致ス ○一里計ニ而村居ニ而休息 失村
名 ○一里計ニ而峠茶屋ニ而休 ○疋田駅ニ而休息
○道ノ口茶屋休 ○七ツ時過ツルカ野口屋嘉兵衛へ着
投宿ス

六月十二日 快晴

お貞・小ます・久左衛門三人今朝出立 耕雪・元助兩人
四ツ時過ツルカ出立 半原茶屋ニ而逢 夫より同道 新
保茶屋休 番所へ五十文遣イ通り 木芽嶺道ニ而所々
休 峠番所ニ而休息 ○二ツ屋ニ而休 お貞飯 ○跡
ハ半原ニ而昼時故飯相濟 夫より帰時ニ而休 七ツ時
過今庄藁屋投宿

六月十三日 曇 五ツ時頃より風雨ニ成

今晚久左衛門内へ案内之為早発為致 雨具皆々昨日馬
之帰りに遣し 今日内より迎人之参ルを待居候 ○五
ツ半頃雨止メ風収る 耕雪・お貞・小ます・元助四人同
道ニ而今庄出立 峠を越へ湯尾嶺麓之茶屋ニ而休 此
処へ仙之助・かへて・次助三人迎ニ参ル 暫シテ角間屋
三郎左衛門來り 夫より同道ニ而関ヶ花茶屋ニ而休息
お貞衣服着替 又同道ニ而行 大道村妙泰寺へ参詣致
し 一本杉村縄手ニ而伊藤東四郎・里見広吉・三田村慶
次郎三人同道ニ迎ニ来り 夫より一本杉茶屋へ行休
おしげ屋お徳・お門・泰次郎・謙三郎・おはる・ます・ふさ・
つと餅種嫁はつ・まさ姉皆來り居 其処へ表具屋吉四郎
來 五き屋・ひわたや・出村屋來り 又近江屋太三郎來
り・鎌六・清太郎來り皆道ニ而逢 耕雪・治助兩人先ニ
歸り お貞其外皆と松森うどん屋ニ而小昼致ス事ニ而
一足後ル 耕雪七ツ時頃東南へ着 直ニ入ル 弥平今
日東南ニ而色々支度致し 昨日始而暈を入レ 今日か
ら紙障子等はめし由 大ニ掃除奇麗ニ成処へ入ル也
東南ニ而表具屋勘兵衛大工惣左衛門・大工市衛倅・大工
清七・仲次郎 父より榮造等皆々挨拶致し○暫シテ松村
甚左衛門東南へ参り 八木流光來り 七ツ半時頃お貞・
仙之助其外皆々東南へ來り ○出入之者ハ皆本宅ニ而
飯酒出し候事ニ而 本宅へ遣し 五六人計東南ニ而夕
飯出ス 耕雪・松村兩人同道本宅へ歸る お貞其外日暮
時本宅へ來り ○日暮時過紙新丈□來り 又貴志母子・
伊藤家内來り ○座敷ニ而酒 松村・里見・紙新父・鎌

六・耕雪・仙之助等一杯致候 ○弥平其外西大井屋申遣
店ニ而一杯相濟 ○四ツ時過臥

六月十四日 朝晴天大暑也

伊藤・上浅井・三田村・貴志氏追々來り ○伊藤計昼飯
出ス 色々話し致候 ○八ツ時山本來り話し 中新在
家内田参り ○本保河野次郎右衛門・同良輔兩人被見
内田歸り山本残り座敷ニ而酒出ス 日暮時被歸 ○今
日河野おしげと被戻留守居頼置候処 今日迎之者参候
ニ付歸られ ○晚ニ福井岩井屋來り 山本夕飯出し
夫より兩人被歸

六月十五日 快晴

今朝髪結押久來 米沢藤七・里見・三田村來り 新在家
田邊來り ○序ニお貞珍頼昼飯出ス ○八ツ時耕雪東
南へ行 弥平同道也 ○今朝西大井屋荷物一箇持参致
ス ○東南ニ而蔵より箆筥等出し急ニ取片付 日暮本
宅へ歸る ○晚嶋屋内・里見内・斎藤母子來りあん餅茶
出ス ○九ツ時就寝

六月十六日 快晴

今朝より京師買物等記帳 昼食後耕雪高木様へ行 夫
より東南へ行 七ツ時本宅へ來り ○留主中角増來
○七ツ時より耕雪三田村へよハレ 夜四ツ時歸り 但
酒肴夕飯出候 帰路山本同道ニ而帳合 米会所米屋嘉
吉行帳合 手始也 歸り後安立吉左衛門・井筒屋七兵衛
兩人被居 四ツ半時分帰宅 ○今晚当家自身番也 表
明ケ居

六月十七日 快晴

今朝京師より福井へ届ケ物取調へ 山口氏向ニ差出ス
○四ツ時より留主見物并暇そ帰宅祝ニ被見候方江礼廻
り 喜林ニ而昼飯遣イ 夫より方々廻り七ツ時帰宅
○本保河野茂三郎殿被見 ○日暮時山本同道東南へ行
四ツ時過帰宅 ○京都買物荷物未着 西尾へ催促申遣
湯谷・今泉方へ今日荷迎ニ人遣候由
○店才助不届有之 耕雪留主中暇遣ス由 乍去不届を
咎メ申時ハ彼迷惑ニ相成ニ付 彼方より暇願候様弥平
取計致候由 弥平より申聞候

■『文久三年上京記』

文久三癸亥年 正月十二日

発程 快晴微暄

昨十一日山口清香君福井より來ル 僕長左衛門者召連
レ輿丁二人 即夜山口氏同道山本江招飲 二更帰宅
旅装支度 三更後就寝 ○早起整衣 僕元助召連駕用
意人足四人 福井より帳面ニテ山口氏持参 但分持ノ
二人ハ兩掛ニ荷也 駕人足二人ニテ道中一人増し 但
引戸故也

○十二日朝山口氏逍遙園ニ來辰婢同道 発程送者數十
人 松森村迄來 旅亭ニテ別レ去 唯仙之助・理助兩人
今宿駅迄來り別去 ○蓋此行京師ヨリ南部彦助様福井
表御勝手役本月三日発 早飛脚之序ヲ以 御召状ニテ

御奉行中ヨリ御用ニ付早速可罷出トノ御用之由 山口氏同道ニテ支度次第一日モ早く出京可致トノ御文面也
○右状六日府中ニ達 既ニ六日午時山本怡仙同道出福訪山口氏時府中ヨリ御状持参 則六日夕談合 七日御目見相済 八日山口氏江御上様ヨリ被仰付トテ 則十一日福井発と決談 十二日ニ府中ヨリ同道可致ト相約テ帰ル 夫より家内ノ者共ヘ支度為致候

○十二日今庄駅大黒屋午餉 ○二ツ屋駅投宿問屋某宅

十三日 春晴 微暄

早発 木芽峠ヲ越ヘ未早正田駅ニ至ル ○午時谷口村ニテ午餉也 ○今日正田駅人足不足ニテ則北国屋某宅ニテ投宿ス 未刻僅過時也

十四日 好晴風寒

今晩八ツ起ニテ旅装 人足来リ 直ニ用意出来発ス 山中駅ニ至テ漸明ル 小豆茶店ニテ休息 又至千原休息ノ処 長谷部様御帰国ニテ御目ニ掛リ 暫茶屋ノ座敷ニ入御話有之 相別テ行○海津ニテ休 今津伊勢屋ニテ午飯 夫ヨリ河原市本陣ニテ休息 夫より小松駅迄人足発ス 白髯明神ノ社辺ヨリ西風烈シク 興ヲ吹落ントスル事数度 薄暮漸小松駅ニ達ス 豆腐屋某ニ投宿ス

十五日 好晴暄

早晩発ス 灯燈数里衣川ニ至 午餉中村屋某宅也 午後風寒シ 唐崎ニテ休息 八ツ時過大津矢嶋氏着 主人他出ニテ無程帰来 問談数刻ニシテ申刻ニ至 矢嶋氏案内ニテ伊賀屋某宅ニ投ス 兩人髪月代ニ出テ帰ル 矢嶋藤五郎殿来□茶□□日暮ニ帰り去 兩人休息

十六日 好晴春暄

朝矢嶋氏旅館ヘ来 問談数刻ニシテ去ル □手代栄助来リ暫ニシテ去ル 岩崎鷗雨来リ暫時ニテ去ル 巳刻山口氏駕 耕雪歩行ニテ発ス 午後京六角通三木屋半兵衛宅投○午餉喫了テ 兩人旅装ノ俣ニテ二条油小路上ル処寓居南部彦助様ヘ着達シ致ス 留守ニテ直ニ帰ル○帰路鳩居堂ヘ立寄ル 留守ニテ帰り 遠山雲如翁ヘ訪行 病ニ臥ス 病床ヲ訪テ帰ル 夕竹屋忠兵衛手代来ル

十七日 晴天 微暖

今朝兩人同道二条御屋敷ヘ出ル 南部氏ヲ訪暫ニシテ帰ル○聖護院村ヘ行 山中春助先生ヲ訪 又帰テ梅屋敷ヘ行 梅花未タ全ク不開 故ニ直ニ帰り去ル 中嶋屋二兵衛江立寄り 暫ニテ帰り鳩居堂ヲ訪 午時三木半ヘ帰来ル 午餉後六条ノ方角ヘ行 途ニ五条ノ柴田先生訪 直ニ帰ル 夫より六条惣会所ヘ往ク 伊藤友四郎様・出淵伝之丞様・牧野様ナント訪 狛山城様ヘ伺イ御目通致シテ帰ル○夕飯後ニ二条御屋敷ヘ行 毛受様・勝木様ナント訪 南部様ヘ行酒茶御饗応有申候 席上青山氏・坂川・岡本・吉村三人 小算衆也皆来リ 森賢太郎殿来リ 四ツ時前辞シ帰る

十八日 雨天

昨夜人アリ 明早朝六条総会所ヘ出勤致候様との御使

也 昨夜三岡様大坂より御帰被遊候故 急御用ニ候条 早天可罷出との御事也

早起手水後朝飯ヲ不待シテ 直ニ六条総会所ヘ出ル 三岡様ヘ御目ニ懸ル 御内談数刻ニ及辰ノ刻頃勝木様・出淵様・南部様 其外諸人御出ニテ御談話有之 其間ニ兩人朝飯頂戴致ス 今日午時御発足ニテ 御国元ヘ御立帰りニ御越被遊候由ニテ御先触出ル○御離盃ニテ昼時迄御席ニ居ル 午飯後狛様ヘ御暇乞被遊 直ニ御発兩人五条橋上迄御見立申上候而帰る 途寺町通り江戸仕立屋其外二・三軒立寄申刻三木半ヘ帰来る 夫より夕飯後兩人二条ヘ行 南部様ニ而御酒被有 五ツ半頃帰る休

十九日 快晴

早起梳髪シテ帰ル 鳩居主人・竹忠手代等来ル ○巳刻村田東圃ヲ訪フ而鳩居堂ヘ往ク飯饗応 未刻辞帰 安部井樫堂ヲ訪 鍵彦ヘ立寄 夫より直ニ二条ヘ行 南部氏ヲ訪 南部氏兩人ヲ連レ御屋敷三井氏御仮宅不残拝見シテ 南部氏ヘ還ル 酒肴饗応 ○今朝南部氏結構有之昇進ノ祝儀呈上○申刻ノ後帰 後藤田南溪翁ヲ訪 暮時旅館ニ帰る

廿日 快晴 暖日

朝敦賀内海元紀来 柴田賢蔵先生来 各暫ニして去○兩人同道寺町通遊行 中野伊助ヲ訪フ 午後還ル 祇園茶店午餉栗飯 知恩院境内ヨリ聖護院村住山中氏ヲ訪 坐香谷来リ居 少間ニテ帰ル 中嶋屋及鳩居堂ヘ立寄□旅ヘ帰ル○午二条御屋敷ヨリ御使毛受様御用ニテ出ル 二更時帰り息

廿一日 晴天蒸気含雨

早起鳩居ヘ簡シテ新宮氏来 山口君診察配剂去 巳刻兩人鳩居ヘ行 内談数刻帰ル○兩人同道午後菜山堂ヘ訪 又文笈堂ヘ立寄 五条柴田先生ヘ往ク 酒茶饗応 聖廟拝参問談数刻ニシテ帰ル ○帰途松原大丸ヘ寄り 帶一筋購求帰る

廿二日 雨天

今朝二条御用召アリ 山口氏不快臥居 耕雪一人参ル 毛受様より御内命有之承リ帰る 山口氏同道鳩居ヘ行 内談数刻ニテ帰る 途梳髪シテ客舎ヘ帰る○元助昨夜より発熱ニテ臥居○雨中徒然午後案摩来○文笈同堂来○竹忠手代来○昨新宮涼介君ヘ仮宅ノ事談ニ及 今日折簡ニテ室町四条上ル西側沢屋治兵衛方裏座敷ヘト居申来 明朝転舎ノ積リ

廿三日 朝春蔭 午後晴

今朝山口氏同道 二条御屋敷ヘ往 毛受様ヘ出 昨日鳩居堂引合屏風ノ事申上帰ル 中根君江訪 御不快不得拝顔 夫より南部氏訪直ニ帰ル 又山口同道西洞院二条下ル絵善ト云表具師ヘ往 屏風仕立ノ相談 鳩居主人来居 決シテ帰ル 途木村勝助ヘ寄ル 書画書籍一覽 午飯喫午刻後帰ル 中嶋屋ヘ寄り又鳩居ヘ往ク 絵善来リ屏風ノ事相決シ別去ル 申刻客舎ヘ帰ル 僕ヲシテ室町沢治方ヘ雨掛ヲ持往シム

廿四日 昧晴 輕寒

今朝在宿巳刻出テ 萊山堂往 午飯饗応未刻帰ル○直ニ西洞院常化堂へ立寄ル 御屏風ノ仕立決着シテ帰ルニ条御屋敷へ出 毛受様へ伺六条御出留守 南部氏訪病床ニテ談話少時ニテ帰ル 途中毛受君馬上ニテ六条ヨリ帰ニ逢フ 随テ御屋敷へ往 御屏風常化堂より持出御内見ニ入ル 夫より直ニ退出シテ途中嶋屋へ寄 鮫吉へ寄 鳩居へ往キ用談相済 日暮時辞帰る○元助未快留守居 今日岩崎鷗雨来 不逢シテ去 又木村ヨリ書物書画持参 中嶋屋・萊山等色々持参 晩ニ休息○今日新村屋宗八帰国ニ付書状認遣ス 買得之物送り遣ス 明朝發足ト云

廿五日 快晴 漸暖

今朝岩崎翁来閑談少時ニテ去ル 竹忠手代来○辰刻出六条狛大夫ヲ訪御留守ニ而 奥村儀兵衛君・金吾友左衛門君兩人ニ逢 閑談少時ニ而帰る 又東学林ヲ訪能勢賢太郎君ニ逢帰ル 途中床ニ入梳髪テ出 夫より五条橋ヲ渡リ東山へ行 途ニテ陶器ヲ購求 西大谷へ行 三角楼ニテ午餉・休息夫より清水観音参詣而還途中野氏ヲ訪テ鳩居堂へ往 少時ニ而帰ル 北村書肆へ寄暮時客舎へ帰ル今日山口氏同道 僕長左衛門一人也 元助風邪大ニ快ト云 養生ニテ不出也

廿六日 春陰 午後漸雨

今朝竹喜来少時ニ而去 巳刻前山口氏同道ニテ出香谷ヲ訪 閑談数刻ニ而帰ル 直ニ二条御屋敷へ往 勝木君・南部氏御不快ニテ見舞帰ル 又転シテ遠山雲如谷ヲ訪 午刻過客舎へ帰ル 未刻又出萊山ヲ訪 留守ニテ帰ル 北村書肆ニ寄頼立齊ヲ訪 申刻ヲ過ク薄暮客舎へ帰ル

廿七日 春寒料□如剪漸雪如鷺毛瓢

朝来 竹忠手代・玉宇主人並来 巳下刻出三条西村店ヲ訪 少時ニ而帰ル 鮫谷中ニ寄 直ニ聖護院村ニ至 山中先生ヲ訪 俵屋治三郎在野同道 村祠境内梅茶屋ニ往 酒飯午後より申刻ニ至 山中先生・俵屋来 山口氏・某四人縁坐ニ而閑談天寒無限終辞帰 客舎ニ帰ル時既薄暮也 西大井屋利作来 昨日京着ト云 伊藤より書状并法帖一冊持参 紙新も京着ト云未来○伊藤添状ニ先使ニ西大井屋久左衛門へ書状出トアリ然未着○明朝着

廿八日 快晴 風寒

今朝紙新手代之来 伊藤書状持参 絵善来手附金渡ス又成見如山君来清談数刻ニテ去 午刻後山口氏同道ニ而出 萊山樸堂翁与双堂鶴居堂ヲ訪帰ル 薄暮客舎帰来○今朝元助快気ニテ 山中先生へ書翰遣ス 伊藤法帖為見ト□定ノ為也 返書来ル

廿九日 漸雨輕寒

今朝森五平来 少時ニテ去 又西大井屋久左衛門来 和作昨日帰ト云 山本返書并伊藤法帖返ス 自宅へ御上ノフラスコツ中ニより取来り渡ス ○尋双堂来少時ニテ去○午刻後一睡書見閑暇也 申刻山口氏同道文

笈堂へ行 玉宇へ往寺町四條街ヲ回り返ル薄暮時也 晩村田香谷来一酌饗応ニ更前帰り去

二月朔 好晴

今朝辰刻後同道五條通柴田先生を訪 少時ニ而帰ル 又六條惣会所へ往ク 伊藤友四郎君へ訪 牧野君・松山君来 酒肴・御茶数刻ニ而帰ル 狛様御留守へ伺フ 金吾氏ニ逢テ帰ル 午後客舎へ帰ル 喫飯シテ又出三条糸喜へ寄り 鳩居堂へ往 正蔵子ト相對シテ相談話 長州藩中木原又左衛門ト云人ニ邂逅ス 申刻後帰ル 途三木半ヲ訪 薄暮時帰舎○晩木村勝助来 初更後帰去ル

二日 快晴 四ツ時より烈風漸雪 又晴 又風雪 寒氣甚

今朝本誓願寺町俵屋治三郎ト云姓山田氏 過日山中先生宅ニテ邂逅ス 今朝使ヲ以山□□一本宛贈来 ○玉宇来 珍物持参少々買求帰ル 谷口靄山暫閑談帰去 文笈堂今日文□□ニ而書画市已ミニ付誘来先去 ○午餉後二条御屋敷より使来 午刻後兩人同道 南部様宿居へ往が藤藤左衛門左衛門今日伏見より御越ニテ御話承□ 一昨廿九日中将様大坂御見舞ニ而 昨日大坂表御發駕 明晩伏見御泊り 明後四日御京着ト御定之由 兩人承之大ニ乍恐安心致候事也 御内御用之御調物 御内談にて未刻辞退客舎ニ帰ル○三岡様廿九日御国御遣セ明三日御着之由

三日 晴天風寒

今朝早天長左衛門大津へ 三岡様御着ニ而遠見ニ遣ス 兩人同道ニ而辰刻後萊山堂へ訪 又北村四郎兵衛へ寄 鳩居堂へ往ク而閑談致ス処 長左衛門大津より走り帰り 只今三岡様五條方へ御越ト云 直ニ兩人鳩居ヲ出 五條道往ク 橋上ニテ御日ニ掛ル 御伴シテ高倉通り 東学林へ御着 少間御話承申退出 客舎ニ帰リ午餉 此時中野伊作来又二條南部氏より御使ニ而直ニ兩人同道二条御屋敷へ往ク 又勝木様ト南部様御同道ニテ往ク 又夫より退出 七ツ過ニ又出勤致候様被仰付依之退出 中嶋屋鍵彦・木村等へ寄直ニ二條御屋敷へ往 此時申刻後也 暫ニテ退出シテ客舎へ帰ル 薄暮時也 晩山や宇助来酒出ス 明日出立ニ付郷里へ遣ス書状認 山本へ小巾□送り遣ス 木村勝助主人来 大竹斎其外書物類持参 五ツ過頃帰り去

四日 好晴 春暄

早朝起五條通りより伏見街道へ中将様御行列拝見ニ罷出候処 武田路御通行ニ向不得拝見 午前帰り来 三角楼ニ而昼餉酒飯 未刻前田鴨(暢カ)堂ヲ訪夫より村山藤汀ヲ訪ス 松原通り寺町へ出高辻通津農善兵衛方へ寄 留守ニ而去 夫より鳩居堂へ往ク 此時申刻也 主人舎弟兩人ト相語忽東町御奉行与力草間烈五郎殿ニ邂逅 兩三日前御召出ニ而再勤之由 少間ニテ被帰 又少時ニ而山口氏同道ニテ帰客舎ニ来 時既黄昏□□也 今日□中将様御行列不得拝見遺憾トス併御在京中屢拝見之樂有之也

五日 快晴 春暄

今朝兩人袴・羽織・紋付衣服也 昨日□中將様御京着恐悦也 廻勤勝木様・三岡様・南部様三軒罷出夫より新宮涼介様へ寄不在 途笹屋弥助へ寄夫より転シテ山中氏ヲ訪 午飯ヲよはれ 未刻帰去 蓮月焼爵盃箱入三ツ宛買求 又植吉へ寄直ニ客舎へ返ル 留守中南部氏より書状来有之 応挙三幅対持参ニテ 早速御屋敷へ出勤致候様との事也 依之鳩居へ右掛物取ニ遣し 戻り次第兩人同道出勤致候 則申刻也 御台所ニテ暫待居会津様御出ニテ御退出後 兩人御座敷へ出 毛受様・三岡様・勝木様・加藤様・南部様・青山様皆々御列坐ニテ掛物類色々拝見御内許拝聴シテ退出 日暮時客舎へ帰り来○今朝竹喜来 昼時奥村儀兵衛様来 毛受様より御手紙且御七日かさひ等被下置○晚竹忠手代来○二更過迄山中氏よりかり来り時勢の变革の書物類書致也○北村四郎兵衛来少時ニ而去

六日 陰天花曇気色暖気也

朝より昨夜写物之残りを写す 玉宇手代来○又古郷家信来 但木綿嶋拾貳枚・袴三具来 三岡様御家来とて新助と云人持参致候也 尤弥平手翰中ニ有之 家内無事ト聞心うれし○午前閑暇 午後書見 未刻玉宇蒔絵御道具類持参 長左衛門差添御屋敷へ差出ス○又山中先生来ル 飯・酒・茶菓饗応清談及数刻薄暮時過帰去○申刻ノ後山口氏御屋敷へ罷出ル 御屏風ニ仕立方少シ相違有候 右之当惑直ニ鳩居へ申遣候所 暮過時□弟□蔵来 右之仕立方明朝絵善ト同道納方引受人方へ行入魂談致候様申聞候也○片屋市太郎来 竹忠手代応挙三幅対持参致候也 初更皆帰去○今晚兩人心配之事起 内談夜半ニ至る

七日 陰天少風アリ 蒸暖

今朝山口氏同道昨夜竹忠持参之三幅対持参 二条御屋敷へ罷出 毛受様へ御覽ニ入又絵善方へ行御屏風出来ニ付持参ニ而御屋敷へ差出ス 夫より兩人三岡様へ罷出 昨夜之内談之趣内々申達候処 大ニ御受方宜敷兩人安心致し帰り来 夫より中嶋屋へ寄○鱒壺本御国より来ルトテ三岡様より兩人へ被下候ニ付持返り帰 途鳩居へ立寄り鱒半分遣し 夫より客舎へ帰ル 此時新宮涼民・涼介兩君より五重結之□肴并酒二瓶贈り被下 依之其重俣兩人より又々三岡様へ差上ル○昨夜山中氏内談之事兩人心痛致居候処 大ニ快闊ニ相成候故 此段一筆相認山中氏へ安心之為差遣ス 申刻兩人同道出テ高辻津国屋善兵衛方へ行テ骨董見ル 晚ニ及テ帰ル○薄時大津矢嶋手代平三来ル 益寿糖兩人へ一袋ツツ呉 依之今朝之鱒半分遣ス 又竹忠手代来 又北村太助来 遜志齊全集持参相求置○今日四ツ時成見如山子来り話ス 午飯出ス 又鳩居堂主人来 昨日屏風之事話合済閑談少時ニ而帰り去 但未刻前後手閑ニ及○昨日福井便りニ書状認遣ス

八日 風雨烈申刻ヨリ風□

今朝梳髮絵善来○野村新十郎殿来少間話 又木村勝助来少間話し帰る 午飯後暫午睡 今日雨中ニ而無聊甚

申刻西大井屋来り 買得之物三四品渡ス○今日先斗町何某宅ニ而藤村所持し黄石斎書幅展観の事 昨日萊山より申参□□□□テ風雨ヲ怯レテ止ム 晚香谷来話

九日 陰晴不定

今朝同道三岡様へ罷出 御屏風・御掛物等之代金之書付差上ル 夫より御屋敷へ参ル 南部様より為替切手出ル 兩人帰り六角万善ニて金子受取 夫より鳩居堂へ行払方致し 午飯よはれ候 未ノ刻竹忠へ行払方相済帰ル

十日 快晴

今朝西大井屋来 明朝出ト云 送り物品々相渡ス午前閑坐 午後鳩居来 西村主人来 皆少間ニ而去 萊山手代・文笈手代・玉宇手代等来直ニ去 晚紙屋手代之ト西大井屋兩人来ル 又村田香谷来 明朝久能行之相談致候也 今晚酒出ス 初更皆帰去ル

十一日 快晴春光蕩□

今朝同道香谷子を訪 香谷周旋ニて久野氏ヲ訪 茶室ニ入酒・茶・蕎麦等饗応 陳□則蘭竹顔標花卉将子星蘭亭四幅対等展観 已刻後辞帰ル 客舎ニ而午飯 香谷来飯後又同道山中氏訪 越智高嶺ト梁川紅蘭女史来邂逅ス 兩人去テ又山中氏香谷ト同道ニテ瓢亭へ行 酒肴ヲ命シ兩人へ饗ス 日暮帰ル 紙新来居会所上納金百六拾兩受取 兩人印形し受取書渡ス 江馬天江子来初更後帰去

十二日 快晴漸暖

今早天二條御屋敷へ行 中將様御参内拝謁之処 昨晚俄ニ御延行十六日ニ御定ト聞テ直ニ帰ル 髮結朝餐等致し 又御屋敷へ行 夫より帰路鍵彦へ行中ニヲ訪鳩居堂へ行 午飯よはれ 夫より帰ル 晚迄休息

十三日 快晴暖気

今朝本多飛騨様大津より御入京ニ付 兩人同道蹴上迄御迎ニ出ル 四ツ時頃御着ニ而御目通致シ 御酒頂戴 加藤多兵衛様其外御目ニかかり 伊藤友四郎様・松山様御迎ニ御出ニテ 御同道ニ而御供シテ 三条烏丸迄参り 夫より旅宿へ帰ル 松山様御出ニて昼飯出ス 夫より休息午睡十分御也○今日暖気甚明日之雨ヲ醸スト見ル 風立テ夜難寝

十四日 雨天 風止午後雲雨

今朝鳩居堂主人来 同道ニて雨中御池屋敷へ行 草間烈五三郎殿ヲ訪 閑談数刻ニ而帰り 又平塚瓢斎翁ヲ訪テ 又数刻ニ而辞去 此時午前也 夫より油小路本多飛騨へ出ル 昨日之御機嫌同也 又三岡様へ出ル 今朝草間・平塚兩家へ参ル事など申上候也 三岡様少々御不快ニ而御休シニ 暫ニて客舎へ帰り午餉 未刻ニ鳩居へ行 転中嶋屋へ行 薄暮時帰ル 晚香谷来話初更帰去

十五日 花陰

今朝髮梳同道出藤彦へ行 已刻出テ木村勝助方へ行 鄭君房墨譜ヲ観ル 午飯饗ス 未刻出テ二条行三岡様ヲ訪 又本多飛騨様ヲ訪 加藤太兵衛様迄御菓子一箱

差出 又御次中江兩人より御酒料トシテ百疋進申し
夫より帰ル 忽菅沼君御出ニテ頂妙寺ニ滞留ト云 郷
里より届ケ金不入書状相達○昨日本多様御飛脚早ニ而
出立ニ付返事書状認遣ス○元助前田暢堂ト村山荷亭へ
土産物等 服紗一枚・雲丹一ツ宛為持遣ス

十六日 天氣好風寒

今朝早天ニ起 手水次第直ニ山口氏同道二条へ走り行
テ 三岡様へ行 朝飯戴ニ御宅ノ前ニテ 中將様御参
内拝見 御供衆皆々御装束ニテ立派ナリ御騎馬之御方
中根様・毛受様・嶋田様御装束元冠ニテ 騎馬其外御献
上物皆白木御長持ニテ 九棹有之 朝五ツ時過頃御通
行拝見済 夫より三岡若旦那と御同道蹴上ケ迄 殿様
御入京拝見ニ出ル已刻後追々御着ニ付 白川橋辺迄戻
り居 御行列大勢御鉄砲前後二百挺・御槍数百本也 御
人数不何数 松平様御殿也 夫より御通行之拝見畢テ
白河ニ沿テ南行 祇園花月亭ニ而午飯喫シ 夫より東
六条へ行 松平様之御旅館へ恐悦ニ罷出 客舎へ帰ル
是時申刻也 休息○兼山画帖・扇面持参買中ニ買物持参
木村書物持参 玉宇へ巾着交易山口氏僕ノ子息来同宿
十七日 晴天 陰雨 往来風寒

今朝同道堺町富士彦方へ往 色々買物出テ 三条堺屋
店ニ而法帖一冊求 鳩居堂へ行色々談話 午飯饗応
未□時頃出テ中ニ行 留守ニ而帰り来 今日風寒客舎
ニ休息○申刻山中先生来 晩帰り去 富士彦倅買物等
持参也

十八日 晴天

今朝富士彦来少時去 又暫ニテ高乗道明来 菱田海鷗
来午飯饗ス○福井□より倅吉次郎帰国ニ付山口氏送候
物内へ介石梅屋掛物類遣ス 書状認渡○申刻山口氏同
道西大谷辺へ行 途ニテ本多飛驒様・岡部豊後様・岡部
□之助様ニ邂逅 御休ニテ祇園参詣 帰路一力茶屋へ
行 杯盤出舞妓□□十人計出夜初更後帰客舎

十九日 快晴

今朝梳髪 竹忠手代来去 夫より同道五条へ廻り鳩居
堂へ行 午時帰り午飯 又出 下寺町松平様御旅館ヲ
訪山村文太郎殿ニ逢 帰る 寺町買物少々致候 夫より
二条へ行 本多様・岡部様へ 昨日之御礼ニ罷出 三
岡様へ行□松平様ニ邂逅シテ帰ル 途村田香谷ヲ訪
日暮過帰る

廿日 朝晴午後雨天

今朝押久来 昨日京着ト云 則郷書持参 山本・松村書
状共来 暫ニ而去 午後木村勝助来暫ニ而去 未下刻
同道衝雨而出 成見如山子ヲ越□ニ訪押久ヲ三木半ニ
訪中ニ行□彦へ寄 薄暮時帰り来○本多飛驒様より
鯛二枚被下候○晚木村勝助来押久来酒肴饗ス 初更迄
皆帰り去

廿一日 雨霽 快晴

今早朝香谷書画帖ヲ携来 少間ニテ帰去 松忠来染物
類申付 鳩居堂主人来書取物持参 暫ニ而去○已刻同
道ニテ出○中ニ寄遠山雲如翁訪 夫より山中氏へ行

同道ニテ藤井竹外翁ヲ訪 不在転シテ頼支峰ヲ訪途ニ
逢 夫より長□寺花ヲ見ル 下テ祇園花の屋午飯酒
山中氏同書生土藩古沢迂郎ト云歳十七 同道ニテ飯後
四条川原町迄同道ニテ別帰る○一睡ノ処へ木村勝助法
帖持参 暫ニ而帰ル 申刻後ニ同道二条へ行 本多様・
三岡様・南部氏等廻り 薄暮時帰ル 晚香谷来少間ニ而
去 二更就寝

廿二日 快晴 今朝嵐

今朝途ニ□中將様御□馬ニ奉逢□今朝同道ニ而 山中
先生方へ行 但肴酒等持参ニ而 音羽ノ瀧花見之約束
也○辰刻同道山中氏へ行 藤井竹外・梁川紅蘭・松本謙
三郎・富岡有輔・古沢迂郎外ニ長州澄川藤蔵・淡介・伊藤
助又・江馬天江・谷口靄山又成見如山・山中夫婦皆同道
申候 堤通りヨク白川村へ行北へ折 一乗寺村ヲ越テ
朱覚寺村へ出 林丘寺宮様門前ヨリ 溪山之間ニ入
飛泉之ニ而開宴 午刻後下山シテ 山端茶屋ニ而残肴
ヲ開 夕暮帰ル 途俄雨 薄暮時客舎へ帰ル 晩鳩居
堂来 又木村勝助来 二更皆去

廿三日 昨夜雨今朝晴

朝梳髪 已刻同道ニ而出 富士彦へ寄 鳩居へ行 午
飯饗応中ニへ行 此時未刻客舎へ帰ル 平塚氏上書写
取○小川由松来 竹忠手代来○今朝成見氏来 廿五日
帰国ト云

廿四日 昨夜漸雨今朝蔭

今朝鍵彦来 書画幅持参 暫ニ而去 已刻南部彦助様
より御用状来 兩人同道ニ而二条御屋敷迄罷出ル ○
文言

相逢御用之儀候間 追付二条□御屋形御産所迄各同
道御出可有之候 為届如此ニ候 以上

二月廿四日

山口小左衛門様

松井耕雪様

南部彦助

右御使持参也 直様兩人袴着用罷出候処

白木□付杉重一組

白木盆二載

上重御茶二袋 銘友白髪同□生

下重御菓子 生菓子 名不知

メ 丸形 角形

右□トナク御手元より被下候 南部彦助様に□□是ハ
毛受様より御達ニ相成候事 早速御礼ニ罷出厚御礼可
申上との御事也○中飯後早々兩人毛受様・三岡様・南部
様夫々御礼ニ罷出ル 長谷部様今朝御京着ニ付 直様
罷出候所 御留主ニテ客舎へ帰る 夕飯済テ又夜兩人
同道長谷部様へ罷出ル 暫訪居候処へ無程御帰りニ而
二更頃迄御話承り帰ル 御酒肴出ル 天方様御出ニテ
御同席ニ而御話承候也○今日御水□其より 大坂より
帰りニ付 押久頼書状有之 屏風并両掛片々頼遣ス○
明日成見如山子發足ニ而書状頼遣ス事○今晚長谷部様
御国之義先大概相済候上ハ 何時ニ而も帰国可致候と
の仰ニ而 難有御受申上候也

廿五日 北風凜烈落天不雨

今朝兩人出鳩居堂へ寄越佐へ行成見氏今日発足ニ付見立暇乞致し帰ル 中二へ寄 夫より堺町御門へ入御所拜見 下立旁々出 北野菅廟へ拜参 夫より平野社へ参り 二条御城へ廻り帰ル 中将様御出馬ニ逢ヒ拜見 三岡様へ行 午飯頂戴 出テ長谷部様へ訪 客舎帰ル 今日村々外寒風ニ而困留守へ平塚瓢斎翁来 不遇シテ帰去 兩人申刻出平塚氏ヲ訪 又留守ニテ不逢申置テ帰ル

廿六日 快晴 暖気

今朝在宿早朝兩人同道 平塚瓢斎翁ヲ訪 色々閑談 文久永宝之事ニ及 畿内之図・墓墳之記等□□帰ル □□来家信有之暫ニテ去 又木村勝助来 外ニ婦人二人来 午飯饗ス 午後皆去 兩人同道二条行 長谷君嵐山岡ニ而三岡様へ行 追々御来客ニテ帰ル 梳髪未刻後野村氏月次能見物ニ行 主人三次郎シテ舞ニ而 盤渉・鵜飼二番 狂言一席ニ而帰ル 万歳納也 晩村山藤汀来暫ニ而去 又中二来暫ニ而去 夫より同道長谷部様御寓居へ行二更頃帰ル

廿七日 快晴

今朝松平源太郎様御家来一人・三岡友蔵様・山口松井家来二人 上下都合七人同道宇治行 昼時菊屋ニ而酒飯申刻立葵標かたき屋ニ而茶求 薄暮時□の屋某ト云橋詰之旅館ニ投宿ス 今朝会□候ハ藩中数百人ニ而 浪士之潜伏ヲ探搜捕帰ル 大ニ騒し

廿八日 快晴 蒸気暖

今晩七ツ起ニ而宇治ヲ出テ辰刻京師へ帰ル 草臥□ 午刻三岡友蔵様御出酒飯饗ス 午睡覺後帰り去 申刻兩人同道ニ而出長谷部・三岡御両家へ行 皆御留守ニ而帰ル 遠山翁訪鍵彦へ寄 中二へ寄り硯注文致し帰ル 薄暮時也

廿九日 雨天 蒸気暖

今朝在宿徒然 午後福井片屋助ニより使来かれ送り呉十枚也○熊谷弥助為替手形入書状持参 西大井屋紙□来家信到○香谷来面持参致し画帖二状同人へ頼 仕立方頼置○山本・伊藤両家書状着 ○申刻同道長谷部君・三岡君へ行 皆御留守ニ而本多飛驒様へ罷出ル 御座敷へ被召御酒・御吸物被下 毛受君・長谷君御同席 半井君遅来 初更帰ル 臥ス

晦日 雨霽 北風如剪

今朝梳髪 明日片屋使之者帰ルニ付 送り物荷拵○紙新来ル 大坂木津周行為替手形入書状頼遣ス菓子一箱宛呉ル○三木半来 昨日弘方之礼ヲ述 兩人へ菓子一箱宛呉ル 巳刻同道鳩居へ行 中二行 長谷部君(御留主云)三岡君ヲ訪午飯頂戴 又本多君昨夜之御礼ニ行 帰り午睡未刻長谷部君御尊来ニテ 御供シテ高辻廻り 道具・家具物 津国屋善兵衛方ニテ 御買物被遊 又寺町通り鳩居堂へ行 日暮時に帰り 御屋敷迄御見送り 夕飯頂戴 初更前帰る○今晚七條通り火事

三月朔日 快晴

今朝客舎ニ在 木村勝助来○午後兩人同道出 北村へ寄中二へ行 又植吉へ寄山中君訪 不在ニ而帰ル 谷口靄山ヲ訪不在 藤井竹外翁訪酒肴饗ス出テ二条へ行 三岡様・長谷部君ニ訪皆不在ニテ帰来 至夕

二日 微雨

今日兩人在宿 午前木村来 午後一睡松忠・富士彦等来 今日雨天終日不出 阿春朝より来り居 旅窓一事直到 夕晩江馬召来菓子箱持参 閑談数刻ニ而帰り去○木村書林又来少間ニ而去 就寝

三日 陰天追々晴

今朝同道長谷部・三岡君・南部氏等節句之御祝儀申上 本多様等へ恐悦申上候○帰路中二へ寄鳩居へ寄 三条路筋へ出ル 明日將軍様御上洛ニ付 今日中将様大津へ御乗馬ニ而御迎ニ御出馬被遊候物見相濟寺町へ出 高辻通り津善方へ廻り帰着 午刻少過午飯後在宿至夕○晩木村勝助来 書物類相談ニ而直ニ帰ル○今日鳩居堂へ相訪之節同人上下着用ニ而帰来て申スハ 此三四日之内□□主上様下上加茂社へ御幸有之候ニ付 今日より私共別火可致ト云

四日 快晴 暖気晩雨

今晨起梳髪 將軍様大津より今朝御上洛ニ付 三条御通行ト承候 此時宅迄同道走り参候处 既ニ先刻御通行相濟ト云 時辰刻也 依て暫居テ閑談夫より二条の御屋形へ行長谷・三岡様ニ廻り帰る

午飯後押久・三勇倅兩来寄信至(押久□□□大垣より上ルト云 三勇今日京着ト云)少間話し去 未刻兩人六条の方へ暇乞ニ行 □□様へ行山城様御目通り致し 帰り柴田先生へ寄 御暇乞相濟 夫より寺町へ出途中高桑氏ニ逢 同道鳩居堂へ行方氏墨譜飛脚重印譜など一見致し 至夕同道ニて長谷部様へ行 夜二更帰ル 但晚餐よバレ申候 逢雨テ傘□□ニ而来ル

五日 昨晚より雨未全乾暖気

今朝曇天同道ニ而南部様へ御用ニ而罷出ル 兩人□□之為 雑用金子三拾兩被下置 則兩名ニ而 三岡様并長谷部様御両家へ御礼廻勤致候 帰路笹弥へ寄 木村へ寄 中二へ寄 鳩居行午飯ニよはれ帰ル 此時未刻也 今日帰郷之用意 兩掛荷作等致也 晚沐浴休

六日 快晴 暖気脱衣

今午前在宿 新宮涼介子来少時ニ而去 午飯後同道ニ而出 富士彦へ寄 三条橋通り山中静逸翁へ訪鳩居ニ邂逅し閑談数刻ニ而帰ル 二条へ出中二へ寄少間話し 帰る 申刻後同宿之客紀州藩岩橋東藏殿ト申仁ニ被招 兩人始而相会 酒茶飯等饗応有之 晩ニ至初更頃辞帰る 紙屋千代三来直ニ帰ル 又木村勝助来暫ニ而帰ル 夫より同道長谷部君へ行 御留守ニ而帰来 休息

七日 快晴

今早天飯ヲ不喫シテ同道 長谷部君御旅館江出テ弥三郎と元兩人召連 二條堀川辻へ出 今日將軍様御参内拜見也 辰刻堀川へ浴テ上ル 中立売町小川辺ニ伏居

巳刻前騎馬一騎ト上下武士数十人御駕又上下之武士二
行二数十人 御道□□御馬中將様御駕・御老中御駕・一
橋様御駕 右御通行拝見相済 又長谷部君□出御目通
り致し 朝飯頂キ中二へ寄 鳩居へ寄 夫より客舎へ
帰ル○案摩治療 休息

八日 快晴

今朝梳髪 同道長谷部様へ出御留主にて 三岡様へ出
途中矢嶋藤五郎殿ニ逢 又三岡様出 天方若旦那ニ逢
又矢嶋ニ逢 午時客舎へ帰ル 午飯後早々長谷部様へ
出 三岡様御出御兩人少間御話承候処 最子兩人引取
て□□也 御暇被下難有御受申上候 仍而明後十日出
立と相定帰館 未刻後四条通寺町通土産物相求麩屋町
三条上ル栄久堂にて少々買物致し 薄暮時帰ル○北村
四郎兵衛来 木村勝助来 中嶋屋二兵衛来 皆暫にて
帰去○西大井屋和蔵明日荷物取集一兩日ニ去ト云

九日 漸雨

今朝同道南部様へ行 御先触一通頂戴 御暇乞致し
夫より天方様・松平様へ罷出 昨日本多様・毛受様
夫々御暇乞申上候而退出致候也 途ニ伊藤友四郎様ニ
逢 御暇乞申上候也 帰館耕雪一人木村勝助方へ行
書物代金勘定帰ル 片市・屋尾善来り居 午後西大井屋
和作来 荷物左之通り相渡ス 明日出立ト云

柳兩掛一箇 文庫箱入一箇 植木鉢一提

外ニ山口氏方机一脚

昨日唐本入箱雨紙包二ツ 掛板掛物入一ツ

外ニ時雨蛤四ツ入一包 引スリ二足

書物一包 北村より

唐紙一包 鳩居より

書物箱三ツ 木村より 同色一ツ

蓮鉢一ツ 中二より

✂

今朝紙新千代三来 為荷替金南部様へ書状相添渡ス事
ニ申付□□○午後休暇 於屋来ゑり買入○栄久堂より
机一脚買入 細井矢尾善へ頼遣ス 今日旅館主人御用
ニ而 御役所へ罷出候処 公迎より將軍様御上洛ニ付
為御祝儀御銀五千貫目 此金ニ而六万三千兩被下置候
ト云○今朝御先触一通人足ヲ以 大津問屋へ為持遣ス
受取出来ル

御先触之写

覚

人足六人

右者松平春嶽殿用遣し者式人今日十日□許為立 西近
江通り 国許江被指越候間 別紙泊附之通り宿二人足
無滞可被指出候 以上

亥三月九日 京都

越州役所御印

從江州大津越州新保迄

宿々問屋中へ

泊附

三月十日 衣川

〳 十一日 今津

〳 十二日 葉原

〳 十三日 府中

✂

外ニ兩人より添書

福井表早速道通御頼入候

山口清香

松井耕雪

府中間屋殿

晩木村勝助来 少間ニ而帰去 又鳩居堂来為餞別兩人
へ雨掛壹荷宛贈呉ル 少間ニ而辞帰ル

十日 雨天

今朝竹忠手代・押久・片市等来酒肴出ル 皆々別盃致ス
旅館主人・家内・娘等皆々暇乞ニ出 兩人へ菓子壹箱宛
又家来二人へ風呂敷・扇子贈宿料并茶代兩人へ各々式両
也 娘兩人へ式百疋 下女下男共四人へ貳百疋遣ス 辰
下刻發足 同宿之客紀藩岩橋藤蔵殿へ暇乞 且昨日茶
壹袋宛贈呉候ニ付 今朝兩人より酒三升進申候 雨天
ニ而山口氏三条寺町より駕 耕雪下駄傘ニ而大津迄行
途兩人鳩居堂へ寄昨夜之挨拶 且草間氏進物届ケ方頼
置○片屋市太郎・竹忠手代三条寺町迄送り呉押久三条大
橋迄送り相別ル 夫より□□休息 午刻後大津矢嶋氏
へ着 耕雪大津より駕ニ而未刻兩人駕大津發 唐崎ニ
而午飯 申刻衣川駅藥屋何某投宿

十一日 雨天 寒サ甚

今朝衣川發和辻次キ木戸休 次キ小松 次キ午飯川原
市 次申刻今津着 海老屋九郎助投宿ス○今日巳刻木
戸より和辻へ之途中ニ而天清并利助兩人上京ト云途ニ
而逢 直ニ相別ル 申刻後雨始霽風穩也

十二日 晴天

今朝今津より舟ニ而海津へ渡り 夫より人足ニ而野口
番所へ駕者乗物り通り途中ニ而昼弁当遣イ 谷口ノ手
前ニ而小松屋藤吉ツルカ行ニ逢 薄暮時今庄宿へ着
木地勘へ泊り

十三日 晴天

今朝兩人髮結 五ツ半時頃出立 湯尾峠下り坂之処ニ
而仙之助源助迎ニ来り 角間屋三郎左衛門来夫より
追々来 松森彦助方ニ而弁当酒出ス

浅井権兵衛・三田村甚三郎・同勘太郎・井筒屋太郎・平松
村甚左衛門・増永保次郎・寺田弥平・中屋勘四郎・紙新
金文市左衛門・文三・鎌六・出村屋・国兼屋治助 其外大
勢也

ハツ時帰宅 山口氏同家来共別荘へ 一宿迎人昼飯出
し返ル 夕和田口氏来 伊藤・貴志兩人来

十四日 晴

今朝兩人同道發足 今朝紙新□□□四郎右衛門北府迄
送ル 曙保茶屋迄駕ニ而行 是より歩行途中山口氏迎
人來ル 皆荒井茶屋ニ而酒出 夫より又發足 福井く
り舟より三岡様・長谷部様・本多飛驒様へ回勤致し 山

口氏へ着迎人并皆共酒宴 山本怡仙子福井ニ在 今晚
山口氏泊り 元助供也

十五日 晴天

今朝山口氏同道回勤致ス 勝木十蔵様・南部彦助様・能
勢角太夫様 序ニ成見如山子・天方様・松平様・岡部様・
狛様・毛受様・横井様・御勘定会所右ニ而相済 山口氏
へ帰ル 未刻也 昼飯遣 天井へ行テ山本氏同道ニ而
帰ニ七ツ半時也 明保迄歩行 夫より山本駕ニ而長泉
寺迄来ル 又耕雪代りて駕ニ而帰ル 夜四ツ半時也
夫より浴飯致候而 東南へ来り泊ル 凡九ツ半時也

菓子一箱 天方様より

十六日 晴天

今朝清八来り □井儀兵殿来り 午飯後耕雪町奉行瀧
口氏・高木□□氏酒井和田の両家へ回勤致し返ル 晩方
和田□□氏へ参ル 阿□□喜多栄太郎・千代来り 酒宴
九ツ時帰り 本宅泊り

十七日 今朝雨午後晴

今朝和田様御出暫閑談 梳髪町方礼廻り 八ツ時より
松村寄会 山本・増永・此方・松村・庄八五人薄暮時帰ル
東通へ来 拝領之御菓子配分

■『諸日記(抄)』

文政二年仲秋廿五日より

諸日記(抄)

- 一 当国金当年迄通用六拾□匁兩かへニ御座候処今
月より六拾五匁ニ兩かへ致申候□
文化十四丑三月五日より

文政三辰五月廿二日 大雨夜九ツ時ニ東谷本高寺山崩
レ 庵表へ押込座敷ハ残 其外ハ押つふれ申候容々大
変也 東谷上人書状参ル 寺より式升男為持見舞 廿
三日・廿四日同行より岩喜寺又行

廿二日夜糠之浦山拔 家ニ軒つふれ 人七人死申候由
希有之大変也 白鬼女村上五六十男切ニ候て村中より
五郎丸へ水行申候

十七日 西川大水 広瀬川ニ而壱人死申候 氣生立し
て水ニ溺死申候 可慎可恐

(文政三)

町医 御扶持人御用達

三井道長	当時町代細物屋権左衛門
島山徳庵	安立平三郎
山室吉発	□木□甚兵衛
石田周庵	平野屋庄三郎
松原幸作	薄金弥太郎
佐藤宗硯	岩永屋庄吉
□□□□	大良屋勘兵衛
渋谷喜左衛門	井筒屋七郎兵衛

松井六左衛門

□辰美より

文政三辰 年始御礼武留

別座 御扶持町人

浅井永三郎 小□五郎左衛門

桑野屋来三郎 高□宗吉

大文字屋政左衛門 春田甚四郎

細物屋権左衛門 田中茂四郎

町代揃役 清水惣助

近江屋久兵衛 田中六兵衛

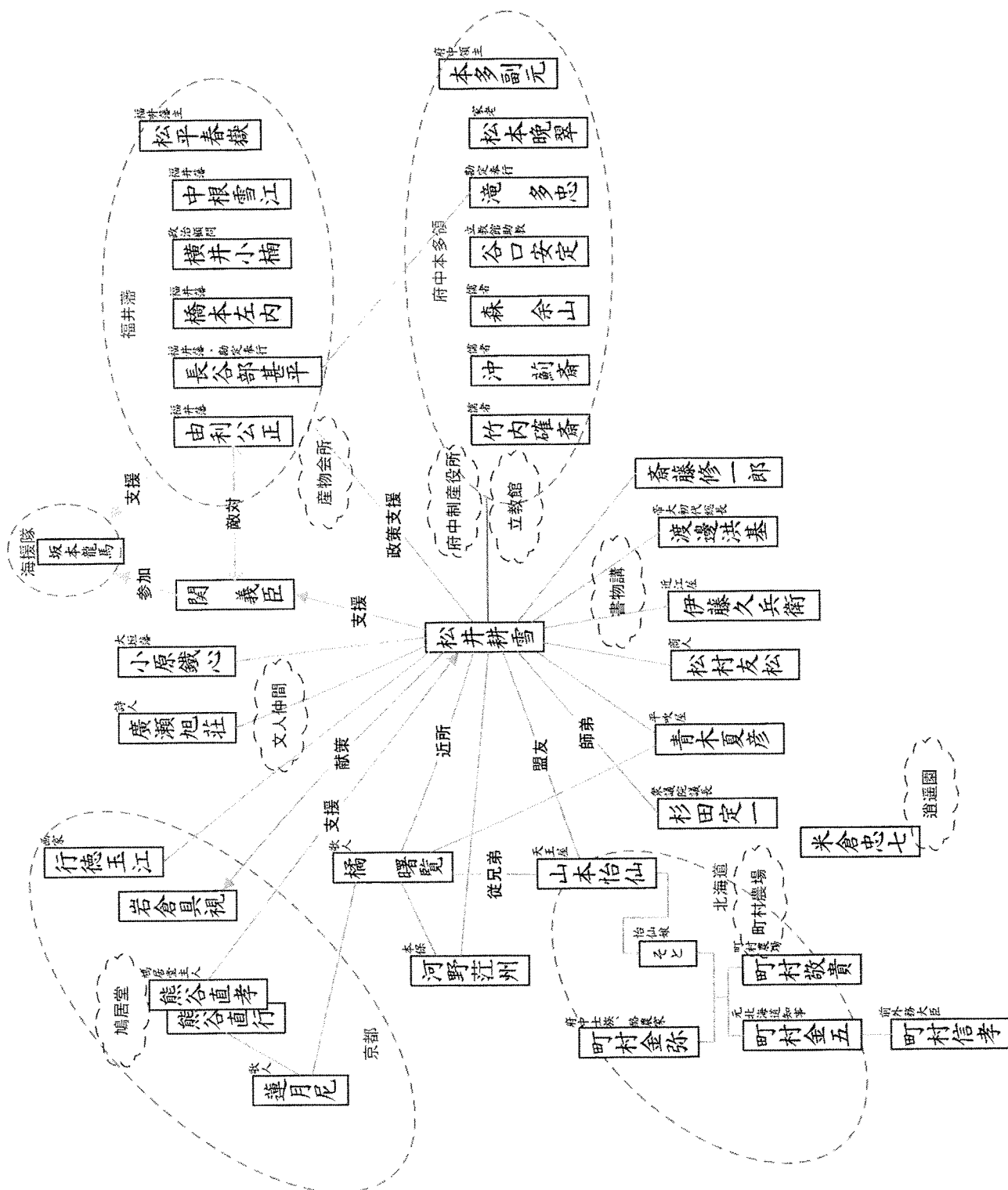
辰十二月廿八日 惣礼ヨリ此席へ出ル 辰八月御祝
ニ付御宿鍵屋善左衛門ニ而米沢藤蔵ト席論有り 米藤
格ノ二座久兵衛ハ惣礼右上席也 然共米藤御上受ヨロ
シカラス 依テ始終受アシシ 然処へ進久ヨリ □州
出□敷献上 扱二代町代ヲ申迄此席へヌケル也 細物
屋ハ役□ハ元ノ席久兵衛代金ノ席 細物屋隠居大ニフ
キゲン

文政四巳五月十五日

一当五月十五日昼驟雨 頻リニ東冷風ニ而霰マジリフ
リ申候

* 掲載にあたっては、写本に記されている赤および鉛
筆の訂正に従った。また、理解を助けるため文意から判
断して一部訂正して掲載した箇所がある。

関係人物略図

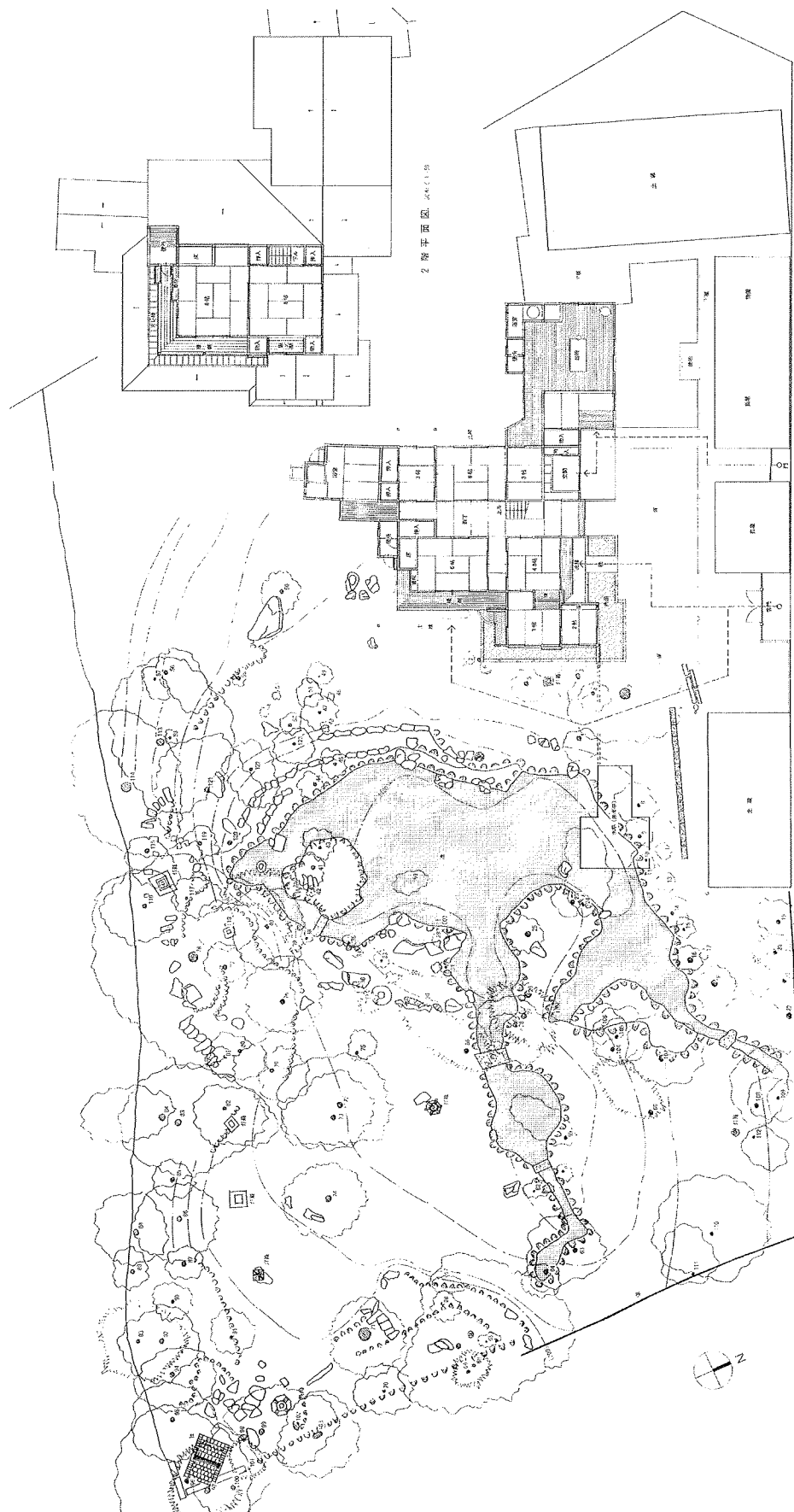


関係地図



〔国土画像情報(カラー空中写真) 国土交通省〕

逍遥園平面図(『在りし日の武生の文化サロン 逍遥園』より)



1 園平面図 昭和十一年
宮内省工部省建築局設計事務所設計

図表第一版

図表第一版	図表第二版	図表第三版	図表第四版	図表第五版	図表第六版	図表第七版	図表第八版	図表第九版	図表第十版	図表第十一版	図表第十二版	図表第十三版	図表第十四版	図表第十五版	図表第十六版	図表第十七版	図表第十八版	図表第十九版	図表第二十版	図表第二十一版	図表第二十二版	図表第二十三版	図表第二十四版	図表第二十五版	図表第二十六版	図表第二十七版	図表第二十八版	図表第二十九版	図表第三十版	図表第三十一版	図表第三十二版	図表第三十三版	図表第三十四版	図表第三十五版	図表第三十六版	図表第三十七版	図表第三十八版	図表第三十九版	図表第四十版	図表第四十一版	図表第四十二版	図表第四十三版	図表第四十四版	図表第四十五版	図表第四十六版	図表第四十七版	図表第四十八版	図表第四十九版	図表第五十版	図表第五十一版	図表第五十二版	図表第五十三版	図表第五十四版	図表第五十五版	図表第五十六版	図表第五十七版	図表第五十八版	図表第五十九版	図表第六十版	図表第六十一版	図表第六十二版	図表第六十三版	図表第六十四版	図表第六十五版	図表第六十六版	図表第六十七版	図表第六十八版	図表第六十九版	図表第七十版	図表第七十一版	図表第七十二版	図表第七十三版	図表第七十四版	図表第七十五版	図表第七十六版	図表第七十七版	図表第七十八版	図表第七十九版	図表第八十版	図表第八十一版	図表第八十二版	図表第八十三版	図表第八十四版	図表第八十五版	図表第八十六版	図表第八十七版	図表第八十八版	図表第八十九版	図表第九十版	図表第九十一版	図表第九十二版	図表第九十三版	図表第九十四版	図表第九十五版	図表第九十六版	図表第九十七版	図表第九十八版	図表第九十九版	図表第一百版
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

年 表

文化9年	1812		橘曙覧、福井の紙筆墨商の長男として生まれる。翌年母が没したため母の実家天王屋(山本家)に養われる。[武生市史]
文政2年	1819	3月	松井耕雪、府中大黒町(現元町)に生まれる。[松井耕雪翁伝]
文政11年	1828		山本怡仙、府中天王屋(現天王町)に生まれる。[山本怡仙小伝(武生郷友会誌)]
天保9年	1838	10月	松平春嶽(慶永)、福井藩を継ぐ。[福井県史]
天保10年	1839	4月	関義臣、山本房勝の次男として府中馬場町に生まれる。[第一号履歴撮要竝冤獄記事]
弘化4年	1847	12月	渡邊洪基、医者渡邊静庵の長男として府中善光寺通り(現京町2丁目)に生まれる。[夢 渡邊洪基伝]
安政3年	1856		立教館が設立される。[松井耕雪翁伝]
安政5年	1858	4月	横井小楠、福井に招聘される。[福井県史]
		5月	耕雪、家督を仙之助に譲り隠居する。[松井耕雪翁伝]
		7月	春嶽、謹慎を命じられる。[福井県史]
		12月	耕雪、小楠と初めて会う。[松井耕雪翁伝]
安政6年	1859	1月	町村金弥、本多家館北側(現府中一丁目)に町村織之丞の長男として生まれる。[町村金五伝]
		1月	耕雪、一時帰国していた横井小楠を熊本に訪ね、長崎を視察する。(5月帰国)[松井耕雪翁伝]
		7月	耕雪、府中制産役所元締役を命じられる。[松井耕雪翁伝]
		7月	耕雪、福井藩制産係世話を命じられる。[松井耕雪翁伝]
		8月	立教館教授沖薊斎、助教竹内確斎が相次いで没する。[松井耕雪翁伝]
万延元年	1860	3月	耕雪、逍遙園を建設する。(12月完成)[松井耕雪翁伝]
文久元年	1861	11月	耕雪、怡仙、福井藩産物会所元締役を命じられる。[諸役人并町在御扶持人姓名]
			伊予吉田藩儒者森余山が立教館教授となる。[松井耕雪翁伝]
			耕雪、府中町役所総代となる。[松井耕雪翁伝]
文久2年	1862	5月	耕雪、妻貞と上洛する。(6月帰国)[文久二年上京記(写)]
		7月	松平春嶽、政事総裁職に任じられる。[福井県史]
			大垣藩家老小原鉄心、逍遙園に遊ぶ。[松井耕雪翁伝]
文久3年	1863	1月	耕雪、福井の米問屋山口小左衛門と上洛する。(3月帰国)[文久三年上京記(写)]
		2月	春嶽、入京する。[文久三年上京記(写)]
		3月	春嶽、政事総裁職を辞す。[福井県史]
元治元年	1864	5月	仕足屋権兵衛(浅井権兵衛)、福井藩産物会所元締役を命じられる。[諸役人并町在御扶持人姓名]
			立教館が本多家館内に移転する。[松井耕雪翁伝]
			東南御屋敷奉行 大浦十次郎(十石二人)[本多家給帳]
慶応元年	1865	5月	米屋保次郎、福井藩産物会所元締役を命じられる。[諸役人并町在御扶持人姓名]
慶応2年	1866	12月	義臣、長崎に行き坂本龍馬・後藤藤二郎と会い、亀山社中(海援隊)に参加。[第一号履歴撮要竝冤獄記事]
明治元年	1868		耕雪、福井藩総会所総代となり、福井に移る。[松井耕雪翁伝]
明治2年	1869	6月	版籍奉還が行われる。
		6月	義臣が、福井藩吏により大坂から武生へ連れ戻され、逍遙園などに幽閉される。[秋聲窓詩抄別集]
		11月	福井藩が武生(府中)の知行権を本多家から取り上げ直接支配とする。[福井県史]
		11月	耕雪、総会所辞任願を提出する。[松井家文書]
			耕雪、岩倉具視に国家経済策を献じる。[松井耕雪翁伝]
明治3年	1870	8月	武生騒動。大黒町の耕雪宅および天王屋(怡仙宅)も襲われる。[松井耕雪翁伝]
		8月	義臣、武生騒動に連座したとして、入獄せられる。[第一号履歴撮要竝冤獄記事]
		9月	耕雪、福井藩大属に任じられる。[松井耕雪翁伝]

明治4年	1871	7月	廃藩置県が行われる。
		11月	洪基、岩倉具視らの特命全権大使の随行員となりアメリカへ出港。(翌年帰国)[夢 渡邊洪基伝] 耕雪、足羽県中属に任じられる。[松井耕雪翁伝]
明治5年	1872		耕雪、敦賀県権大属に任じられる。[松井耕雪翁伝]
			進脩小学校開校。怡仙、学務委員となる。[山本怡仙小伝]
明治6年	1873	11月	『単語篇』が武生龔明舎から刊行される。
明治9年	1876	8月	耕雪、敦賀県が廃止されたため、退官する。[松井耕雪翁伝]
		10月	本多鼎介編『越前地誌略』が刊行される。
		11月	耕雪、京都に移る。(西洞院六角上街立木彦兵衛宅)[耕雪日記]
		12月	耕雪、柳馬場六角上ル土屋町112番地の福田市次郎所持屋に移る。[耕雪日記] 佐久間正訳『小学人体問答』が刊行される。
明治10年	1877	4月	松平春嶽、元鳥取藩主池田慶徳、元岡山藩主で慶徳の弟池田茂政らと京都の耕雪宅を訪問し、耕雪宅の2階応接間を「寸碧楼」と名づける。[耕雪日記]
		春	怡仙、東京に移る。芝区田村町渡辺洪基邸付近に住む。[山本怡仙小伝]
		8月頃	金弥が札幌農学校に第2期生として入学する。(明治14年7月卒業)[北大百年史]
		10月	耕雪、京都府史編輯嘱託に任じられる。(明治13年1月退官)[耕雪日記]
明治11年	1878		佐久間正・木下義雄訳『万国地誌略図訳解』が刊行される。[武生風土記]
明治12年	1879	8月	怡仙、北海道に渡り、開拓使庁工業局に勤務する。[南條郡誌]
		秋	怡仙、由利公正等のすすめにより、北海道に渡り、開拓使庁工業局に勤務する。[山本怡仙小伝]
明治13年	1880	6月頃	怡仙が携わった北海道札幌郡月寒村での瓦製造が始まる。[北海道立文書館文書]
		9月	怡仙、石狩川沿岸の地質調査中の落馬が原因で没する。享年52歳。[山本怡仙小伝]
明治14年	1881	12月	耕雪、蛸薬師堺町の鳩居堂別宅に移る。[耕雪日記]
明治17年	1884	1月	逍遙園が円明寺(塚町)住職井上日勇に売却される。(以後、米倉家が所有)[逍遙園売券證]
明治18年	1885	5月	耕雪、没する。享年66歳。本能寺に葬られる。[松井耕雪翁伝]
		6月	洪基、東京府知事に任じられる。[夢 渡邊洪基伝]
明治19年	1886	3月	洪基、帝国大学(現東京大学)初代総長に任じられる。[夢 渡邊洪基伝]
明治22年	1889	4月	谷口松軒著『魁本大字類苑』が刊行される。
明治23年	1890	5月	龍泉寺に「耕雪松井翁碑」が建立される。[松井耕雪翁伝]
明治24年	1891	5月	本能寺に耕雪の墓碑が建立される。[松井耕雪翁伝]
明治34年	1901	5月	洪基、東京で没する。享年53歳。[夢 渡邊洪基伝]
大正6年	1917	9月	町村敬貴、石狩郡樽川に町村農場を創業。(昭和3年に江別に移転)[町村敬貴伝]
大正7年	1918	3月	義臣、東京にて没する。享年78歳。[第一号履歴撮要並冤獄記事]
昭和9年	1934	11月	耕雪の没後50年を記念して、「建学記念碑」が立教館跡である武生町公会堂前に建てられる。 公会堂で、耕雪遺墨展が開催され、『松井耕雪翁伝』が刊行される。[松井耕雪翁伝]
昭和14年	1939	9月頃	馬越祐一が逍遙園に管理人として一家で移り住む。(昭和18年夏頃まで)[馬越祐一展図録]
		12月頃	洋画家寺田政明と北川民次が逍遙園を訪れる。[馬越祐一書簡]
昭和19年	1944	11月	金弥、疎開先の武生天王屋で没する。享年85歳。[町村金五伝]
平成2年	1990	8月	逍遙園が解体される。
平成7年	1995	12月	『在りし日の武生の文化サロン 逍遙園』が武生ルネサンスから刊行される。
平成15年	2003	10月	逍遙園の襖の下張り文書が武生ルネサンスより武生市教育委員会に寄贈される。
平成17年	2005	7月	平成17年度企画公募展「逍遙園 襖の下張り展」が武生市公会堂記念館で開催される。(7月1日～31日)

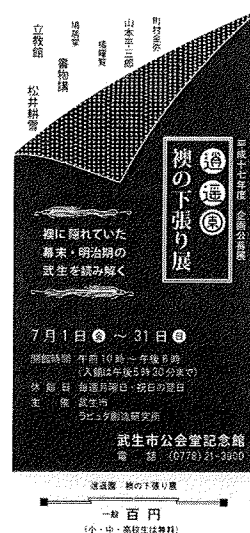
目 録

No.	資 料 名	員数	制作年代	材質技法	法量(縦×横) cm	所蔵先
1. 松井耕雪						
1	松井耕雪筆「山水図」	一幅	明治 17 年 (1884)	絹本着色	133.0 × 57.5	越前市武生公会堂記念館
2	松井耕雪筆「松梅図」	対幅	幕末～明治時代(19世紀)	紙本墨画淡彩	(各) 122.0 × 29.0	個人蔵
3	松井耕雪宛書簡等貼交屏風	六曲一隻	明治初期 (19 世紀)	紙本墨書	117.5 × 274.0	個人蔵
4	松井耕雪・森余山等書画図屏風	二曲一隻	文久 2 年 (1862)・明治 5 年 (1872)	紙本墨書	(各) 111.1 × 61.7	個人蔵
2. 逍遙園						
5	逍遙園棟札	一面	万延元年 (1860)	板地墨書	縦 67.5・横 12.5・厚 2.0	越前市立図書館
6	本多副昌筆「逍遙園」扁額	一面	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	24.6 × 73.0	越前市立図書館
7	逍遙園懸魚	一点	江戸末期 (19 世紀)	木造	幅 230.0・奥行 5.0・高 65.0	個人蔵
8	井手今滋編『橘曙覧全集』	一冊	昭和 2 年 (1927) 発行	紙・印刷	22.5 × 15.0	越前市立図書館
9	橘曙覧筆書幅 「府中の青木夏彦とふらひたりけるに」	一幅	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	30.9 × 31.2	個人蔵
10	橘曙覧筆書幅「かやり」	一幅	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	85.5 × 41.5	個人蔵
11	橘曙覧筆 和歌幅「老櫓」	一幅	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	98.5 × 28.8	個人蔵
12	米倉忠七像衝立	一面	不詳	絹本着色	31.1 × 20.8	個人蔵
13	逍遙園真景図衝立	一面	明治 20 年 (1887)	紙本墨画淡彩	145.5 × 115.5	個人蔵
14	馬越祐一「花と桃」	一点	1940 年代	油彩・キャンバス	90.7 × 72.9	越前市武生公会堂記念館
15	馬越祐一「砂丘の貝がら」	一点	昭和 35 ～ 38 年頃 (1960 ～ 63)	油彩・合板	23.2 × 55.8	越前市武生公会堂記念館
3. 立教館						
16	松井耕雪宛書簡 (逍遙園文書 No. 1)	一通	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	15.8 × 52.6	越前市教育委員会
17	松井耕雪宛竹内確斎書簡 (逍遙園文書 No. 8)	一通	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	15.8 × 44.9	越前市教育委員会
18	増評唐宋八大家文読本 (立教館印)	一冊	安政 2 年 (1855) 発行	紙・木版	23.0 × 16.0	越前市立図書館
19	□竹内確斎筆「立教館」扁額	一面	安政 3 年 (1856)	板地刻文	75.0 × 169.0	越前市武生東小学校
20	□松平春嶽筆「進脩書院」扁額	一面	文久 2 年頃 (1862)	紙本墨画	31.5 × 88.0	越前市武生東小学校
21	八木静馬筆『静馬一代ノ経歴録』	一冊	明治 40 年 (1907)	紙本墨書	24.3 × 16.4	個人蔵
22	森余山書等貼交屏風	六曲一双	幕末～明治中期(19世紀)	紙本墨書	(各) 140.0 × 50.0	個人蔵
23	建学記念碑絵葉書	一点	昭和 9 年 (1934)	紙・印刷	13.9 × 8.9	個人蔵
24	松井耕雪翁建学記念事業寄附芳名録	一冊	昭和 9 年 (1934)	紙本墨書	26.0 × 19.5	越前市立図書館
25	松井耕雪先生五十年祭記念 遺墨展覧会出品目録	一枚	昭和 9 年 (1934)	紙・印刷	39.0 × 55.0	個人蔵
4. 福井藩と松井耕雪						
26	松井耕雪宛書簡 (逍遙園文書 No. 21)	一通	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	15.8 × 51.4	越前市教育委員会
27	松井耕雪宛書簡 (逍遙園文書 No. 31)	一通	江戸末期 (19 世紀)	紙本墨書	15.8 × 27.0	越前市教育委員会
28	『文久三年上京記』(写)	一冊	昭和 40 年頃 (1965) 写	紙・インク	25.7 × 19.0	越前市教育委員会
29	『(諸役人并町在御扶持人姓名)十三 御国在方』	一冊	江戸時代	紙本墨書	28.0 × 18.7	松平文庫(福井県立図書館保管)
30	松井耕雪総会所辞任願	一冊	明治 2 年 (1869) 頃	紙本墨書	15.4 × 43.6	個人蔵
31	山本怡仙他宛 関義臣・由利公正等書簡貼交屏風	六曲一隻	幕末～大正時代(19～20世紀)	紙本墨書	136.4 × 270.3	越前市武生公会堂記念館
32	関義臣筆「舎長手控」	一冊	安政 4 年 (1857)	紙本墨書	24.2 × 16.8	越前市立図書館
33	関義臣備忘録	二冊	元治元年 (1864) 5・9 月	紙本墨書	15.7 × 12.0	越前市立図書館
34	関義臣日記	一冊	明治 2 年 (1869)	紙本墨書	27.2 × 20.4	越前市立図書館
35	関義臣筆「奉職始末前記」	一冊	明治 4 年 (1871)	紙本墨書	25.0 × 16.8	越前市立図書館
36	関義臣筆「奉職始末後記」(甲乙)	二冊	明治 4 年 (1871)	紙本墨書	25.0 × 16.8	越前市立図書館

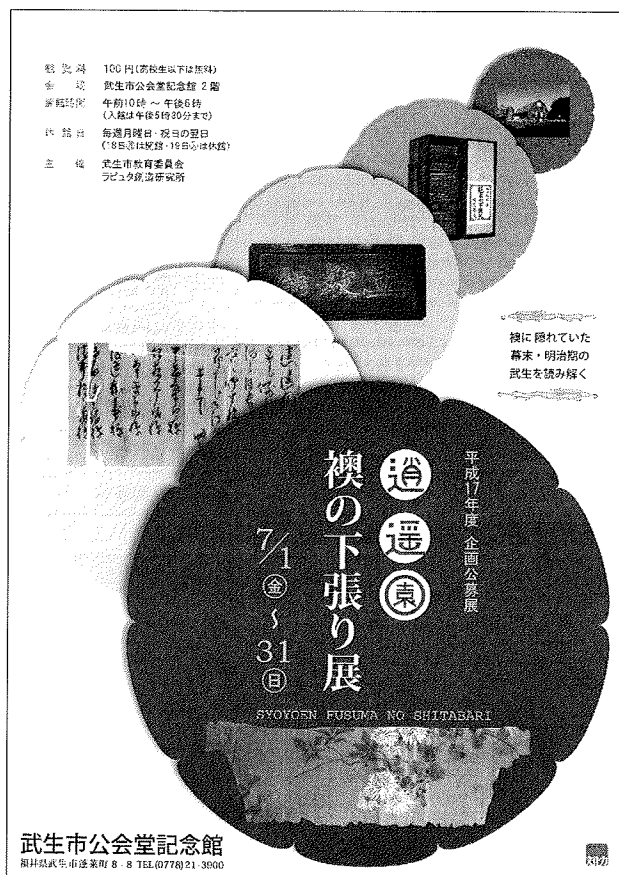
No	資料名	員数	制作年代	材質技法	法量(縦×横) cm	所蔵先
37	関義臣筆『明治六年中公布概略』	一冊	明治6年(1873)	紙本墨書	16.5 × 13.5	越前市立図書館
38	関義臣筆『第一号履歴撮要並冤獄記事』	一冊	明治30年(1897)	紙本墨書	28.0 × 20.0	越前市立図書館
39	関義臣筆『山本家概略』	一冊	不詳	紙本墨書	25.0 × 17.0	越前市立図書館
40	関義臣筆『山本氏家系』	一冊	不詳	紙本墨書	24.3 × 17.0	越前市立図書館
41	関義臣筆『誄詞 十日祭詞 三十日兼五十日祭詞』	一冊	不詳	紙本墨書	28.3 × 19.9	越前市立図書館
42	関義臣筆『香樹園蕙蘭培養説抄』	一冊	不詳	紙本墨書	24.0 × 16.6	越前市立図書館
43	芳賀八弥著『由利公正』(関義臣付箋付)	一冊	明治35年(1902)発行	紙・印刷	18.8 × 12.5	越前市立図書館
44	由利公正筆『五箇条の御誓文』扁額	一面	明治41年(1908)	絹本墨書	55.0 × 121.2	越前市武生公会堂記念館
5. 北海道へ(山本怡仙と町村金弥)						
45	松井耕雪宛山本怡仙書簡(逍遙園文書No.2)	一通	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	16.2 × 38.6	越前市教育委員会
46	松井耕雪宛山本怡仙書簡(逍遙園文書No.60)	一通	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	16.0 × 18.8	越前市教育委員会
47	天王屋徳利	一点	不詳	陶器	高さ21.0	福井県立歴史博物館
48	松本晩翠宛電報	一通	明治13年(1880)3月	紙本墨書	—	北海道立文書館
49	山本怡仙筆『瓦焼の義に付心付申上の件』	一冊	明治13年(1880)6月	紙本墨書	—	北海道立文書館
50	瓦焼創業諸事録	一冊	明治13年(1880)7月	紙本墨書	—	北海道立文書館
51	山本怡仙筆『瓦焼製造原価勘定書』	一冊	明治13年(1880)7月	紙本墨書	—	北海道立文書館
52	イエスを信ずる者の契約	一点	明治10年(1877)起草	紙・インク	—	札幌独立キリスト教会
53	第2期生卒業後の就職希望分野上申	5枚	明治14年(1881)7月	紙・インク	—	北海道大学付属図書館
6. 鳩居堂						
54	松井耕雪宛書簡(逍遙園文書No.5)	一通	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	16.3 × 80.1	越前市教育委員会
55	松井耕雪日記	十冊	明治9～16年(1876～83)	紙本墨書	(各)25.0 × 17.0	個人蔵
56	松井耕雪筆『松平春嶽和歌・松井耕雪漢詩』	一点	明治10年(1877)4月頃	紙本墨書	16.0 × 21.6	個人蔵
57	松井耕雪宛松平春嶽書簡	一通	明治10年(1877)4月頃	紙本墨書	20.6 × 30.0	個人蔵
58	松井耕雪筆『松梅繁昌図』	一幅	明治12年(1879)	統本墨画	56.6 × 31.0	個人蔵
7. 書物講						
59	書物講口上(逍遙園文書No.9)	一通	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	15.8 × 50.0	越前市教育委員会
60	松井耕雪翁蔵書点検録(写)	一冊	昭和6年(1931)写	紙本墨書	26.7 × 19.3	越前市立図書館
61	『靖海全書』(松井耕雪蔵書印)	一冊	江戸時代(19世紀)	紙・木版	27.2 × 18.1	越前市立図書館
62	魁本大字類苑紙型	二箱	明治22年頃(1889)	紙	(各)23.5 × 17.5	越前市立図書館
63	谷口松軒著『魁本大字類苑』	一冊	明治22年(1889)発行	紙・鉛版	26.0 × 18.5	越前市立図書館
64	本多鼎介著『越前地誌略』	一冊	明治9年(1876)発行	紙・木版	21.7 × 14.7	越前市立図書館
65	青柳完治編『小学暗記問答 上』	一冊	明治16年(1883)発行	紙・木版	18.2 × 12.8	越前市立図書館
66	渡邊洪基筆『逍遙園』扁額	一面	明治23年(1890)	紙本墨書	33.3 × 119.3	個人蔵
8. 逍遙園文書						
67	牡丹図	一点	江戸末期(19世紀)	紙本着色	25.5 × 80.5	越前市教育委員会
68	蓮 図	一点	江戸末期(19世紀)	紙本着色	26.5 × 82.7	越前市教育委員会
69	菊 図	一点	江戸末期(19世紀)	紙本着色	26.3 × 84.5	越前市教育委員会
70	梅 図	一点	江戸末期(19世紀)	紙本着色	25.5 × 66.7	越前市教育委員会
71	松井耕雪宛行徳玉江書簡(逍遙園文書No.3)	一通	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	15.6 × 55.7	越前市教育委員会
72	松井耕雪宛広瀬旭莊書簡(逍遙園文書No.27)	一通	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	16.5 × 27.0	越前市教育委員会
73	松井耕雪宛関義臣書簡(逍遙園文書No.40)	一通	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	14.3 × 46.6	越前市教育委員会
74	献立内容(逍遙園文書No.58)	一点	江戸末期(19世紀)	紙本墨書	14.2 × 83.4	越前市教育委員会

事業概要

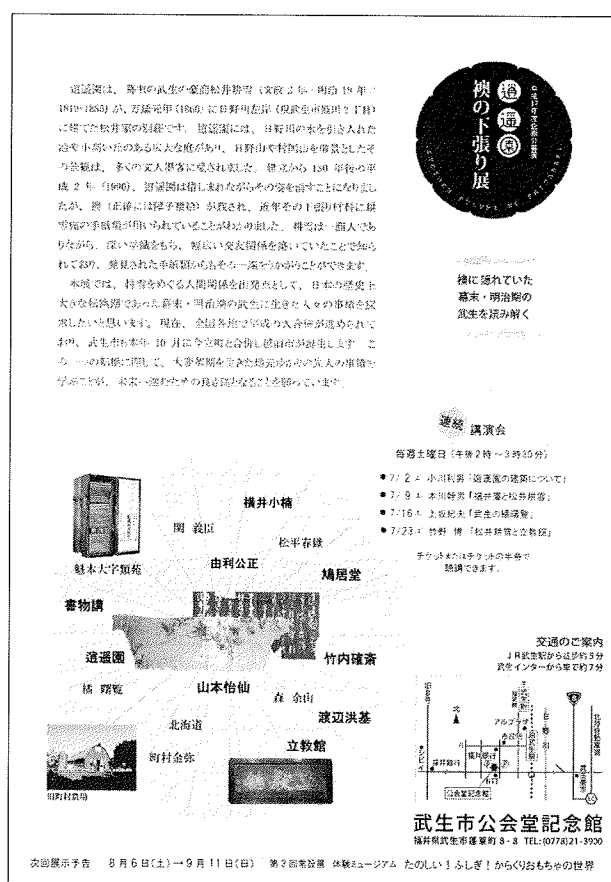
1. 名 称 平成17年度企画公募展「逍遙園 襖の下張り展」
2. 会 期 平成17年7月1日(金)～7月31日(日)
3. 目 的 幕末の武生の豪商・松井耕雪の別荘であった逍遙園の襖の下張りから発見された耕雪宛の手紙類を基に、幕末から明治期の武生の歴史を解説する。
4. 入 館 料 100円(高校生までは無料)
5. 開館時間 午前10時～午後6時(入館は午後5時半まで)
6. 休 館 日 毎週月曜日・祝日の翌日
7. 内 容
 - (1) 展覧会の開催
 - (2) デジタルアーカイブ及び資料集の作成
 - (3) 記念講演会の開催(毎週土曜日 午後2時～3時半)
8. 主 催 武生市教育委員会・NPO 法人ラピュタ創造研究所
9. 後 援 武生市・株式会社サイエンスクラフト
10. 入館者数 784名



入場券



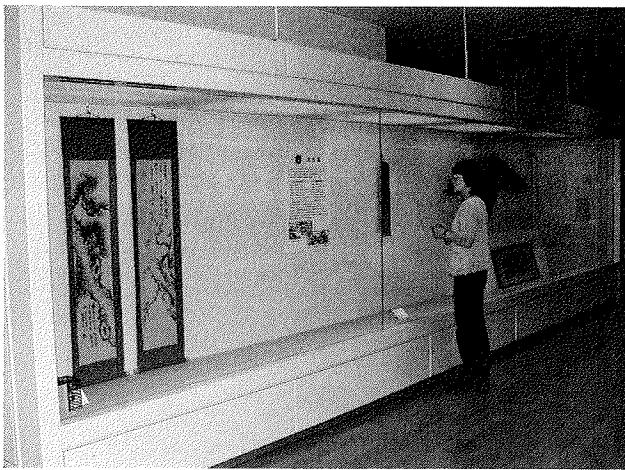
ポスター(ちらし表)



ちらし(裏)



展示風景 第2会場(展示室2)



展示風景 第1会場(展示室1)



講演会(第2回「福井藩と松井耕雪」本川幹男氏)

参考文献

- 『魁本大字類苑』 谷口松軒著・谷口安定編 明治22年(1889)
- 『武生郷友会誌』 武生郷友会 明治23年(1890)～
- 『秋聲窓詩抄別集』 関義臣 明治27年(1894)
- 『第一号履歴撮要竝冤獄記事』 関義寿編 大正12年(1923)
- 『鶚軒游戲』 土肥慶蔵 改造社 昭和2年(1937)
- 『橘曙覧全集』 井手令滋編 岩波書店 昭和2年(1937)
- 『福井県南條郡誌』 南條郡教育会 昭和9年(1944)
- 『松井耕雪翁伝』 松井耕雪翁遺徳顕彰会 昭和9年(1944)
- 『府中医学所 思精館』 南条郡医師会月次医学会 昭和11年(1946)
- 『武生市史 資料篇 人物・系譜・金石文』 武生市 昭和41年(1976)
- 『維新のころの鳩居堂』 鳩居堂 昭和43年(1968)
- 『町村敬貴伝』 町村敬貴記念事業の会 昭和46年(1971)
- 『夢 渡辺洪基伝』 渡辺進 昭和48年(1973)
- 『武生風土記』 武生市文化協議会 昭和49年(1974)
- 『武生市史 概説篇』 武生市 昭和51年(1976)
- 『北大百年史 札幌農学校史料(一)』 北海道大学 昭和56年(1981)
- 『町村金五伝』 北海タイムス編 町村金五伝刊行会 昭和57年(1982)
- 『北大百年史 通説』 北海道大学 昭和57年(1982)
- 『福井市史 資料編3 近世一』 福井市 昭和61年(1986)
- 『武生越前府中本多家家臣録(二)』 丹南史料研究会 平成6年(1994)
- 『福井県下商工便覧(復刻版)』 武生ルネサンス 平成6年(1994)
- 『福井県史 通史編5 近現代一』 福井県 平成6年(1994)
- 『在りし日の武生の文化サロン 逍遙園』 武生ルネサンス 平成7年(1995)
- 『福井県史 通史編4 近世二』 福井県 平成8年(1996)
- 『海へのノスタルジー 馬越祐一』 武生市公会堂記念館 平成11年(1999)
- 『福井市史 資料編7 近世五 町方』 福井市 平成14年(2002)
- 『近現代日本人物史料情報辞典』 伊藤隆・季武嘉也編 吉川弘文館 平成16年(2004)
- 『天下の事成就せり - 福井藩と坂本龍馬 - 』 福井市立郷土歴史博物館 平成16年(2004)

謝 辞

展覧会の開催および本資料集の制作にあたり、資料のご所蔵者をはじめ関係各位・機関の多大なご協力を賜りました。ここにご芳名を記し心よりお礼申し上げます。また、ここにご芳名を記すことのできなかった方々にも、心よりお礼申し上げます。(敬称略・五十音順)

青木完太郎	増田眞喜子	越前市武生東小学校
井手上恵子	町村 均	越前市立図書館
井上 猛	松井 厚	江別市教育委員会
上坂紀夫	松井 透	京都鳩居堂
内田好美	松井 寛	札幌独立キリスト教会
小川利男	松平宗紀	正蓮花吉澤資料館
熊谷純三	水島直文	武生ルネサンス
竹野 博	宮脇豊三	福井県立図書館
角鹿尚計	本川幹男	福井県立歴史博物館
長野栄俊	八木昌泰	福井市 市史編さん室
中村未央	吉澤康正	北海道大学附属図書館
西田文則	米倉 繁	北海道立文書館
馬越靖郎	米倉まさ子	本能寺
		町村農場

逍遙園 襖の下張り展資料集

会 期 平成17年7月1日～ 31日
主 催 武生市教育委員会(現越前市教育委員会)
NPO 法人ラピュタ創造研究所
後 援 武生市(現越前市)
株式会社サイエンスクラフト

発行日 平成18年3月31日
編集・発行 越前市武生公会堂記念館
〒915-0074
福井県越前市蓬萊町8-8
TEL 0778-21-3900
印 刷 伊部印刷株式会社